歐人の眼に映じたる日露戰爭

中央公論

第十九年第四號

內容

THE CENTRAL REVIEW

明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可
毎月一日發行　明治卅七年五月一日

日露戰報と軍國畫報と相俟つて光彩を放つ

▲大高評▼
初版五萬部賣盡し
再版出來す

日露戰報定期增刊
壹卷四月三日發行

日露戰報

◀主要記事▶

●日露戰報欄……第二回旅順港閉塞隊の活劇は壯絶悽絶。
●軍國彙報欄……艦長列傳は寫眞畫と照寫し其人を見るが如し。
●軍國叢談欄……米國ムーア博士の海戰實見譚あり。
●戰時文藝欄……中村春雨が豫備少尉は愈よ佳境に入れり。
●戰時教育欄……三上博士藤山教授等の軍國領要記事を滿載。
●戰時通信欄……廣瀨中佐及某艦長の私信を掲ぐ。
●戰時講談欄……伯知子の雄辯軍神廣瀨中佐の面目躍如たらしむ。

●每月三回七の日 第八號●四月十七日發行
▲正價一册十錢 郵稅一錢 六册郵稅共六十三錢
各種懸賞文の當撰披露及大募集あり

◀寫眞▶

●伏見宮殿下、奥大將、大島、小川の二師團長、(光澤寫眞版)
●驅逐艦、電、雷、東雲、鵲、鴿、の艦長五名と電雷東雲の三艦
●旅順攻擊の勇士中條、山賀、馬島、大曲、島田、近藤、眞野の七名
●海戰に於ける名譽の戰死者十名及陸戰に於ける名譽戰死者三名
●旅順後方の山より見下したる同港全景、及同港露國守備砲兵
●浦鹽の停車場と波止場、露國兵士の家族、露國の海軍大尉と夫人
●滿州奉天城裏の景及淸國名士、張、袁、馬、の三將軍

每月一回三日發行 繪畫及び寫眞七十九葉

軍國畫報

▲正價一册廿八錢 三册八十二錢 六册一圓五十八錢 十二册三圓 郵稅一册二錢

發行所 東京市神田裏神保町 電話本局千三十六番 冨山房
賣捌所は全國書籍雜誌店

中央公論

本號目次



口繪說明

繊弱なる女性の身を以て、砲烟彈雨を冒し、血を浴び垢を舐り、修羅の巷に傷者を勞ふ、彼女また好戰士たらずや、「インノーセント、ヴィクチム」先年コロムビヤ萬國博覽會に出品したる米人トーマス、シイモアーの筆にして、赤十社會に屬する、Sister of Mercyが敵彈に斃れたる一人（圖の右方）を救助せんとして端なくも亦た敵彈に中りて永眠する光景なり、見よシスタアの顏容何等の苦痛もなく何等の怨恨もなく、心平かに天國に向ふにあらずや、

中央公論

第十九年
第四號



戰爭と社會の道念

戰爭は惡魔の兒なりと。これ古聖の貽しゝ金言なり。理想の天地に優遊する者の眼より觀ずれば、戰鬪は、兇獰なる惡鬼の子なるべし。否、吾れ等自身も亦之れを認むるに吝ならざるなり。古來幾多の聖賢は、理論に於いて、はた事實に就きて、戰鬪の如何に邪惡なるかを教諭せり。而して吾れ等は、最近半世紀の經驗に由りて、交戰の悲慘なるを識り、且つその結果の、吾れをして慄然たらしむるものあるを信ず。

去れど地上に人類生存する間は、戰鬪なるものは終に絕ゆるの期なし。露國の如く、無道の欲心に驅られて干戈を動かすもあれば、其の暴を挫がむ爲に、正義の楯を執る者もあり。波蘭の小說家メレヂユコスキーが思惟するが如く、人は靈と肉との二元より成るものなれば、一個人內の戰鬪止むの時なきが如く、人間世界に於いても亦、億万年を經と雖も、兵器の廢棄せらるゝ時代は到來せざる可し。げに人類の世界は、戰爭を以つて始まり、戰爭を以つて訖らむ。是れ余輩の娓娓論述するの必要もなく明々地たり。それ斯くの如く戰爭は、人生に附帶せる一現象なり。されば徒に其の短所、暗黑面を數ふるが如きは、人生の何たるを辨ぜざるものと言ふべし。娑婆に生れたる以上は、奮鬪せざるべからず、一國民たる以上は、戰はざるべからず。現實し難き理想を持ち來りて、戰鬪を否定せむと欲するものは、遂に自殺の外に、自身の行き途なき窮狀に陷ることあるべし。

戰爭なればとて、決して絕對的に邪惡なるものにあ

らざるなり。戰爭に因りて、社會の秩序紊亂し、法律は權能を失ひ、悲劇は到る處に於いて演ぜらるべしと雖も、他面より覗へば、是れに因りて、文明の進歩、著るきものあるは、亦蔽ふべからざる事實なり。吾人は一々其の實例を、古今の歴史中より撰擇するの煩を避く。そは讀者の熟知する所なればなり。又其の良果を、如何に分類し、區別し、これを一々證明するの煩をも避くべし。これ僅少なる紙數の、到底盡し得る所にあらざればなり。されど茲に殊更に一言せむと欲する點あり。これ今日の社會狀態より看て、殊に顯著なるもの。これを何とかなす。一言にして盡せば、戰爭は、社會一般の良心を喚起すといふ一點これなり。

吾人の精神作用は、刺激に因りて始て生起するものなるは、心理學者の證明する所なり。此の理法や、人類の有ゆる活動に應じて誤なし。吾人の智を積み、意志を鍛へ、大なる活動を試みむとするは、皆な是れ刺激に因りて生ぜし結果ならずや。良心の活動に於けるも亦同じ。個人の生涯に就きて看るも、吾人の道德心、即ち良心が、犯すべからざる威儀を以つて、自我を支配するは、社會の一員として、幾多の刺激、――以外の刺激を受けたる後に屬す。吾人は良心の定義を論ずるものに非ず、また其の起源を、學理的に討究するものにあらず。たゞ事實に據つて、其の燦爛たる光明を放つに至れる徑路を顧たるのみ。

一國全般の道念、亦斯くの如くにして發展す。其の刺激には數十種あらむ。而して戰爭は最も有力なるものゝ一たり。一室に籠居して、社會の風波を受けざるもの、同情の念薄く、愛憐の心弱く、道德的精神の確固たらざるが如く、平和に馴れたる國民全般の道德心は、甚しく薄弱なりとす。否、薄弱と言はむより、寧ろ眠りつゝあり、隱蔽せらると謂ふを以て適當とす。されど一たび何等かの刺激來れば、隱れたる良心現出して、所動的に動くのみならず、なほ能く能動的に活動す。例へば貧窶に泣く幼兒を見れば、今迄沈默を守りし道念、忽ち動きて、彼れに同情し、やがて一轉して彼れを救濟せむとの念を生ずるが如し。而して國民

全躰の受くる刺激中、戰爭ほど道念を動かしむるものは莫し。戰場に於ける將士兵卒の艱難、故郷に遺されたる家族の愁嘆、その他、戰爭に伴へる無量の慘毒は、一として吾人の同情を喚起せざるは莫く、從つて消極的には吾れ等自身の行爲を反省せしめ、積極的には、現存戰鬪に從事する人々並に其の關係者を慰藉せむとの念慮より、進んでは、戰爭なる惡魔の子を滅さむとの大願を起さしむるに至るべし。これ固より直接の影響のみなりと雖も、これに附隨して、幾多の道德的行爲、或は事業の、事實に顯るゝは、贅辯を用ふる迄もなく瞭々たり。

我が國近年の道德を顧るに、頽廢の訾は免れ難かるべし。維新に際して、社會秩序の亂れたると共に、道德破れ、人々の良心は、昔日の威力を失へるは、蔽ふべからざる事實なりき。かくて日淸の戰役あるや、良心は稍往昔の威光を恢復し、これより幾多の道德的事業の企てられしは、吾人の記憶に尙ほ鮮かなり。然れども喉元過ぐれば熱さを忘るの譬に漏れず、折角勢威を握りたる良心も、何時しか光を失ひて、兎角は隱退がちの世とはなりぬ。これ刺激なき時代には、免れ難き現象なり。彼の個人主義なるものが、一の潮流となつて滔々たる勢を示したるを看ても、如何に吾が道德世界の荒廢に歸しつゝ有りしを推知すべし。されば宗敎も其の効なく、社會改良論も其の効なく、道德の敎戒も其の効なく、あはれ個人角突き合ひの修羅場は、目前に迫らむとせり。此の時に當りて、一大刺激の來るあらざらむ乎。日本は不幸にして道德なき野獸の社會と變じたるやも計り難し。然るに幸にして日露の戰爭は起れり。此の驚天動地の戰鬪たる、吾が道德界に取りては、最上の興奮劑たり。

露國が滿州の曠野に於いて、暴を逞うせるは、是れ吾が國民の正義の念を起さしめたる動機ならずや。其の時に當りて、正義人道を守らむとの響は、國民の呼び聲なりき。而して仁川、旅順の海上に於いて、砲聲天地を震動するや、武士道の理想は、日月の如く輝き渡りぬ。これと共に邦內に於いて、戰時の道德的美擧

は山間邊陬の地にてすら企圖せらるゝを見たり。吾が國民の良心は、必ずしも消耗したるにあらざるなり。否恐くは惰眠を貪りつゝありしならむ。さはれ惰眠は銷沈の第一歩なり。若しも今日にして、此の干戈の響あらずんば、國民一般の良心は、或は永遠の睡眠に入りたるならむ。夫れ鞏固なる精神は、鍛錬を俟たざるべからず、道念に於いても亦然り。然らずんば、如何に高尚優秀なる道念と雖も、遂には實なき名とならむ。然るに今や是れを鍛錬すべき機會に接しぬ。

日露戰爭なる一大刺激は、四千万の同胞に、其の良心を覺醒せしめたり。これ直接の結果なり。去れど此の興奮せる良心の永續によりて、間接の利益を收めむこと、是れ實に難事なりとす。一國の道德を進め、社會を改良し、善美の國土を造らむと、これ國民全般の道德的精神の活動を基礎となすに非ずんば、到底望むべからざる所なり。是に於いてか、國民一般は、今日より此の鋭敏なる良心を、永續せしむるの覺悟を定めざるべからず。殊に教育家たるもの、宗教家たるもの、社會改良を天職となすもの、皆な共に其の責任重しと謂ふべし。一國民の道念興奮せる場合には、道德的事業を企圖せむこと容易なり。諸氏よ、一時の好果に滿足せず、今より永遠の謀を講ぜよ。(社說)

近世文明史談

(攘夷說の變遷)

伯爵　大隈重信

今日は時節柄攘夷論の事をお話しませう

攘夷論といふと少し語弊があるか知れぬが、之は時代の精神、今日は攘夷といふ事はなくなつたが、五十年前はなか〳〵攘夷論は盛に勃興したもので、今日の言葉に變へて言へば國防、國家の生存自立に必要なる防禦て、之は少しも語弊がないやうであるから、先づ攘夷を國防と換へやうと思ふ。

諸君は今日は攘夷論といふ事は愼まなければならぬ、なか〳〵歐羅巴邊の頑固なる人達は——比較的頑固な

人達は黄色人種の勃興、之は曾て蒙古、韃靼人が世界を荒した如く、日本が勃興して世界に災害を及しはしないかといふ事を言ふが、之は政治家達が實は道樂に拵へて、一時の人心を支配する爲に言つた事であるが、なか／＼此の感情といふものは勢力のあるもので、其の力は偉大なるものである。殊に異宗教國に對して彼の十字軍と云ふやうな事が矢張り今日でもどうかすると起らぬとは限らないのである。攘夷といふと少し今日は差支へるが、攘夷といふ事は過ぎ去つた事の話で、今日は國防と言へば宜しい。

古い話は第一――今日は少し時がないやうでありますから緻密な話は出來ませぬから極く約めてお話すると――全躰此の日本は何に依つて勃興したかといふと、國防といふ事からである。其の當時の攘夷といふ事から勃興したのである。斯う云ふ事だ、日本で始めて國防といふ事を述べたのは誰であるかといふと、夫れは多少世界に於ける智識を有つて居るから國防といふ事を言ひ出したので、即ち仙臺の林子平といふ學者。今から百二三年前の人で、大分蘭學の出來た人で世界の有樣を知つて居つた、此の人が國防論をやつた。其の次に丁度勤王家で名高い蒲生君平といふ人があつた、之はもう殆ど日本で近世の勤王家の開祖で、非常な勤王家で殆んど全國を跋渉した。其の人が林子平の所へ行つて勤王論を唱へたところが、林子平はそれに答へて言ふに、それは至極御同意だ、併しながら日本の國を外國に取られた時分には天子樣はどうなるかと言つた。此の林子平の議論には流石の勤王家の蒲生君平も言葉がなかつた。成程國といふものがなくなつては勤王論も仕方がない、何でも國と云ふものが一番大切だ、それ故に曾て元寇の時にも龜山天皇は身を以て國難に代はると云ふ事を祖宗の神靈へ御祈願になつた。開港の事が起つて國が危いといふときに先帝に一ツの御製がある。「朝な夕な民安かれと思ふゆゑ云々」といふ御歌があるが、皆之は國防なんだ。此國防といふものが現はれてどういふ工合になつたかといふと、即ち一種の攘夷論といふ、此の攘夷論が遂に日本を激せしめて西洋の文明を導くといふ事の動機となつたのであります。之は皆攘夷論から導からたので此國を文明に進めるといふ事が出來たのは皆それから始つたのだ。

併し其の頃國防と言つた所で弓か槍だ、若くは小さな船に枯草でも積んで少しばかり火藥を入れて夫れを以

つて敵の船を燒討ちしやうといふ位の事より他にはない。假りにいへばさういふ事で、先方の軍艦を今申したやうな弓や槍で以てやつた所で、それを防ぐ事は出來ないが、併しそれより他に仕方はなかつたのだ。實際今日生きて居らるゝ所の名高い、東洋のモルトケと言はれて居る山縣大將なども攘夷を唱へられて、山縣さんはキット槍の御師範役であつたと思ふ、その山縣さんなどは手練の槍を持つて向つたのでありませう。薩摩武士はなか〳〵強かつたので、所謂衣至骭袖至腕て、なか〳〵豪かつたが、どうも攘夷が勝てぬからどうも仕方がない。

そこで今度は外國の學問をして

敵に當らうといふ了簡で、英語、佛語の研究をするといふやうな具合で、外國語をやり出した。それは丁度神農が草を嘗めて見て毒になるか藥になるかといふ事を知つたといふやうな理屈で學んで居る中に、段々味を知つて、今日でもハイカラなどゝ言はれる先生がさういふ有様から攘夷家の方へ來られた者が幾らもある。

そこで第一にどういふ學問が開けて來たかといふと、醫術といふものが一番先きに開けた。之はなか〳〵高尙な學問で、單に昔の草根木皮を飮ませる譯ではない、それに最も必要なるものは數學、之は人間としては必要である、それには又理化學といふものも必要である、又藥劑といふ學問も必要である、又病氣がどういふ工合に起つて來る、どう云ふやうに經過するといふので病理學もやるといふやうなことになつた。我輩は素人で能く知らないが、なか〳〵醫者などといふものは面倒なもので、其所で名高い蘭學者は皆此の醫學をやつた。

それから一番初めに何を學んだかといふと、外國人は豪い腕力がある、腕力のみならず先方が金棒を持つて來るから此方も金棒を以て行かうといふ都合から、兵學といふものを學び出した。近頃は餘程すたつたが昔は兵學が餘程盛んなもので、西洋の學問が日本へ這入た頃は皆有志家達は何でも兵學をやつたものだ。何故にさう兵學をやつたかといふと、兵を強くしなければ攘夷は出來ないといふ事から、皆國防の爲にやつたものだ。さうすると今度は大砲を擊つ事ばかりてはいかぬから、火藥を拵へる事もやらなければならない、それ

には又大砲を造る事も知らなければならないといふので製鐵、冶金といふやうな學問も必要であるとい風に、一つの學問からそれからそれへと導かれて來た。それから今度は外國人は萬里の波濤を越えて外國へ行くが、それには如何なる難風に出逢つても差支ないといふやうな船に乘つて行く、此方でも甲鐵艦を造つてやらなければいかぬといふので、海軍の必要といふことから今度は海軍の學問が入つて來た。さういふ事から段々西洋の書物を讀み得るやうになつて、其の傍には地理も讀み、歴史も讀むといふやうに、段々西洋の事が分つて來た。

其所で時代が變化して來るに從つて、どうなつたかといふと、今度は太砲を拵へたり、軍艦を拵へたりするには金が要る、西洋人は金を持つて居る。全躰封建時代の武士は金といふものは禁物であつたが、どうも必要に迫られて金といふものもなければならぬといふ事になつた。其所で西洋人が金を儲けるからには、此方も一つ金を儲けなければならぬと云ふので、商賣を盛んにする、又鑛山も盛んにやる、夫れには製鐵、冶金が必要である。それに就ては地質學、冶金學、またこれには經濟學といふものもそれから導かれると斯ういふ事になる。西洋の學問は實際必要に迫まられて、それからそれへと導かれて今日の如く實際學問の爲めに學問をするといふ觀念までに發達して來たのである。玆に於て純然と攘夷といふ觀念が國防といふものに變じて來た。

夫れで即ち今演說なされた佐藤將軍の如き軍人が出來るやうになつた、軍人と云ふものは維新後に出來たもので、其の以前にもあつたやうであるが、夫れは封建時代で今の軍人とは違う。加之攘夷と云ふ事、之は日本人以外のものは禽獸と心得て居つた、動物と心得て居つた。此の動物に對する抗抵力である、今度はさうでない、同じ人間で、同じ國家をなして居ると云ふ觀念が次第に起つて來た。さう云ふ變化をなした所が不思議である。

所が凡て此の兵器も商業も鑛山も醫者も段々進んで來た。來た所が爰で餘程困つた事が起つて來た。段々やつて見た所が、愈々自分達が無學で大膽であつたと云ふ次第が分つて來て、攘夷の先生が今度は臆病になつた、外國は甚だ物騷だ、甚だ畏い、無暗な事をすると此方はどんな目に遇はされるか分らぬといつて、誰も彼も皆閉口して仕舞つた。

そこで今度は其の反動で外國を畏がる

從つて外國を眞似る、隨分盛んに眞似るやうになつた、今日はハイカラと言つて、或意味に於て言ふと世の中より擯斥されるけれども、其の時代にはハイカラは餘程持てた、洋行歸りと云ふと餘程幅が利く、別段學問もしない、兎も角も何處か英國か亞米利加へ少し往つて來ると餘程尊敬される、大層持てるのである。さう云ふ時代であつた。そこで其の時代には日本の文字もこんな面倒臭い支那文字てはいかぬ、之を皆英語にして仕舞うなどゝ云ふ論が出て來た。日本を英語國にして仕舞う、日本の特性を棄てゝ仕舞うと云ふやうな突飛な論者が起つて來たのだが、其の論者も一介の書生ならばまだ宜いが、名高い文部大臣、之はエライ教育家であつたが、其の文部大臣がさう云ふ論を唱へるに至つた。實にどうも驚いた話で、僅か十年か十五年の間にさう變化した。

そこでどうなつたかと云ふと、西洋の所謂法律の編纂、ナポレオン、コードを翻譯して日本の法律としやうと云ふ事になつた。之はエライ話だ、全躰法律などゝ云ふものは、爰にもさう云ふ學問をした法律家の先生達も居るでせうが、そんな理屈のものではない、法律は必要から生ずるものだ、法律を拵へて夫れへ人間を當嵌めやうと云ふ了簡では往けない、所が其の時には一も西洋、二も西洋、何でも西洋と云ふ事の前には皆御辭儀をしなければならぬと云ふ話だから、ナポレオン、コードを翻譯して以つて夫れに國民を入れ、さうして法律を以て國を治めると云ふ、之は其の當時名高い政治家で、さう云ふ事を唱へる者もあつた。斯う言ふと自分一人は餘程エラくて、さう云ふ仲間とは違つて居つたやうに見へるが、多分其の時代には吾輩も其の仲間に近かつたかも知らん。

兎に角さう云ふ有樣であつた。夫れが爲めに日本は餘程弊を受けたが、矢張り又夫れに導かれて次第々々に、始めは其の眞似をして居つたのが、何時の間にか本物となつて來た。サアさうなると俄かに威張り出して、自由民權と云ふ事を怒鳴り出し、色々な政治家が出て、全國大騷ぎをやつた。其の時代に國民の思想がどう云ふ變化を起したかと云ふと、殆んど佛蘭西の革命時代のやうな有樣であつた。

夫れから全權大使と云ふものが日本から出て、歐米を

廻つた、立派な御役人が世界を廻つた、全權大使は一人に極つて居る筈であるが、日本のは人數が多い、何でも一小隊ばかりあつた。此の全權大使と云ふ名前に全權のないのは變だが、之は怪しむに足らぬ、世界の制度文物風俗商業等一切を往つて見て來いと云ふので、丁度十六個國を二年掛つて廻つた。なか〳〵エライものだ、大久保とか木戸とか云ふ名高い先生達が一小隊を率ゐて往つたが、其の率ゐられた者の中には餘程氣の利いた人もあつたが、又頑固な者もあつた。此の頑固な人達は改革を妨げる、誠に面倒だから其の喧ましい人は外國へやつて仕舞ひ、其の喧ましい人の居らぬ内に早く内の改革をしやうと云ふ事であつた。所が其の人達は皆亞米利加から露西亞、西班牙、葡萄牙邊まで十六ヶ國を前後二年掛つて、其の實跨つて三年掛つて歴廻つて來た。さうしてポーランドへ往くと、其の亡國の有樣を見て憤慨を起し、露西亞へ往くと專制の有樣を見て又之を憤慨し、或は普魯西皇帝が新に獨逸聯邦國の皇帝となつて歐羅巴の覇權を占めて居る、其のビスマルクの政治を見て頻りに羨やむと云ふ有樣で、丁度其の時は佛蘭西が獨逸に破られた跡である、巴里に往つて城下に慘毒を流した有樣を見て大に感慨し、自分達が先年下の關で英吉利、佛蘭西、亞米利加、和蘭四ヶ國の聯合艦隊に砲擊されて、とう〳〵閉口して和睦を乞ふたと云ふ有樣などを想ひ起して、所謂一小隊の政治家先生達は萬感交ゝ起るといふ有樣であつた。夫れから英國へ往つて諸般の事情を見、彼の佛蘭西が城下の盟をなしたにも拘らず、ガンベツタと云ふ非常な天才を持つて居る政治家が、十分に之を恢復して復讎をすると云ふ事を聞いて、又自から自分達の心をも强うする。、夫れから色々な有名な先生達に出遇つて又多少心に刺激を受ける。さう云ふやうな事で皆書生になつた。立派な政治家、其の中には老人もあるが皆書生になつて仕舞つた。明治維新で生れ代つたと云ふ有樣で、五十六十の者まで皆書生になつた。そこで民權論が西洋では下から起つて來たが、今度日本は上から起つた。彼の大久保などゝ云ふ人は餘程頑固な人と思ふか知らぬが、實は民權論の棟梁だ。

偖さう云ふ事は何より起るか

矢張り攘夷と云ふ念が始終中心となつて居る。どうも外國人が氣に食はぬ、向うへ往つて模樣を見て來ると、どうも羨ましくて堪らぬ。そこで腹立紛れに先づ日本

も西洋の通りやる、そこで德川三百年の封建を破壞して仕舞ひ、王政の下に統治して、是から英國の通り、亞米利加の通り、獨逸の通りにやらうと云ふ、是が動機であつた。もう一つ遡れば攘夷と云ふ動機なのだ。併し如何に奮發しても直ちに英國なり米國なりの通りにはなれぬ。そこで學問の奬勵と云ふ事が非常に盛んになつた、所が迚も間に合はぬから裕かな書生を捕まへて外交官になれと云ふやうな事になつた。そこで法律の編纂も翻譯的ではない、本當の編纂をやる。夫れてもまだ中々外國が畏い、又外國の事を知る者程愈々畏い、何となれば何でも一躍して出來たものはないと云ふ諺と同じく、今日の文明、歐羅巴の今日の盛んなる人文の發達と云ふものは決して一朝一夕に出來たものではない。そこで日本に於ても敎育を十分にしなければ往かぬと云ふ事から、頻りに敎育の奬勵をする。夫れから凡ての制度文物も始めの翻譯的のものが全く本當の編纂となつて、遂に地方には自治を布き、又國會も出來ると云ふので、どうやら一寸形丈けは歐羅巴の通りになつた。先進國に讓らない立派な法律も出來、陸海軍も大分進んで來たが。

併し退いて考へて見るとなか〳〵まだ好かぬ、其の時に丁度今の露西亞のニコラス皇帝がまだ皇太子の頃、日本へ來られ、大津に於て津田三藏と云ふ狂人に斬付けられた、其の時の驚きは非常なもので、實に畏れながら　陛下は直ちに西京へ御見舞に御出になる、それから內閣諸公は勿論、元勳達まで京都へ往つて御詫をして、どうか許してくれと云ふ譯だ、そこで此の津田三藏を死刑に處すると云ふ議論が起つた、どうしても殺さなければならぬ、所が法律を楯にして時の大審院長がさう云ふ事は承知せぬ。國法に依つて其れを死刑に處する譯には往かない、如何なる外國の皇族でも君主であらうとも、それを殺せば無論死するが、只傷付けた丈けで殺す譯にはならぬと言ふので、此の時には隨分名高い陸軍の大將達も國務大臣も皆それは甚だ宜しくない、若し露西亞が起つて軍艦を向けて來たらどうする、國が亡びる、國が亡びて法律が獨り存在すると云ふ事があるかと云つたが、頑として裁判官が聞かぬ、どうしても聞かぬ。それから先づ裁判官を取換へて裁判をする、之も聞かぬ、君主が祖宗の神靈に御誓ひになつた憲法だ、君主自からして憲法に服從すると云ふ事を祖宗の神靈に御誓ひになつた、其の憲法に保障してある裁判官を猥りに動

かす譯にはならぬと云ふので、大騷動、此の時は一步誤まれば國が亡びはしないかと心配する位であつた。所が英國には日本人が澤山居つたが、其の人達が如何にも氣の毒に思つたから、其の英國に在留して居る日本人が皆連署して、露帝に一つ御見舞の書面をやらうと企てた、とう〳〵其の文章を拵へたが、どうも其の文章がまづい、そこで或る國際法の名高い學者に賴んで文章を直して能くして貰うと思つて、三人の者が出掛けて往つた、さうすると其の先生が驚いてアナタ方は何をなさる、そんなものを私は直す事は出來ぬ、出來ぬのみならず止したら宜からう、全躰露西亞の君主が外國で斬られるのは當り前だ、國内に於てさへ露西亞の君主は時々殺される、之は止したら宜からうと言つたと云ふ話であるが、日本ではなか〳〵さうでない、實にどうも此度は相濟まぬ事である、衷心恐入つて、一つ間違つて一發殺られたら國が亡びはしないかと大變に心配をした。之は何か、詰り自分の國か弱いと云ふ事を知覺して居るからだ。

所が夫れは何年前の事であるかと云ふと僅かに明治二十五年即ち十年前の事である。

然るに今日はどうか

今も佐藤將軍の戒しめられた通り、餘り侮どり過ぎて居る、無雜作に露西亞は征伐が出來る、其の内にはドン〳〵進んでウラルを越えて聖彼得堡へ乘込むなどと言つて居る。實にどうも其の變化は不思議とも云ふべきもので、十年前には外國を畏るゝ事夥しかつたものが、どうしてこんなに變化して來たか、只驚くの外はない。併し餘りさうなり過ぎると、今も佐藤將軍も戒しめられたが、甚だ宜しくないのである。實に此の日本は武斷政治をやつて居つた國であるが、夫れが僅か二十五年か三十年の間には國民が力を出して國の凡ての政治を改革し、立憲政治を行ひ、さうして自由の國民なりと威張つて、露西亞に向つては文明國が野蠻國に向つて打擊を加へると言つて居るのは實に不思議な譯である。愈〻國民の心理に大變動が起つて來た。非常に恐怖したものが、侮らぬでも恐怖しない丈けになつて居る。又日本人は一度意を決して志を立てれば如何なる事でもやり遂げると云ふ事を知覺する迄になつたのは、何に依つて斯の如く速かに日本人が成功したかと云ふと、全く攘夷と云ふ觀念が動機である。即ち國防、

何でも國が大事だ、國がなければ天子樣を御置き申す所がない、斯うなつて來るから始めて日本帝國の萬世一系の皇帝の御威德と云ふものは世界に恰も旭日の天に冲する如き光を放つのである。

是に付て私は最後に少しく諸君に御注意して置きたい事がある。此度の戰は最後の勝利は必らず我にあるに相違ないと思ふが、殆んど世界の歷史に大變動を來たし、世界の思想界に大變動を惹起す。斯の如き光榮ある歷史が最も國民を墮落せしめる。戰勝つて國衰へると云ふのは此の譯である。即ち羅馬の衰へたるも、西班牙の衰へたるも皆さうで、或は埃及であるとか、波斯であるとか、曾て紀元前に最も光榮あつた帝國が、後には世界に侮どられ、或は國を亡ぼされて仕舞つたと云ふ譯で、實に此の光榮ある歷史は國民に取つては大切である。所謂勝つて兜の緒を締めろて、此に於て光榮ある歷史をして愈〻國民を發達せしめる、餘り六ヶ敷い仕事ではないが、兎に角夫れに對して將來に於ける國民の責任と云ふものは一層今日より重きを加ふるのである。どん〳〵國が大きくなる程強い刺激が起る。此の日露戰爭が我に十分なる光榮を以て局を結んだ時には、世界の嫉妬心、國際的嫉妬心、政治的若くは人種的爭鬪が其の間に畏ろしい勢を以て起るか、或は不測の災が夫れから生ぜぬとも言へないのである。否な此の戰の終らぬ前に起らぬとも言へないから、兎も角も此度の事から來る所の國民の覺悟といふものは餘程注意をしなければ戰勝つて國を危くすると云ふ不幸が來るのである。故に諸君は飽くまで心を冷靜に持ち、一生懸命に學問をして自分の本分を盡されるやうにしたい。何でも學問の外はないと私は考へるのである。

（をはり）　（文責記者に在り）

日露國民氣質の相違

文學博士　男爵　加藤弘之

何樣なことを話して宜しいのか、別に名論卓說もない。之れは人から聞いたまゝの話であるが、今日の場合注意すべきことゝも思ふからそれを話して見やう。もう七八年も前の事で、小西增太郎といふ人に聞いた話だから、或は今日では實際さうでないかも知れぬ。小西といふ男は、まあ何年彼地に行つて居たか、餘程永く――十年も居つたか――兎に角永い間露西亞に居つたものと思はれる。其樣に永く行つて居ると大概は

必ず賞めるものだが、小西は賞めないで、ひどく惡く言つて居つた。其の話に、露西亞人はどうも果斷力に乏しい、極めて悲觀的、厭世的な、仕事の捗取らぬ人種だといふことを言つて居つた。之れはスラブ民族の氣質ともいふやうなもので、尤もスラブ民族といつても一概にはいへぬ、上流社會を占めて居るのは獨逸民族が多くて、比較的に開化した優等の人種であるけれど、一般に論ずると、露西亞人は悲觀的、厭世的でグヅ〳〵した氣質の人間が多いといふことを話して居つたことがある。

それからまた、獨逸に留學をして居るものは米國人日本人などが一番多いのであるが、近頃彼地へ行つて歸つた人の話を聞くと、此の頃は露西亞人の留學生が澤山獨逸に入込んで居るさうで、特に鑛山學校、一般の工業學校などでも獨逸本國の學生よりも露西亞の留學生の方が多い位である。併し其等に就て見るも、少數の優れたものがないではないけれど、多數の上から比べて見ると、人物はどうも露西亞人よりも日本人の方が優れて居るさうである。外國の新聞などでも今度の戰爭の評をして、露西亞の遣り方は惡くはいはぬが、どうも露西亞の人間を惡くいつて居るらしい、之れは左樣思はれる。

處が其の裏を見るとまた餘程面白い。なるほど日本人は活潑で、元氣がよい、露西亞人は反對に、悲觀的、厭世的で、不活潑であるけれど、其の代りに日本人の元氣は最初に好いばかりで、仕舞〳〵になると其の元氣が何時の間にやら薄らいで來る。それと反對に、露西亞人は耐忍力が强いかも知れぬ。之れは輕々に見逃すことの出來ない事である。隨分注意をせねばならぬことゝ思ふ。今まで海軍は幸に勝つて居る、陸軍も少しづつ戰つて勝つて居るらしい。今も一寸讀んで居たが、「日々新聞」にも書いてあるのに、佛國の新聞などに「日清戰爭」の事を引照し日本人の强いことを論じてある。併し支那人と今度の露西亞人とは元より比べ物にならぬ。貧乏なといふ點からいへば露西亞も日本も共に貧乏だが、其のまた貧乏をも辛抱するのが耐忍力を要する。耐忍力に富んで居ることは露西亞民族の一の美質で、之れは吾々日本民族の到底及ばないことであらうと思ひます。

併しながら日本が文明に進んだ其の早さは、また世界に類のないことで、同じ亞細亞洲の一民族であつても、吾々日本民族はどうしても他の蒙古民族抔とは異

つて居る。顧みて露西亞の黒船が初めて伊豆の下田港に押しかけて來た時分の事を想ふと、勢の消長、主客顚倒の有樣は誠にはや今昔に堪へぬ次第である。

（文責記者に在り）

動物虐待防止と動物改良

文學博士　三宅雄次郎

動物虐待防止

といふことは東洋に古くからあつたことである。佛教ては殺生を戒むること嚴てあつた。所が近頃歐米に傚ふて虐待防止といふことをいふ樣になつたが、東洋ては重もに教訓の上から來て居るし、歐米ては多く經濟の上から來て居る。佛教ては總ての生物を殺すのを禁ずるのであつて、虫ても、禽獸ても、何ても生けとし生けるものは總て殺してわるいといふのである。西洋にも時としてそういふ意見を持て居るものもあるが、大抵はそういふ廣い意味てはない。然し我國人が彼に行て動物虐待防止の行はれて居るのに感ずるといふのは、是れ亦理由のない事てはない。たゞ動もすると其結果だけを見て其原因を尋ねぬ樣な痕跡があるのは遺憾の極みである。

外國と比べて日本で盛んに動物を虐待して居る樣に感ずるといふのは、普通町を歩いて小供等が犬に石を投げるとか、門太郎馬車の馭者が馬に鞭て血の流れるのを見て居るからである。かういふことは他國て一寸見當らぬ事てある。然し小供が犬に石を投げたり、棒て打たりするのは、どういふ町にも小供が澤山遊んて居り、又所屬のはつきりせぬ犬が澤山居るからてある。外國ては子供が只町中に居るといふことは少く、又大抵犬の飼主が極まつて其れをよく世話をして居る。又其犬はなか〳〵高價のものてある。藝を仕込んてある。此れが紛失すると大騷となる位てあつて餘程大事にして居る。兎ても何處にても置て惡戯者に打たせるなどといふことはない。然し田舍て小供がどこにても遊べるといふ所で、又犬もよくない性質のものが澤山居るといふ所ては、隨分石を投げたりして通りかけるのである。犬をよく吟味して金目がかゝつて居る處ては自然之を等閑にせぬ樣になるのてある。我國の今の犬に中には隨分よいのもないてはないが、大抵價のないも

のが多い。又所屬が極まつて居るとはいふもの丶、諸方を巡り歩いて食を求めて居るものが多い。斯樣な犬にいたづらをするものもあるといふのも左程怪しむべきでない。

圓太郎馬車

の馭者は成程馬を虐待する。鐵道馬車の馬さへも虐待を免るゝといふ譯にいかぬ　然し此馬は元來價の甚だ安いものである。殆んど馬と見做すべからざる程のものである。我馬匹取調委員が歐米に行て其係の者との談話中に、向ふから日本に馬がいくら居るかと聞いた。百五十万居ると答へた。すると彼れは、此れは虛言者と見て何も相談に應じなかつたといふことである。然し我國に實際百五十万の馬が居るに相違はない。けれども彼の目から見ると當り前の馬と見做すべからざるものは多いのである。十圓廿圓の馬が澤山居るといふ所ではこれを養ふものも左程大切にする氣がない。それても村落に居て馬と共に住んで居て、よく此れと馴染んで居る樣な者は之を大事にする。馬子などはなかなか之が世話を怠らぬもので之に對して愛情をも持て居る。然し市中にあつて、此れまで別段馬を取扱つた事もなく、車を動かすと同樣の心持て以て馬を鞭つ段になると、之に對して慈悲の感もなにもないわけである。外國ではもつと早くから一般に馬の使用が行はれて居て、馬種の改良もいろ〳〵進められた。近來になつて益〻馬の種がよくなつて來て、數百圓、數千圓、高いのになると十万圓に上るのがある。かういふものは成る丈け長く生かして長く働ける樣にせねば割が合はぬ。それにまづいものを喰はして、やたらに鞭て勞に堪へぬ樣にするのは少からぬ損耗になるのである。平常から馬に親しんで、其れに多少の愛情を持て居る上に、餘程金目のかゝつて居るもの故に、之を大事にするのは當り前である。我國では牛に車を引かして居るのに彼の牛はいつも遊ばす樣に見えるのは、是れ我馬が弱くして車を引かせるには牛の方がよいからである。彼には車を引くには強い馬が居る。とても牛の及ぶ所ではない、それに大いなる馬が居て力仕事をするから、牛は重もに牛乳か食料の爲になる役目を持て居る。印度では牛を使ふのが多くて我馬車の如きものには牛を使つて居る。其牛はなか〳〵早く驅けるのである。早く驅ける牛のある所では此れに乘て驅けるのが毫も不思議はない。

豚。

は我國では尤も汚い物としてある。豚の居る所には入ることも嫌がる位である。外國でも豚は汚い物に極まつて居た、汚い物の譬に豚を引く程であつたが其種がだん／＼よくなつて來てからは豚は左程汚い物といふ事ではなく、動もすると奇麗な物と見らるゝことゝなつて來た。豚自らは左程汚い物を好く物ではない。其平常臥す所を見るとよく汚い物を避けて眠るものである、此頃世話が届いてからは豚には奇麗なものが出來て來たのである。そふ奇麗になつて來ると此れを生物でないかの樣に取扱ふ事が出來なくなる。

羊はまだ我國に多くない。此れに對してどうするかはまだわからんが、今後其業の盛んなるに從て此れを酷く取扱ふ樣な事は決してないであらう。何處でも大抵屠畜所では豚を屠る所を見せるが羊を屠る所は多く見せぬ、といふのは羊は何處となく可愛相に見えて婦人などは之を見て氣をわるくするといふ樣な風であつて羊に對してはあまり酷い事をする氣にならぬ。ましてだん／＼種がよくなつて來てはこれをひどくせんとするも出來なくなつて來るのである。

我國で動物虐待

といふことは左程一般に行はれて居るのではない。子供が犬にいたづらするといふのと、圓太郎馬車の馭者が馬をひどく扱ふといふ位が一番目立て居るのである。若し犬がだん／＼よくなつて其犬一頭に少からぬ價があつて其れが死んだ時に所謂犬死といふ樣な譬にまでならぬ樣になれば、是れをむごく扱はふとする者はなくなつて來るのである。現に今でも百圓以上の犬が少くない、之れは極めて大事にされて居て其の食物も普通の人よりも高い位のがある。虐待といふのはただ何處の犬かわからぬ樣な藝もなにも仕込んでなく臺所の魚をくはへて行く樣なのら犬に對する時である。斯樣な犬がだん／＼なくなつて、よい犬がだん／＼之にかはれば皆犬を大事にする。

馬も圓太郎馬車の樣な馬ではいくら倒れても左程損といふ程にならぬ。いくらもかへることが出來るといふものでは自然粗末に扱ふ事になる。然し此馬が一頭死ねば其代りを得るには莫大の金をかけねばならぬので、其馬の病氣や死亡が少からぬ關係を及ぼす樣になれば此れを大事にするのは普通である。

馬のわるいといふことは實に我國の一大問題である。現に此戰爭で陸軍に於て弱點を感ずるのは重もに茲にある。外の事は總て彼に優つて居るが馬丈けはどうしても及ばぬ。多くの馬を徴發しても其効力は割合に少ない。此れは大いなる力ある馬を以てすればもつと少くつて間に合ふ樣な事があるのである。馬はどうしても必ず改良せねばならぬ事である。改良に就くと共に之を虐待することのなくなるのは殆んどいふを待たぬ事である。

牛は今の所多く勞働に使はれて居るのであるが、乳用と食用のものがだん／＼殖えて來るのである。其中にはなか／＼價の高いものもある。是れは益〻種をよくすべきである。今でもあまりひどく扱ふ者がないが後になると之を大切にするといふことは極まりきつて居るのである。

豚はまだ多くないが之も固より其種をよくすべきである。よい豚をむやみにする氣遣はない。

羊は此頃輸入されて來るのは多く價の高い爲めに大抵皆大事にせられて居る。

動物の種をよくする

といふ事は尤も必要の事である。是れまで我國では動物の費用が足らぬのと、其種もよくなかつたといふことの爲めに大抵他國の方が遙かに我國の上にあつたのである、改良といへば先づ外國の種を輸入するにあるのである。然し我國のものでも弊害の中には多少の利がないでもない。我馬は軀も小さく力も足らぬばかりでなく、よくあばれ出す。むやみに飛び出したり、蹴つたりする。他國の柔順なるに比べると如何にもわるく見えるが、是れ固と悍馬を貴てよくあばれるのが役に立つといふのでこの樣になつた所もあるであらう。今日から見るとあばれる馬は始末に困るのである。然しかういふあばれるといふ處分はよく利用したら却てよくならんとも限らぬ。他國の柔順なる馬はよく整列して一所に驅けたり、退いたりする。然し銃劍を揃へて持て居るといふ所に飛び込まぬといふのは極まりになつて居る。こういふ所は悍馬の性質の幾分を變ぜたならば或は銃劍を犯して飛び込む樣なものを作ることが出來るかも知れぬ。然し騎兵の用は兵器の進歩と共に次第に少くなるからしてかういふ類の事は無用であるかも知れん。然し又我馬が氣候の變化にたゆるといふ事があるならば其類の事を成る丈け進める樣にする

のもよいかも知れん。
今の牛乳は大抵輸入の牛からである。其牛は皆乳の分量が多い。多いと共に又黴菌がある。今日よい牛乳といはれて居るものも黴菌を免れぬ。否な實は其れに一番多いのである。我固有の牛乳には黴菌はない。然し乳の分量が少くて營業とするには足らぬのである。で彼の乳汁が何故に黴菌を免れぬかといふと元と乳汁の爲めに育てたのであつて片輪の牛であるからである。乳は澤山出るが全躰に於ては缺けて居る所がある。其れ丈け黴菌に犯さるゝ憂がある。我牛は當り前の躰をして乳も亦自分の産んだものを養ふに適する丈けであつて餘計に出さんければならぬ樣にならんからして身躰全躰に普通の躰を保つて其れて黴菌に犯されぬのであるといふ說である。其れて見ると我牛も乳を多く出す樣になると矢張り黴菌に犯さるゝといふ事になるかも知れんが、我牛に黴菌がないといふのが何にか他にいはれのある事ならば何とか之を利用して黴菌のない乳汁を作り出したいものである。然し是も殺菌の法が發達して來る此頃の有樣では左程意を用ふる程の事でないかも知れん、どんなに黴菌が多くとも殺菌さへすればそれでよい事であるからしてたゞ分量を多くする事さへすればよいかも知れん。

羊は我氣候の變化の甚しいのには困る。他國で成丈け氣候の似た所の羊を移して來るのであるが、それでも充分堪へるといふ事が出來ぬ。勢い我氣候に適したものを出る樣になるのを待たねばならぬのであるが、今日迄の所では之を養ふ草に困つて居る。氣候の變化に堪へる樣な草は尠い。之を喰て育つ羊は毛がこはい。わるい毛織物を作り出しても少しよいのは望まれんのである。されば草の如きも尤も考物である。此外總て用を爲す動物は益々改良せねばならんのである。改良すれば之に對する人の態度も今日と變つて來るわけである。

動物虐待防止といふことはよくいふ事である

けれどもたゞ虐待防止といふてもいかなる事を爲すべきかを考へた上でなければ左程効能のあるものではない。たゞ歐米で動物をよく扱ふ丈けを感心して我國で此れを虐待するといふのを如何にも野蠻な樣な氣がして居るのは寧ろ淺薄の見といはねばならぬ。動物虐待のわるい事はもとからして教訓として存在してある。

總ての生物を大事にせねばならぬといふ事はもとから教訓として備はつて居る。食物さへもたゞ野菜ばかりにせんとして居た者もある程である。教訓としては殆んど此れ以上を望むべからざるのである。たゞ實際如何なる事をなすべきかといふ事を考ふべきであつて、其れには啻だかゝる教訓にのみ係はつて居られぬ場合がある。已に人間の必要よりして動物を食料とし、又其力を利用せねばならぬ事からして昔よりは却て殺生が多く行はるゝ譯である。之れは實に止むを得ざるに出づるものであつて、たゞ注意すべきは決して無用の殺生をせぬ樣にすることであつて、これはどこまでも戒しむべきである。然してこれに就ては新たに他から教訓を買ひ込んで來るに及ばぬ譯である。動物虐待防止といふ事は嘉すべき事ではあるが、かゝる事に矢鱈に西洋の例を引て文明國では斯の如き事をせんといふ樣に吹聽するのは少し氣を附くべきである。動物虐待防止と共に動物改良といふことを心懸けて、種の改良に骨おらねばならぬのである。たゞ虐待のわるいといふ事は已に〳〵昔から備はりあつた事で今更喚々するの要は毫もないのである。

（文責は全く記者にあり）

梅干黨を排す

衆議院議員 山根正次

偶〻お出てあるけれども別に何もお話しするほどの事もありません、之れは前以てお斷り申して置く。が併し一寸御參考にまで申して見たいのは、他でもない、近頃目出度い、海軍大勝利の報知が頻々として帝都に入るに繫らず、どうも都人が概して悲觀的であつて、さまで祝意を表せぬといふ有樣が見えるらしい。これは果して喜ぶべき現象であらうか。固より今日の際は何處までも大國民たるの態度を持して、沈着で冷靜であらねばならぬといふことは申すまでもないことでありまするが、其の冷靜沈着でなくして、國民一般が萬事に對して頗る消極的悲觀的である。悲むべき時には悲むが、また眞に喜ぶべき時には大に喜ぶといふのが大國民たるの所以ではあるまいか。斯くの如く一般國民が消極的に傾き、悲觀的に流れるの結果は、戰爭の直接影響よりも數倍して萬事に不振興の結果を及ぼし、遂に測るべからざる慘害を與へるに至るかも知れぬ。決して雲煙に觀過すべきことではありません。

例へば彼の倫敦に於て、日本の公債が一時暴落を來したといふのも、我が邦に於て或る一派の人々が極端なる悲觀的の言論を吐いて、古金銀から銘々の時計や指環に至るまでも悉皆擔保にして軍事費の幾分を助力せうとしたこともまた其の原因の一つである。其の他萬事に就て儉約〳〵といふことを眞先にし、甚だしきに至ては敎育をも停止せうといふやうな意見が行はるる、自分の知て居る所に依れば國元から學資金を送らぬ爲めに、止むを得ず學校を止めて國に歸るものも段段あるやうである。一知半解、楯の半面を見て早呑込みをする人々の了簡は誠に氣の毒な次第である。或は下女が髮も結はないで、少許の錢を献納するとか、食ふものも食はず、取らねばならぬ滋養物も取らないで儉約をするとか、大國民の態度は決してそんなものではない、今少し大膽に、積極的に、度量を廣くせねばなるまいと思ふ。

私は專門とする衞生上から見ましても、軍事に伴ふ衞生事業は何であるかといふと、申すまでもない、第一傳染病の蔓延に對する警戒であらうと思ふ。今日既に日本の内地に於て例年以上、澤山の傳染病患者あるのみならず、滿韓地方誠に衞生事業の進まない處に輸送する軍隊の不幸といふものは大したもので、また其等が續々として彼方の傳染病を輸入して來る、既に赤十字社の博愛丸に搭載して送還する病兵中には赤痢病患者が多くあるといふ有樣。或は遼東、北韓、浦鹽邊から引揚げた居留人がホウソウ、セキリ、ペストなどの病毒を持て歸つたなど甚だ恐るべきことであります。

此の際に當つて吾々が最も注意をせねばならぬものは國民の健康である。然るに前申す如く、戰爭が始つて以來一切萬事儉約〳〵といふ主義で、食ふ物さへ減じて折角體に大切なる滋養さへも取らぬといふ現象は最も忌むべく最も恐るべき害禍を惹起すに至りはせぬか。中にも甚だしきは、軍隊が出征地に於て只梅干と握飯とを食つて戰をして居るといふことを聞いて、我々内國に在つて氣樂にして居るものどもが只居ながらに美味美食するといふは誠に物躰ないといふので梅干黨といふものが出來、只梅干ばかりを添へ物にして居るといふことでありますが、之れは出征軍人に對して同情を表するといふ點から見れば至極御結構な事であるが、躰の惡くなることを考へぬ點から申せば至て愚かな譯である。私の考へに依れば、内に居るもの

は牛肉なり魚肉なり、なるべく滋養分の多いものを攝取して、第一に身躰を大切にせねばならぬ、然らざる時には前申したやうに、平時とは違つて戰時の傳染病といふ恐るべき勁敵があるから、ついウッカリすると虚弱な體質のものは此の病氣に襲はれる恐れがある。只出征軍人が戰爭に强いばかりでは十分でない、國民一般の心と身とが丈夫て、健全で、外征の人々をして内顧の患なからしむるの用意を怠つてはなりますまい。第一健氣なる體は澤山の勞働に堪へられる。今度は巨額の軍費を要するのであるから、吾々内國に在るものは健全なる體を以て、出征軍人が内に居つて働いて居つた其の分までも兼ね働いて、且つ其の上に軍費に差支へないやうにせねばならぬ譯であります。

私は此の身躰の榮養が俄かに衰退した爲めに、恐るべき弊害の起つた事例を實驗上目擊して居ります。明治十二年、コレラ病が盛に流行したことがある。此の時誰れ言ふとなく、牛肉や魚類を食ふものはコレラ病に罹り易いといふ一般の俗說で、其の結果として此の歲は大邊梅干に茶漬を食つて過したものがある。其歲起つた病氣は何であるかといふと、人間の身躰がひどく衰弱して居たものであるから遂に惱を惡くし、夜盲が多くなり、或は東京地方に於ては脚氣が多かつたといふことである。是等は皆身躰の榮養が衰へた爲めてあつて、コレラ病に罹らぬといつても他の病に罹れば竟に同じ事に過ぎぬ。

夫れ故に私は今日の梅干黨といふものは、絕對的に排斥すると同時に、平生よりも一層身躰を健康にすることに注意して、國内に在る人は働くことに於ても平生より倍に働かねばならぬことゝ思ひます。私は先達て選擧の時に於ても話して、戰爭が始まれば、一時澤山金を出さなければならぬ、併し之れを作る爲には人々が少しづゝ奮發して出せば足りる、冗費はなるべく省くことにして、其れを以て出費に充つれば足りるといつて居ります。

戰爭のある間は酒も飲まぬ、煙草も吸はぬ、髮も結はぬとか、甚だしきに至ては學校の運動會を止めて其の費用を恤兵部に獻納するとかいふやうなことが、腹からの事か、上邊の外見か、一般に流行して居るのは誠に詰らない考へである。私は禁酒禁煙主義を實行して居るから後來何時迄も酒煙草を止めるといふとには飽くまでも贊成はしますが、併し只戰爭の間だけ一寸止めるなどといふ極めて浮氣な外見坊的な眞似は大反對で、

す。また髪を束髪にすることは衛生上頗る宜しいことであるけれども、何も平生束髪を結はねものが好きな髷を廢して所謂倹約をせずともよい。好きな酒なら大に飲むがよし、煙草も好きなら吸ふに差支へはない、ウンと飲んで肴も良い肴を澤山喰い、滿腹飲食すると同時に、平生よりも餘計に働くことを心掛けねばなりますまい。萬事萬端此の論法で、彼の消極的、悲觀的傾向は一刻も早く打破せねばならぬと思ふ。それから此の頃のやうに目出度い捷報が傳つて來た時にもトント其様な事には頓着せず、何處を春の風が吹いて居るかどいふ鹽梅に澄して居るといふのも甚だ面白くないのみならず、國民全躰の氣運に悪い影響を及ぼすやうになるから、之れは一日も早く改めて陸海軍の勝利が帝都に傳つたら家々戸々國旗を揭げて滿身の祝意を表するのが當然だらう。如何なる捷報が入つても何様な事か、何うなつたのか知らぬといふのは必ずしも大國民たるの態度でもない、全躰文部大臣が學校の生徒に向つて戰爭に勝つても騒ぐなとか、或は警視廳が提燈行列をしてはイケないとか言ふのが譯の分らぬ話さ。特に此度の旅順の勝利抔と云ものは海戰に大段落を告げたといふ、誠に我が國に取つては此の上もない喜ばしい次第であるから、定めし万都狂する如しであらうと思の外捷報を聞いても只寂そりとして居る有様を見ても、出征軍人に對して第一濟まぬ事である。大國民だからといつて喜ぶべき人情を抑へてまで態度を襲はねばならぬ必要もない。も少し無邪氣に祝意を發表して喜ぶべき時に喜び、働くべき時に働くやうになりたいものだ。新聞などに出て居るのを見ると、今日の不景氣を挽回する爲めに演說會を催うすとかいふことだが、抑も誰れが茲に陷らしめたのであらうか。不肖ながら正次方に於ては立流なる捷報が來る度に號外を見て一同萬歳を唱へ、國旗を揭げて祝勝の微意を表して居ります。

今日は私の同僚が出征することになつて、今かた新橋に送つて來たのだが、まあ事によつたら死んで來いと言つて大笑をした。私は人を送つて新橋に行く每にさう思ふ、誠に軍人は寂しさうにして出立して居る。これではならぬ。出征する時には内に殘る吾々一同が盛んに大陽氣に見送つて遣らねばならぬ。此の頃のやうに悲觀的消極的な傾向は一日も早く回復せねばならぬことゝ思ふのであります。

（文責全く記者にあり）

支那の婦女の眞狀と其の社會的原因
幷に救治法

西山榮久

今や東方問題は、盛に口にせられ、淸韓の經營は、到る處に主唱せらるゝに方り、彼れの地理を知り、彼れの物產を知り、彼れの土俗を知り、彼れの人情を知るは、尤も焦眉の急ならざるべからず。されど、自ら問題多岐に亘りて、一朝にして盡さんよしもあらず。他日筆を改めて言ふ事もあらん。今言はんとするは、淸國の上下を通じて、秘中の秘、密中の密たる、婦人なる題目を捉えて、その眞相を記さんとするなり。是とて、必ずしも深く考究せる結果にもあらざれど、支那婦人を以て、之を歐洲の婦人と比し、且つは我が國の婦人に比して、如何ばかり徑庭の存するかを知り、併せて、支那四億の蒼生中、そが一般を占むる婦人、未來の王侯將相を生む婦人、やがて社會を組織する至要なる一半部たる婦人を知らんは、淸國が如何なる程度まで改善の實を施こし得んやの疑問に對して、少しく解答を與ふるものたらずんばあらず。先づ豫め滿人と漢人との比較を試みん。

(一)滿人と漢人との長短　淸國には、種々なる民族ありて、中にも滿人と漢人との二大民族は、尤も主要なるものなり、前者は通古斯族に係り、古への肅愼、渤海、女眞(異論はあれども)等の系統を有して、我が日本人と系統相近きもの後者は漢族にて、今更ら之を言はんの要なけれども、孔孟を出し、秦の始皇を出し、漢の高祖を出し、陳平張良を出し、諸葛孔明、唐の太宗を出し、古來多くの名皇、名將、名相を出せるもの。今日支那人〳〵と言ひて、此兩者を區別せざるは宜しからず。言はずとも明白なる事なるが、滿人は今の淸朝の征服者、建設者とて、要路の位置に立つ人多く、漢人は被征服者とて、榮達せる人も多けれども、中央政府の實權より言へば、概して薄弱なるもの今や雜婚さへ許可せられて、此兩民族は、言語、風俗も略ぼ一樣に歸し、さまでの相違と見ざるが如くなるも、仔細に觀察すれば、決して然らざるなり。試に此兩民族を比較するに、一言以て評すれば、男子は漢族優り、女子は滿人勝れたりと言はんは、尤も當れり。そは如何となれば、滿州の男子は、漢人に比するに、

武力はあらん。意氣は存せん。されど、聰明多智と言はんは、及ばざること遠きなり。試に要路の人を見よ慶親王は如何、肅親王は如何、榮祿（今は死せるも）は如何、才機聰敏と言はるゝ、那桐、聯芳の輩は如何。之を李鴻章（歿せるも）、張之洞、袁世凱等の漢人に比するに、外交に於ても、內治に於ても、何れか勝り、何れか劣れるやは、萬人みな立ちどころに看取すべし。從て、今や、滿人は自己の位置を保ち、漢族の侵犯を防止せんことを以て、日に營々として講ずる所なり。想ふに將來幾十百年の後には、支那四百餘州の大領土は、他の原因なからん限り、滿人の天下たる能はざらん。されば男子に於ては、漢人優れりと言はんは、當然なりと言はざる可らず。されども、女子に於ては如何。これぞ今言はんと欲する主要なる點なり。

(二)滿明婦人　男子の斯く劣れる滿人は、女子に於ては如何と言ふに、之を漢人の婦女に比して、數等數倍の上にあることを認むるを得るなり。試に燕京の街頭に出てゝ一瞥せんに、雲を衝くばかりの大女、骨相逞しく、筋骨肥え太りて、頭に黒き大ぶさの髮を結ひ、大なる造花を簪し、身に錦繡を纏ひ、悠然としてそり身に横行濶歩する者は、是れぞ實に滿州婦人にして、男子と伍するも臆するとなく、語を交へ、事を問ひ、少しも相愧ぢ、相屈むことなし。その活潑にして、且つ溫良貞淑なる、之を歐米婦人の活潑に過ぎ、漢婦人の因循にして、且つ淫猥なるに比して、寔に中庸を得たるものと言ふべし。已に身軀雄大なり。その行爲活達なり。然らば其智識は如何。勿論文字の力は、漢婦人に比して勝る所はなからん。恐らく書籍を繙き、小說を讀むの讀書力はあらざらん。されど家事を整理し、兒女を敎育し、且つ溫良貞淑なるの一事は、漢婦人の自墮落不活潑なるに比して、天地の差あるを認むるなり。中にも貞淑の一事は、聞くも悅ばしき限りにあらずや。古來婦女の貞烈を說くもの、漢族にもなきにあらざれども、滿州婦人中には更に多きなり。茲に一の逸事あり。先年北清事件の當時と聞く。某滿州八旗の一人あり。日、英、露、佛、等八國の聯合軍は、已に天津の堅城を抜き取りて、今や進みて北京城下に押し寄せ來らんとする勢にて、皇上と太后とは、行李匆々、夜遁れ出てゝ陝西の西安府へ蒙塵せらるゝこととなり、某旗人も、出でて八國の兵を禦がんとて、通州さして進發せり。憐むべし、彼は空しく戰場の露と消え失せ、敗軍の常とて、その死を家人に報ずるもの

もなく、我れ先に皇上を逐ふて、西安府へ遁れ去れり。已にして北京城も聯合軍の陷ゐる丶所となり、彼が家族は、日本軍の保護を受けて、僅に露命をつなぎ、その妻某氏も、我が良人は、定めて西安に遁れ居るならんと想ひて、歸り來らん日を待ち佗びつ丶ありし。已に其の年も過ぎて、平和は恢復し、皇上回鑾の報も傳はり、良人歸來の日も、今や遠からずと、喜びあへりしが、やがて同僚の人々は、回鑾準備の爲めとて、三五歸り來ること丶なれり。その妻、直ちて騖せて、良人の安否を尋ぬれば、想ひきや、先に通州に於て果敢なき戰歿の悲運に遇へりとは。之を聞くや。顏色決する所あるもの丶如く、家に歸りて身を清め、白衣を穿ち、將に自刄せんと身構へたり。家人は驚き、倘ほ若き身の、再嫁するも苦しからずなど、種々宥め慰むるも、夢にも聞き入れん樣子もなく、遂に自刄して死せりと云ふ。こは、訴へに出りて、實地に之れを扱へる某日本民政官の、感の餘り物語れる所なり。か丶る例は、他にも、滿州人中少からざりしと云へり。然るに、漢人に之を求むるに、寔に晨の星、寥々として、幾何かあらん。二夫に見えずとの格言は、本元たる漢族婦女の間に行はれずして、却て新來の滿州婦人に恪守せられつ丶あるは、亦奇ならずや。滿州婦人の精神的教育は、かくまで實際に行はれ居れば、若し之れに加ふるに、日新の學藝を以てせんには、適れ女子教育に好果を奏し得て、清國の文明に稗益する所あらん。

(二)漢人婦女

滿人の婦人が、斯くも活潑にして溫良、且つ貞烈なるに反して、漢民族の婦女は如何なる狀態にありや。之を言ふに先だちて、豫め漢人男子の狀態を一瞥せざるべからず。彼等漢人は、一男子にして數妾を有するもの稀れならず。甚しきは、之を有するを以て、名譽となし、有せざるを以て、甚しき耻辱と心得るに至れり。余が知れる某富豪は、その家、蘇州にあり。妻と妾とを有する五人。來りて北京に寓す。また妾を畜ふる數人。倘ほ足らずとして。家外に數人の妾を養ひ、天津に、上海に、到る處に之を養ふ。漢人の富貴なる者、概ね斯の如し。滿人とて、妾を蓄へざるにあらざるも、漢人の如く甚しからず。加之、婦人は一室に窒居して、外出するを許されず。年中、足、門を出づる者稀れなり。其自由は、全く拘束せらる。已に漢人の男子は、斯の如く一妻を以て足れりとせずして、到る處に、愛を分ち、且自由を拘束す。女子たる者、之を以て快とする者あらん。是に於てか、漢

人婦女が日常の行動を見る。彼等は終日、一室に籠居して外に出でず。室には俳優の寫眞を掲げ、見て以て歎となす。少しく。文字の力ある者は、稗史を繙き、小説を讀み、淫猥非倫の書を目にして、また顧みず。飽けば茶菓を買ふて食ひ、睡を催せば乃ち眠むる。彼等家事を見るを要せず。厨房を顧みるの必要もあらず。食は男子の作る所、衣はまた成衣局の調ふる所。その職とする所、唯々男子が娛樂の具たるを以て足れり。自ら賤しみ、自ら侮り、自ら以爲らく、我れ若し捨てらるれば。復た他を求めんのみ。此を離るれば、彼に合せんのみと。子女を教育せんと欲するが如きは、殆んど念頭にあらず。況んや國家を想ひ、社會を憂ふるが如き高尙なる精神をや。伶悧多智なる漢民族も、その婦女の自墮落、不活潑、淫猥を見ては、到底濟度すべからざるを知らん。之を歐米婦人の活潑敢爲なるに比し、之を我國子女の、食を調へ、衣服を裁ち、子女を教養し、家庭を整理するに比して、寔に天壤の差ありと言はざる可らず。滿人婦女に比して、單に纏足あるのみの別ならんや。今や淸國、力めて歐米の新思想を輸入せんとし、幾多の學堂を興し、外教師を聘するも其國の子女にして、此の如くならば、子女の精神的教化は行はれずして、支那は依然として支那、到底國を愛し、社會を利し、淸をして開明富强の淸たらしむる事能はじ。

(四)婦道頹廢の原因　惟ふに淸國婦女子の、斯くの如き境遇となるに至りし原因は何れに有りやと云ふに、蓋し國勢之をして然らしめしものならん。由來、漢族の婦女、優柔、淫猥、妬忌、陰險、無智、無能の稱ありと雖、而も古來今日の如く甚しきはあらざるべし。詩經中に顯はれたる周代の婦女の、活潑にして勤勉、貞淑にして溫良なりしは、人の知る所、烈女傳中に存する唐宋等の婦女の、尙ほ兒女を敎化し、家庭を整理せしは、誰か否定する者あらんや。而も今日に至りて、此の如きの悲境に陷いらしめしもの、畢竟するに國勢の然らしめしものならずんばあらず。夫れ淸朝、滿州より興りて、漢族を壓倒するや、漢人は多く閉塞して野に在り。要路に立ちて、天下を經理しその權力を伸長するが如きは、全く不可能の事に屬せり。凡そ漢民族の常習として、官界に出でゝ權力を握り、威望を天下に博せんとするは、そが唯一の理想たり。彼等が門側大書して揭ぐる所の文字に見よ。曰く、「文以及ニ第狀元」「武以受ニ封侯伯」とは、到る處に揭出する辭句にして、秀才を經て擧人となり、進士に進み、幸に

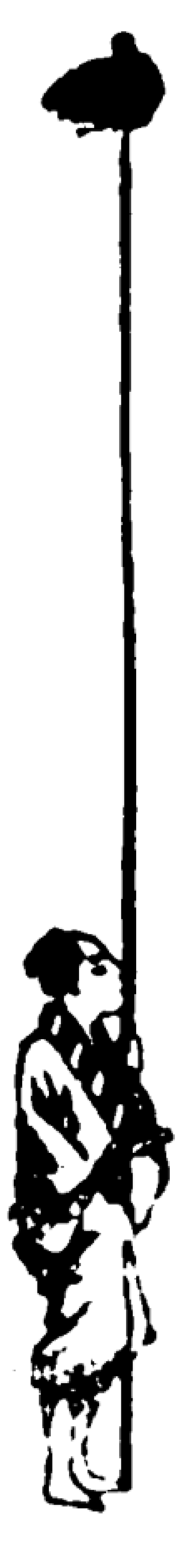
して狀元に及第するの榮典を受くれば、文官の榮譽、これに過ぐるなし。武童、武秀才、武擧人、武進士を經て、一甲、二甲等の榮典に浴し、以て領侍衛に入り、出でゝは提督となり、總督となり、軍門と稱せられ、宮保と崇まれ、遂に侯伯の榮爵を受くれば、武人としての幸運、こゝに極まる。是れ漢人の常なり。東洋、由來官尊民卑の風あり。特に支那に於て甚だし。若し邦人にして支那人と會晤せんに、彼等直ちに問ふ。閣下幾品（閣下は何位なりや）、當甚麼差使（御役は何ですか）と。邦人は此問に對して答ふるに苦しむもの比々みな然り。かく迄に官位に渇せる彼等は、若し富貴ならんには、大金を出して官を買ふ。之を捐官と云ふ。捐官の相場は、道臺たらんに、八千兩、知府たらんに六千六百兩、進士の學位を得んに一千三百兩を要す。而も尙ほ之を買求せんとするもの頻りなり。清廷之を以て一の財源とする程なりと云ふ。凡そ斯くも、官を尊び、民を卑む所の漢人が、其王家倒れて、北狄の新政府現れ、滿人に非ざれば官位を得ず。漢人は凡て野に在らざるべからざるに至らば、その不平は如何ばかりぞ。凡そ一方に抑壓せらるれば、他方に發するは、人の常性なり。猶太人は他國に逃るべし。波蘭人は、新世界に走るべし。漢人は然る能はず。是に於てか、學識あり、詩才あるものは、詩歌を弄びて不平を露せん。小說戲曲を作りて世苦を忘れん。是れ蒙古族の跋扈せる元代の漢族に、始めて琵琶記を出し、西廂記を生み、水滸傳を產せし所以ならずや。若し氣力なくして、今世遂に榮達を得ずと斷定せる者は、厭世思想を發して、快樂を彼の世に求めん。是れ五胡十六國の戎狄跋扈せる時に方りて、道安を出し、慧遠を生じ、次で魏周の時、曇鸞を出し、道綽を生じて、或は兜率往生の信仰は起り、彌陀の淨土に往生せんとの白蓮社の念佛は起れり。謝靈運の英、陶侃の剛にして、且つ佛教に歸せしに非ずや。南北朝に至りて佛教の俄然として振起せる、他の一由は存すべしと雖、蠻族の跋扈して、漢人の閉塞せるはその大なる理由ならざるべからず。若し學もなく、識もなきの徒の如きは、榮達已に不可能ならば、不平を慰するには財を積みて、耳目を喜ばし、聲色を恣にするの外、また別途なからん、清朝に至りて、士道の頹廢せる、蓋し、滿人の跋扈に由らずんばあらず、明朝に在りて、王陽明の嚴肅敎を出し、方孝儒史可法等の義烈を生じ、移宮、紅丸、挺擊の如き小問題に對してさへ、力を極めて論諍せる

漢人が、清朝に至りて、如何に考證學の弊とは云へ、今日の如く、士道の頽敗せるに至れる、全く別族の觀なくんばあらず。彼等の歡樂は、今や一に肉を嗜み、色を漁するを以て唯一の理想となすに至り、その結果は、婦女を拘束して、その自由を奪ひ、妾を蓄へて非倫の行爲に出でんとす。婦女また男子が娯樂の器を以て甘んじ、其良心は痲痺し、子女の教化を忘れ、自墮落、不活潑、優柔、淫奔に走るに至れり。

(五)漢人の表裏二面　或は言ふべし。漢人必しも爾かく士道の頽廢せるを見ず。彼等、その客と相對晤する、曾て女子の語を口にせず。その文章を草する、曾て男女の字を筆にせず。男女は嚴に別あり。決して相對話するを得ず。何の士道の頽廢か之れ有らんやと。是れ寔に其言の如し。漢人の話頭、曾て男女の語を口にせざるなり。若し西人或は邦人が、間々男女を語らんか、彼等漢人は、忽ち顰督(ヒンシュク)して、その人を輕侮す。甚しきは、講堂に立ちて、西洋語學の文法を教授するに方り、moon の語は女性なり、Sun の語は男性なりと言はんか、彼等は忽ちにして、之を笑はん。教師を輕侮せん。謂て曰く、此教師は忘八(ワンパー)なりと。(忘八とは好色の意なり)、若し文章を草せんに、邦人は直ちに老少男女の語を用ふるも、漢人は老少を云ひて男女の語を用ゐるを許さず。此等の事は、邦人が、漢人と交際するに於て、常に注意すべき點にして、若し計らずも、之を口にし、之を筆にせんか、忽ちに彼の心中輕侮の意を生じ、相歯するに足らずとせん。加之、漢人婦女は、他人と相面晤するを許されず。若し相語ることあらんには、忽ち奇怪の風説は生ずるなり。されば、商家の店頭、一人の女子あるを見ず。茶館、飯館、一人の給仕女あるを見ず。男女は斯の如く、嚴然として相離隔す。故を以て交際に於て、尤も單調の感なくんばあらざるなり。蓋し是れ孔孟道德の其極端に走りしものにして、某氏が所謂、儒教中毒なるものとす。而も、かゝる嚴肅なる漢人が、平素の素行は、實に前に言へる所の如しとせば、支那人は尤も假冒に巧なるものと云ふべし。否な彼等は、その慾心と、孔孟の教化とは、恰もヂレンマの狀態に在るものと謂ふべし。

(六)改革の方針　吾人は、清國を完全に發達せしむるを要するや否やを知らず。西人の爲す所は清國を導きて開化せしむるを欲せざるものゝ如し。なるべく一日も長く未開の狀態に置かんは、彼等の利益なればなり。その學校を興し、學術を教授するも、語學をの

み教へて、科學を授けず。吾が邦人の教育法は全く之と趣きを異にせるの觀あり。知らず。何れが是か、何れが非か。こは他日論ずることゝして、若し完全に發達せしめんとせば、如何なる方針を取るべきやを言はん。凡そ漢人の尤も缺くる所は愛國心あり。その身と、その家とあるを知りて、其國を知らず。鄕黨あるを知りて、國家あるを知らず。是れ寔に一大缺點なり。人みな云ふ。日本には國家ありて社會なく、支那には社會ありて國家なしと。尤も當れり。凡そ國を起さんには武器よりも愛國心を主とするは、明白なれども、漢人はこの主要なるものを有せず。否な有せざるに非ず。彼等は皇上（ホワンシャン）を尊ぶを知り、中國（チュンコー）を愛するを知る。而して表面常に之を言ふ。而も裏面にありては曰く、我が國は滿人に奪はれたり。今の淸は彼が國にあらず。今の皇帝は我が皇帝にあらずと。彼等をして、愛國心あらしめんと欲するも得ざるなり。忠勇の心を生ぜしめんとするも得ざるなり。彼等は、その國を有せず。權利を伸長するを得ず。其極、今日の自墮落民となり、此の如き淫奔婦女子を生ぜり。若し淸をして眞に開明に誘はんには、滿人と漢人との別を去り、漢人をして權利を充分に伸長せしむるを要す、自由あれば、從て愛國心を生ぜん。愛國心あらば、忠勇の氣力を生ぜん。凡て國家と云ひ、社會と云ふ。凡て是れ有機的のものなり、之を發達せしむるには、亦有機的ならざる可らず。今の淸國は有機的ならず。滿漢の混合躰なり。國家心なき、素より當然ならずや。人は言ふ。淸國は儒教中毒の結果今日に至れりと。是れ皮相の見、儒教は爾かく害毒を與へたるに非ず。滿人之を然らしめしなり。征服之を然らしめしなり。今日滿漢の區別、之を往時に比するに甚しからずと雖、而も自ら相溶融せざる所あり。權力大に同じからざる所あり。近來勅令を以て滿漢の雜婚を許せるが如きは、寧ろ諸國の爲に喜ぶべき現象なり。近時、漢族婦人の一二我國に留學するあるを聞く。彼地また一二女學校の建設あるを傳ふ。變すべきは則ち變すべしと雖、根本の改善を怠らば、全く好果なからん。婦人の狀勢を記して、一言改革に及ぶ。



海外新潮

歐人の眼に映したる日露戰爭

海外大勢

精神上より見たる吾人の敵

（ノーヴォエ、ヴレミヤ十二月二十二日）

日本との衝突は露西亞社會の廣大無邊なるが爲に實に意外に出てたり。此戰爭の可能、其不可避は假令過去三年の間に時局の發展の人目を衝動せしむるものありしとせよ、其之あるべきを思ひし者は實際に於て少かりしなり。日本人は吾人の極東に於て彼等と交渉するの無益なるを思ひ、之に介心するの勘少なりし間に盡く吾人の事情を研究したり。

此社會にありては日本を知るもの少きが爲に彼に付ては從來良好の觀察をなすに傾きたりき。以後、日本の艦隊は優勢なり。日本の陸軍は勇敢なり。日本の學藝は進歩せり。日本の婦人は美なり。日本に於ける生活は愉快なりと。其すべての事情の共同生活に適合する條理によりて殆んと貫徹せられざるにも拘らず、吾人は常に此日の出る國に向て幾何かの趣旨を附し來りたりしなり。然るに彼が宣戰の布告なくして夜襲を吾人の艦隊に加へたる事實は吾人の彼に對する從來の觀察を一變せしめたり。日本人は此一擧によりて其實に歐人が先天の美質をなせる多くの事情をば絶對的に理解するの能力なき卑しき人種なることを證明したり。彼が道德上の氣風は陋劣なり。今や其眞面目は一切の假裝を脱して吾人の面前に躍出したり。

多くの遊歷家や英國の新聞紙は頻に日本の文化に付て美言を連ねたり。されど試に日本の豫算其軍隊、軍艦、商船、郵便、電信等に注視せよ。文明國の徴候性質を示すべきもの果して何處にかある。吾人にして之を熟視せんか、必や多くの缺點を發見せずむばあらず。第一に日本は貧國なり。特別の自然的富源を有せず、全然生存の良條件を缺けり。日本人は自負自贊して事の病的なるものなるも、彼等は眞の歐人よりも下等なり。彼等の智力は發達限りありて正しく事物の關係因果を了解するの能なきなり。この事實は極東にありて獨り日の出づる國なるを見るべきのみならず、亦實に之をすべて馬來人種及其混成人種の特徴なりとすべし。馬來人種が太平洋の己が島國を愛し、自ら最も開化せる人民を以て任じ、其國はこれ即全世界の中心なりと信ずる事はこれ東洋の事を知れる人の何人も知悉する所なり。彼は白人種の智力上に於て已に優り、其物質上の力も亦頗る偉なるものあるを認めながら、己自ら蒙を啓きて之を拔くべしとは思はずして、徒に小兒の如くに自負傲慢の習を逞れ、以て得々として獨り高等人種を自任しつゝあるなり。思ふに這般の心理現象はこれ蓋しすべての劣等人種に共通なる事にして、日本人も亦此關係に於て除外例ならざるが如し。

日本人が他の黃人種より遙に理解の力あり、活潑なることは眞なり。彼等は其特有の堅忍と精緻とを以て公侯伯子男の爵級に至るまでも歐洲の制

度文物を模し、又諸種の歐洲學藝を學びたる後、其歐人の教師を遠ざけたり。されど、彼等には歐人の天才を組織すなる智力上精神上の性質を欠けり。彼等は模倣に巧なり。されど彼の祖國が物質上の富源を欠くと同く、新機軸を出すの能を欠けり。最高の精神上の資源を欠けり。彼の地は此點に於て日の出づる國にあらずして日沒の國なり。羅馬と戰へるフエンケー人の如し。當時カルフアゲン(カルタゴの謂)にはすべて文明の形式上の徵候備はりありき。陸軍あり、强き艦隊あり、何よりも第一に富を有したりき。此最後の者これ實に今日のカルフアゲンたる日本の欠く所なり。之のみならず古のカルフアゲンには模倣の能と企業力とを大に有したりき。されど唯一時の羅馬に存してカルフアゲンに欠きしは國を强大にする精神上の力にてありき。是に於てかカルフアゲンの富國もあわれ、嘗に敗軍の辱を蒙りたりしのみならず、之に關する記憶すら失せ去りたり。一國のかくまでも速に滅亡して殆んど其殘址の見るべきなきに至ると云ふは又實に悲慘の極みならずや。日本人は此程細心と確心とを以て海上に於ける運動を行ひたり。其結果は彼等に向て利益ある事情を目算し、之に乘じて奇功を博したる速斷に出づるが如しと雖、此事亦必しも然らず。日本人が智力の活動は寧ろ粗なり。其思想亦從て粗なり。彼等が思意の如何は其反映たる日常語、其精神及形式に於て之を測り知るべし。單純なる言語、文句の如きにありても日本語にありては頗る長し。例せば余は汝を愛す(ヤ・ワッス・ルブリユー)の單文も日本語にては私はあなたをすきますとなる。チユイ・モイ又はチユイ・モーヤなる露西亞語の二語も日本語になほせばあなたは私の人でおれます(原文此の如くあり、誤謬なりと雖、別にこゝに訂正せず譯者云ふ)となるなり。此思想表明の仕方の長たらしきをは日本人の智力機關の構成に關係せざらんや。露國との作戰の計畫は過ぐる數月のみならず、少くとも輓近四年間日本の汲々として準備しつゝありし所、既に此三年間はすべての砲兵工廠は晝夜兼務にて夜工の工夫すら各工廠に三千以上を數ふる程なりしなり。今にして之を見れば彼が整然たる事業と其成功とは更に其怪むべきなきなり。されど永く極東にありし人々は日本人が如何に容易に其豫期せざりし事情の爲に敗亡すべきやを知れり。例へば日本鐵道の列車の時間に後るゝとは非常なるものなれば、全線に依て如何ほど遲刻すべきや測り知るべからざるべく、日本人の特色なる粗心はこゝに至て其破綻を現すに至るなるべし。



世界の渦巻

日本人は吾人に對する作戰計畫に於て工夫を凝らし、就中、吾人の平和

を好めるに乘じて夜襲の奇功を博せり。これ實に詭詐なり。國際法規を破り、國際の道德を無視したるものなり。すべて亞細亞人、黄人殊に其模範的代表者たる日本人と交涉する時には歐人は須く責任、道德、義務等の觀念を擲たざるべからず。日本人は如何なる義務の存するをも無みして、已に利ある所にのみ走るなり、私の生活に於て然り。國家及國際の關係に於ても亦其然るを見る。彼等は相互の間に信ずるの念あること少し。これ原因の存することなり。彼等は歐人に向て信實を語ることなし。故に何事に付ても彼等の言を信ずること能はず。例へば日本の外交官や海軍代理者の我國に來れる者が、自國に付ては沈默しながら、吾人の生活に於て屢〻吾人に不利なる報告を發するが如し、權謀、術數、無恥てふことは歐洲とてももとより之なきに非ざれども、此の如きはすべて惡事を以て目せられつゝあり。之をなすことは不道德なりとせらるゝなるに、日本人は公然之を行ふて恬として恥づるの色なし。凡そ他人に利あることは我が利にして小狹義に於ける實行的功利主義はこれ實に日本人の哲學、其人生の根本觀念にしてこれ全く佛教の教理と合致せざるものなり。日本にては佛教 否 總じて倫理教としての宗教は更に勢力なし。日本人は先天に於ても後天に於ても功利主義者なり。不德の行をなすも毫も之を不道德なりと認定することすら敢てせざるなり。彼等は之をなすを有利なりとし、倫理上の管見よりして之を評定することを思念せず。商賣上の事にても、家庭の間にありても、私の生活に於ても政略を用ゐて怪まず。己の約せる商品にても、其市價低落の爲に、損耗の身に歸すべきを見れば、之を受くることを拒む。彼等は已の妻に語て云ふ、汝は已に老齡に達せり。余よりは最早要なきの身なりと。總じて日本婦人も亦己の生活に限りをおきて之に甘んじつゝあり、三十歲に達すればはや老婦人を以て自ら居れり。彼女は日本に頻繁なる離婚の命を其夫よりして受くることなかりしならば、非常の幸福として之を欣貫するなり。已に義務の感なく、道德、名譽の觀念なし。如何に吾人は日本人を考へ、之を待つべき。或る道德學者は云ふなり。日本人の人生觀は極めて實際的にしてすべて無目的の儀礙なく、殆んと超人たるの觀ありと。されど之と見を異にするものは皆かゝる道理の到底不可能なるを思ふのみならず、歐洲の文明人はすべて何處にても之を否認せざるはなし。若し歐人の遍遊家にして會〻日本を讚美するの言を連ぬるものありとせば、これ彼等が皮相的に日本を觀察せしによるべけんのみ。日本流の道德觀に近きは英人のみなり。これ日露の衝突に關して英人の日本に對してなしたる同情によりて之を見るべし。されど英人の道德觀は日本人のとは全然相同じと云ふを得ず。其自己の利害に關する條件に接するとき殊に然り。彼等は日本人を見るを要するに印度人、暹羅人又は支那人に對するが如く、又最劣の人種の代表者として其運命上已の用に供せられたりとする馬來人の如きなり。

英人は其他の歐人の如くに日本と交際したるが、殊に日本に媚び、之に向て讚美の辭を與へ、其偉大、其文化、其活動を頌し、日本國民の品格、其勇氣、場合に於ては已の身を獻捧するの士風、其火の如きの愛國心を褒めたゝへたり。然れども日本人は熱し易きこと恰も藁の燒け易きが如く、又其消失すること之が滅盡し易きに似たり。これ實に彼のなす事、彼の決する事、一として信ずべきものなき所以なり。されど兎に角に日本人は殆んと病的なりと云ふて可なるべき程の自愛心を有せり。往時にありては此心は實に辱められたるものが、辱めたる者に對して自ら割腹する程までに昂上したりき。今や彼等は歐洲文明の牛輸入によりて又如何にしてか、復讐に向て仇を報ゆべきかを知れり。是に於て彼等は最早其舊式の割腹法をばこゝに適用せざるなり。彼等が露國を愛好せざるは

其威力に畏懼するが故にあらず、朝鮮、滿州に關する利害の衝突はもとより重要なるにあらずと雖、其點よりして露國を畏るゝにも非ずして、全く露國が深く彼を凌辱したる故によるなり。こは日露戰爭の後、露國が日本の勝利を妬みたるに起れり。此事ありてより日露の關係に付て記する所の日本の言文にして苟も下の如き事を喚起回想し、之を結句とせざるものあらず。其言に曰、還遼の事を懷へと。これ實に羅馬のカトーが其時人に向てカルタゴは滅ぼされざるべからずと反覆主張せしと相似たるものなり。

此の如き文言は國民の精神を激騰せしむるの効あるべし。然るに今や時局に明達せる獨逸の或方面よりして吾人に報ずるものあり。曰、日本に於て戰爭を希望せるは單に少數の煽動家のみなり。國民一般は靜に戰場の公報に聳耳しつゝありと。之を要するに日本人民は戰爭の經濟上の重荷如何を感知せざるべからざるべく、殊に露國との貿易にて生存するなる蝦夷嶋の事を慮らざるべからず。蓋し此地方露西亞よりして日本は海產物を得、之を食料又は肥料として用ゐ、而も此肥料は又此國の主食物たる米の作に使用すべき重要品たればなり。之によりて日露の戰爭は北方日本の人民をして年三四百万圓の損料を負はしむるとゝなる大問題にあらずや。（四月十八日譯）

べく彼等は其生業を失ふべし。是に於て米は缺乏し、其性質は不良となり、其價は高貴となり、食物を失ひたる士人の將來を悲觀するに至るべきは必然なり。日本の國業こゝに瓦解せざらんとするも得べけんや。彼の將來には富源なきなり、之に付ては露國の終に成功すべきを疑を容れず。日本はかくの如くにして其妄想的自愛に前後の分別を失ひ、己を脅すなるすべての窮困を猪勇的に物ともせずして却て經濟上の大紛亂に突入し、戰爭開始の以前にありてすら大なりし此大紛亂と丸貧乏とはましてや時局の發展するに從ひて如何樣の不結果を來すに至るべきか知るべからざるなり。彼には實に財なきなり。

日本は恐らくは此欠亡を補せんが爲に合衆國に於て其債を募らんとするならむ。されど、外國の資本家の彼を信せざるを既に久きなり。軍費なし。支那よりの償金も已に完受したり。何處にか戰爭の神經系統たるべき資金を調達すべき。これ實に彼の



其次は

日露戦爭を評す

「二月二十六日」　「フリー、プレッス」

クリミヤ戦爭の開始せらるゝや、世界の注目は皆之に集り、戦場よりの新らしき出來事を得んとするに如何に熱心なりしかを明かに回想す。當時の新聞は、今日の如く速かなる報導を爲す能はざりしも、猶ほ且つ熱心に讀まれたり。一般の文學に對する印刷はハタと打ち絶えて、世は皆新聞の外何ものをも讀まざるに至れり。彼等は其れを讀む心も起さず、時をも有せず、偏へに其全心を此戦爭の如何に傾けたり。

クリミヤ戦爭の終りてより、佛墺戦爭起り、亞米利加の内亂あり、丁抹及び數多の戦爭ありしと雖も、今回の日露戦爭程あらゆる社會の視聽を聳やかしたることはあらざるなり。ひとり我英國のみならず、米國も又英の殖民地も、皆同情を寄するは日本なるが如し。而して「若し日本にして一旦事の悪しきに至らば此同情は實際的行動に顯はるべしや」といふ問題は屡々聞かるゝ所なるが、予は歴史の光明に照らして全く實際的行動にあらはるゝことなかるべしと考ふ。例へば丁抹の事例を考へよ、丁抹は獨と墺に對して尤も大膽に爭ひたり。當時英の外務大臣たるジョン、ラッセル氏は激烈なる檄文を草し、且つ丁抹の反對者を威嚇したるにあらずや。又諸處に於ては盛んに會合の催あり、勢ある演説又は印刷物の配布あり、丁抹を助くるは尤も確實なる事實なるが如く思はれしも、此事實が一旦衆議院に持ち出さるゝや、忽ち「ノオ」「ノオ」の叫聲を以て打消されたり。事の茲に至らざる前、學生及び其他の一隊は武器の力によりて丁抹を助くべく本國を出發し、予が通學せる學校にてもいかに熱心に其報知を歡迎せしかを記憶せり。當時（一千八百六十四年）の議員の多數は急進論者なりしを以て、皆丁抹を助くべしと思ひの外、投票の結果は實に全く反對の意向を示せり。若し今回の戦爭に於て日本を助くべしとの論起らば、寧ろ我黨の意外とする所なり。如何なる拳法家と雖も其利腕を捉られたる時は、他人の之を支ふること難きが如く、敵國に敗を取るものは之を如何ともすべからざるなり。若し日本が救助を受くべしとすれば、救助は日本が強き場合に來るべくして、彼が打撃を蒙りたる場合に非ず。彼日本の今日までの經過は勝利多くして今後も恐らく然るやも知るべからず。然れども陸戦は未だ終らず、今始まらんとする場合なり。露國は海軍の力弱き國なり、露國の記者も之を發ふに、時、又は金の乏しかりしことを認むるものゝ如し。然れども陸戦に於ては恐らく状態は變化すべし。タイムスの記者は嘗ていへらく、「露國人は決して怠惰なるにあらざるも、効果ある事業を以て非常なる困難なる勞働なりと思惟する程、思慮なく、不注意にして恰かもアイルランド人及びスコットランド人の如し」。然れども此記事は戦士に向うてより寧ろ軍糧局の人に向ていふべき言なりとす。アーチバルド、フォルブスは曰く「予は北獨逸の兵士が、其背嚢を動かすことなくして三十三哩を進行するを見たり。然れども予は露軍がアルガリアに於てなしたる如き光彩ある進行を見たることなし」と。然るに此光彩ある軍人は彼等の國人によつて如何に遇せられつゝありや。耻づべきかな。彼等の靴は數哩を行かざるに、早くも其靴底の破るゝが如き悪質のものなり。彼等の麵包は、砂塵と交れるものにして、其砂糖には不潔物の混じたるものなり。恐るべき眞相は千八百七十八年の軍事委員の手によりて暴露せられ、露人は皆其の實を知るに至りたり。然れども今に至るまで、其缺を補ふに至らざるは確かなる事實なるが如し。

予がかく書きつゝある間に、露兵は戦地に達するまでに大いなる困難を嘗めつゝありとの電報に接したり。然れども予は若し一旦コサックスが

長槍を以て戰地に達したる曉には、日本兵の成行に就て大に懸念なき能はず。吾此懸念に對して或者答ふらく、日本人は中央亞細亞の人間にあらず。コサックスは歐化せられ、訓練せられたる敵に向ふことなれば甚だしき困難を感ずるなるべしと。予は獨逸新聞の記者にしてスコベロッフ將軍に從ひ、中央亞細亞に行軍したる人と逢ひたるに、彼は語りて曰く、將軍は實に惡魔の如くに働き、又其部下は小鬼の如く戰ひたり、而かも其死傷は實に恐るべきものにして、遙かに敵よりも多かりしと。

若し日本にして、過つて敵に敗を取ることあらんか。其結果や推して知るべきのみ。恐らく諸外國の救助を受くることは難かるべし。露國は佛國より三億万磅を借りたれば、露國は佛國の後楯を控へ居ることは事實なれとも、日本が果してかゝる同盟國を有するや否やは未だ疑問に屬すといふべきなり。

平和の方途を講ぜよ

「ニユー、エージ紙」

「二月廿五日」

日露戰爭の開かれたる今日に當りて、よく歐洲國際間の關係を知悉し、以て速かに平和の局を結ばんことに盡力するは極めて必要の事なりと信ず、日露の戰爭にして永く其終りを告げざらんには、他の勢力も遂に此渦中に投ぜらるゝに至るべし。例へば佛蘭西は露國に向て深く關係ある者ゝ如し。若し露骨にいへば、佛は露の救助として四億万の貨幣を貸したりといひ傳へらる。然ども如何なる場合に於ても露國は獨逸に對する同盟の價値を考へざるべからず。現今に於て佛は英國の重大なる同盟國なり、然れども若し吾英國が日本を助けんことを主張すれば英佛との平和的關係の破れんことは殆んど疑を容れず。若し事斯の如きに至れば、吾人は獨逸を以て吾人の味方に數へ得べしと信ず。然れども熟慮すれば、斯の如きは實に大いなる災害の基にして、吾人は一日も早く平和の方途を見出さゞるべからざることを思惟するものなり。吾人はウエストミニスター、ガゼツトが此の如き努力を今日に於てなすは早計なりとしたる論法に驚かざるを得ざるなり。此戰爭が若し延いて他國に及ぼす時は、世界の一大事變なることは誰人と雖も認むるを誤らざる事なれば、今日に於て此れが平和の方途を考ふるは何ぞ早計なるの理あらんや。

吾人は兩國中の孰れが勝利を得べきかを極むるは平和の方途を見出すの先決問題なりといふ意見とは一致すること能はざるなり。若し此考察にして當れりとするも、かゝる事情の定まりたる後ならば、負けたる方に向て屈辱の心の放れざるは事實なり。

平和の道を考慮すべきは實に今の時なり。兩國未だ勝負の數明かならざるの時にあり。兩國孰れも正當なる目的の外何の野心なきことを主張す。露國は海に向て接近せんことを求むるとも、或は日本に敵意なきものとも見ることを得べく、日本の獨立が或は露國に向て厭ふべきことにあらずとも考ふることを得べし。かるが故に米にせよ、佛にせよ、或は獨にても、我英にても、日露の兩國に迫りて二國の願望を滿足せしむるには、此後戰爭をなすに及ばざることを忠告すべし。即ち露國をして滿州を放棄せしめ、其代りとして水温かなる港灣に接近して商業上の便益を圖り、終年貨物を取扱ひ得るの法を講じ、又日本をしては保護の上に就て確實なる方法を得せしめなば、兩國とも忌まはしき戰爭に於て其力を勞せずして、大いに平和の事業に其心を致すを得べきなり。此說は早くより吾人の唱導したる所にして、世人が多少の同情を以て迎へらるゝは大に吾人の心强しとする所なり。

吾人の利益は、全然極東に於ける平和を恢復するにあり。日本を煽動して露國を惱ますを以て、我國の利益なりなど考ふるは實に大いなる誤解

なり。之に反して露國の正當なる商業上の發達を計り、以て彼をして文明進歩せしむるは、我英國の利益なり。かるが故に吾人は兩敵國をして斷然戰を止め、平和の方法によりて各々其願望を果さしむることに極力盡力せざるべからざるなり。吾人の最も遺憾とする處は、我政府が實に無力にして此方法に對する斷乎たる所置を望むべからざるにあり。然れども若し米國にして之が努力をなさば、平和の方途は必ず顯出すべきを疑はざるなり。而して又一方に於ては有爲なる我國王のあるあり。若し其外交的の手腕を論ぜばあらゆる大臣を悉く合せたるよりも恐らく敏腕を有せらるべしと信ず。平和の方途にして一日速かなれば、一日の益あり。世人宜しく熟慮する所あれ。

戰事に於ける日露の財界

「二月廿二日」　「デーリー、グラフヰック」

近時南亞弗利加戰爭が巨大なる費用を要し、以て英國の國庫に非常なる影響を及ぼせることを考ふれば、極東に於ける兩敵國が、絕えず戰爭中に於ける財政問題に就て論議しつゝあるを聞くも毫も怪しむに足らざるなり。露國は數年間着々として金の蓄を集めつゝあり、今は已に七千五百万磅の額に上れりと傳へらる。此額は一見甚しき巨額なるが如く思惟せらると雖も、尙ほ英國がボーア戰爭に費やしたる三分の一に過ぎず。而して若し此戰爭にして永續することあらば、露國は其不足を補ふべく、勢ひ外債を求めざるべからざるに至るべし。若し露國の經濟界の狀態にして强固ならば、內債を募集することは尤も成功すべきことならんも、如何せん露國にて集めたる資本は、比較的少なきことは明白の事實なれば、其本源は遂に親密なる國の市場に仰がざるべからざるに至らん。然るに不幸なるかな、露國は現今歐洲に於て其信用全く地に落ちたり。

然るに一方に於て、日本の正貨は比較的少しと雖も、其經濟界の狀況——一千万磅の內債に成功せりといはるゝを以て見れば——は實に滿足にして、且つ一旦外債を募ることゝなるも、我英國も又米國に於ても尤も好意を以て其求めに應ずべきは信じて疑はざる所なり。

日本の成功

「二月十二日」　「セーニングアトバーテシー紙」

露國に對する日本の勝利は吾人が既に述べたる如くにて、日本の損失は尤も微少なるものなり、而して此著しき日本の成功は海上權を全く取得したるにあるは確言するに憚らざる處なり、而して露國は浦鹽港には僅かに五隻より成立せる艦隊を有するのみにて、出航の危險を敢てする能はざるや明なり、然るに旅順の殘艦隊は日本艦隊の勝利に左右されんとするも、そを助けんが爲めに南方より一の援助艦も送られず、かくて海戰が繼續する間に一面に陸戰は開かるべし。日本が旅順にその陸兵を上陸せしめんとして屢々空しかりしは事實なるが如し。されど釜山及び仁川の方面に於て日本の上陸は成功せり。殊に後者は京城を去る僅かに三十哩の港なれば日本が京城に入るは瞬時の間なり、かく日本が成功を續けつゝある間に、露國は西比利亞鐵道に破壞を生ずると屢々にして未だ修繕を了せざるが如し。從つて露國の形勢は日一日と危險に迫りつゝあるや明なり。旅順はやがて一面より兵糧を斷たれ、他面よりは援助艦隊を絕たれ、全く孤立の姿にて苦戰の陣をかまへざるべからず。(尤もかゝる狀態が既に達せりと見るはあまりに早計ならんも)吾人は日本が將來增々其の軍陣に注意して有功に進まれんを希望するものなり。

英國と露國

「デーリー、テレグラフ」

「二月廿二日」

露國公使が倫敦を去りてセントペータースバルクに向へりとの報を傳ふる新聞紙あり。吾人は近來兩都に於ける思慮なき惡新聞に書載せられつつある所を見れば強ち怪しむべきにも足らぬことなりと思惟す。吾人は或る英國新聞が、開戰以來露國に向て敵意ある調子を取りしは、宜しからざることゝして大に慨嘆したること已に一再にして止らざるなり。之に對しては吾人は些かの道理をも認むること能はざるなり。吾人は日本に對して同情を有せざるべからざることは尤も理のある所、又吾人は形式上の同盟によりて大に然るべき義務あるものなり。又一方に於ては數年來露國との關係多少面白からざる傾向を示したるも事實なりとす。然りと雖も之が爲めに露國のあらゆる行動を酷薄に論じ、又軍事上の失敗を事々しく攻撃せさるべからざる理由毫もなきにあらずや。之が自然の結果として大にセントペータースバルグ及びモスコーに於ける答辯者を怒らし、我英國に於ける如く激したる粗暴なる記載を爲すものを生じたり。

吾人は印度國境に於ける行軍の風説を耳にしたり。又クロパトキン將軍は滿州に送らるゝにあらずして土耳古に向ふなるべしともいひ傳へらる。かゝる出所なき風説は、伯林及び巴里に於て大いなる物議を釀す程流布せられたり。斯の如き時に當りて他の價値なき流言がベンケンドルフ伯の旅行に就て放たれ、又もや數百の人が囂々を極めつゝあり。然れども吾人は公衆に向て其誤解を正すべき地位にあるを喜ぶ。ベンケンドルフ伯の旅行は絕對的に政治的の意味を離れたるものなり。公使は其愛すべき性質よりして我國に於て朋友の多數を作りたる人にして、今回の事は全く家族的用務に係はることにして、彼があらゆる英人に對して好意を有するものなるは疑を容れざる所なり。英露政府の公用に就ては彼の旅行が全く何等の關係なきは呶々するの要なきなり。若しセントペータースバルグに於て戰爭に對する吾人の態度を問はるゝことあらば、皇帝に向て我英政府—(吾人は附加す)我エドワード王も兩國の間に毫も隔意を置くものにあらざらむことを證明すべしと考ふ。大英國の望む所は一日も速かに平和の局を結ぶことにして此感情を尤もよく知るものは必ずベンケンドルフ伯なるべしと信ず。

佛蘭西と極東時局

「デイリーグラフヰツク紙」

「二月二十日」

吾人は甞て極東に於ける戰爭は集合せる四力の發進に對する反動なるとを述べたり、時局は獨逸に國際法の皮相的研究に明かなる「獨逸新皇帝の降來以前に伯林と聖ペートスヴルクの間に從來存在せる關係を改新す」る要を生ぜしめたり、仁惠なる獨逸の中立は實に露國に取りては此際尤も必要なるものなり、(比公の有名なる秘密中立條約が復活せる如く各外交家をして南船北馬せしめたり)また佛蘭西に對しても時局は甚だしき影響を與へたり、そは過ぐる數日の間に同盟國にして交親國なる國民に對する憔悴せる熱度を回復したるをにて明なり、國民黨の機關新聞は有名なるナツクフアスの紋形を敵へる陰鬱の色を以て黃禍を畫けり、また他の影響は英國に全く誤解せられたりしフアシヨダア問題に關する露國の態度を示さん爲め、今日吾等はヘイガロに、奇しき電報の發表せられたるを見たり。夫は佛蘭西の公衆が日本に反して露西亞を助くるのみならず、パーヘイアアス、アルビオンの不幸なる計企を破らん爲め露西亞を助くると獨逸に過價視せられたるを示せり。吾人は此戰爭が我英國と

佛蘭西の交親に害せざる限はその不理を、爭論せんと欲するものにあらず、されど徒らに自然のまゝに其を放捨し置かんは露國の利益たるのみにして露國の國域に於ける瑞國の中立を露化するの恐あり、これ中立の適當なる概念なるや？否明に然らず、これ實に尤も危險なる先例を殘すものにして其目的は佛蘭西を苦しむるにあるが如し。

朝鮮と其國人に就て

「スタンダード紙」
「二月廿二日」

世界の政治組織に就て開かれたる公開演說に於て、ファーレル氏は「朝鮮」といふ題目の下に其所見を告白したり。其說に曰く。

朝鮮は現今の秋に當りて、其實際的價値に釣り合はぬ程の大いなる興味を有する國なり。朝鮮は疑もなく日露の間のかけ物なり。そが日露何れの國に屬すべきかは未だ疑問なるべしと雖も、現今の形勢より察すれば大陸に屬すべきは寧ろ自然の數なるが如く思はる。朝鮮人は懶惰なる、痴鈍なる國民にして、其日本人に優るの點はたゞ僅かに体軀の上にのみ存す。仁川港は朝鮮諸港中恐らく第一の要津にして、又今回の戰爭事件に於ける最要の中樞なるが如し。此港は洪大なる範圍を有する廣濶なる港灣にして、潮の干滿は日に三十呎の甚しきに及び、干潮の時は其近傍一面に惡臭を放つ泥地と化するなり。其岸に沿ふて多くの歐洲人の建物あり、又朝鮮の首府なる京城に向て列車の便あるを外にして、何等の取得なきが如し。京城は平原に横はる廣大なる首都にして、其四圍には嵯峨たる小山を環らせり。之が用に供する水は、市中を通じて遂に川に注ぐ所の大いなる開きたる溝渠にして、そはあらゆる道の傍に流れ居るなり。朝鮮人は常に信ずらく、若し不幸にして獨立すること能はずんば、其上に立つ者は日本にあらずして支那なりと。實際朝鮮國の形勢を察するに、政府と稱すべきは一もあるなきなり、名義上の主權は勿論朝鮮國王にして、理論上絕對の權力を有すべきものなりと雖も、實際に於ては總ての事物、即ち財政と雖も、行政と雖も、悉く各道に於ける種々なる官衙に於て執行せらるゝが如し。其各官衙に於ける各役人は一事物ある每に其世話料(コンミッション)として少くとも百分の七十五を取るべきものと心得居るが如し。(聽衆笑ふ) かるが故に國中に行はるゝは正しき政治にあらずして、尤も腐敗したる貪利なり。國王は國內の狀態に就て毫も知る所なく、又少しも注意する所なきなり。朝鮮に於ける尤も大いなる刑罰は磔刑と斬首なり。拷問は法官の唯一方法にして、法官より免るゝの一法はたゞ死あるのみ。墓場の撰擇は全く占卜の瑞相如何に關し、其瑞相の如何は全く僧侶の意向如何に關す。朝鮮に於ける支那公使は、全く朝鮮國王より高き位置にあるなり。朝鮮の宗教は全く佛教なり。基督教は大に之が傳播に努めたりと雖も、極東のあらゆる所に於て然るが如く全く徒勞に歸したり。

世人は未だ朝鮮人に就て多く知る所なし。彼等の性格は甚だ平安にして痴呆なるが如くに見え、其胸中には毫も國民的及び個人的熱誠を有せざるが如し。彼等の人生に於ける第一の愉快は、晴天の日小山の上に登りて終日煙草を吸ひ、無言無爲にして日を夢の如く暮らすことなり。(聽衆笑ふ) これ彼等の最高なる快樂の理想なり。勞働に關しては彼等勞働せざるべからざるに至れば勞働し、彼等の力の及ぶ少許の事を爲して直ちに之を終るなり。彼等は日本人が無策にして之を箝制せんとするに對して少からぬ不快の念を有す。日本人は朝鮮を有せんことを希望し、又予輩の見る所を以てすれば之を止むべき理由毫もなきが如くなるも、朝鮮人の之を好まざることは確かなるが如し。朝鮮は現今の狀態より察すれば、日本又は露西亞の何れかゞ、之を獨立して許し置くべき理由なし。

其執れかゞ之を有すべきは自明の事實なり。此平凡なる國民は、西洋と東洋との戰爭地たるを避けしむべからざる國の爲めに、大に擾亂せられつゝあるは實に憫れむべきの極みなりといふべし。

外人の見たる日本人の性格

「二月廿四日」　「デーリー、テレグラフ」

東京大學にあつて近來まで經濟學の教授たりしアーネスト、フオックスウエル氏は、昨日午後山の如く集れる聽衆の前に於て、日本人の性格に就ての演說をなしたり。其說頗る簡潔にして、よく其要領を得たるものなるを以て茲に之を掲ぐ。

日本の人民はモンゴリアン種族に屬すと雖も、彼等が久しく大陸と分離して、其社會上又は心理上の獨立をなし、六百年の封建制の下にあり、又彼等は未だ征服せられたることなきの事實よりして、支那、朝鮮及び其他のモンゴリアンとは甚しき相違ある性格たらしめたり。

國民歷史中にあつて尤も著しき事件は、六世紀頃に當りて支那文明及び佛教を採用せることにして、又日本の國語には全く適せざる象形文字を以て文書を書せることとなり。支那の影響、即ち其冷やかなる孔子の教は、日本人の性格を强固にするの効なく、佛教は婦人を蔑すること甚しく、前生に於て惡業深きものなりしと說けり。一千二百年より一千八百六十八年に至る間は二個の政府國に存在し、誠に混沌の姿を呈したり。不幸にして日本が外國を知り初めし時は、無政府の有樣なりしを以て、外人に對する長き不信を抱きたりしなり。所謂基督教の傳播なるものは、葡萄人が基督教と鐵砲を持ち來りしに始まるものにして、而かも鐵砲の勢力は甚だ强くして、彼等が歐洲人を知るに至りたるは此武器を利用して其勢力を增さんとする封建者の考より出でたるものにして、宗教の力は誠に微々たるものなりしなり。白人は千六百三十七年に追放せられ、夫れより八千百五十三年までは、實に停滯の時期なりき。今セント、ゼームスの政府に奉職中の林子爵が當時開國論を歡迎したる人の子なることは實に面白き事なりと信ず。

フオックスウエル教授は、日本人の性格の强固なることをいたく賞揚し、普通の行爲と雖も觀察者を驚かすに足るといへり。彼れ自らの經驗によるに、學生は如何なる問題にても難しとなさず、問題にして難ければ難き程、之を解決することを好むものゝ如く、國民は如何なる障礙あるも其爲さんと欲する所は爲すべきを斷言せり。

教授はよく日本の國民に就て知悉せる所を語ることなれば、聽衆は非常の喝采を以て其所說を聞けり。

海外雜纂

露西亞文學の明星

ドストイープスキー

「三月十九日」　「リテラリー、ダイゼスト誌」

フエオドル、ミカイロヴイツ、ドストイープスキーの書簡は、近來モスコーに於て出版せられたり。露國の批評家オシップ、ルーリエ此露國の神經質的社會小說家の性格を描寫し、此ダンテ的人物は露國文學の明星にして、後來の文學を支配するの權力を有することをいへり。又評家はドストイプスキーを目するに、癲癇的心理的社會稗史家なりとし、「罪と罰」の著者はニーチエの著作を促したるものとなせり。小說家自身の言を引用せんに

「予は文人界の貧民の一人なり。予は金錢の爲めに書せざる一小說をも有せず。僅かに一章を書けば直ちに印刷に附し、而して其後章は我が腦中に在り、翌朝に至りて再び書かるゝ等の事は屢ゝありし所なり。予が貧窮にして金錢に乏しかりしことは、大に予の心を塞き縊らし、又苦ましめたり。嗚呼若し予にして金錢を持ちたらば、予の未來は安全なりしならん」と。

此小說家の生涯に於ける大いなる悲劇は、彼のペトラセヴスキー事件に關係せるの故を以て、西比利亞に遠流せられしことにてありしなり。彼の打出は實に花々しくして、其處女作「貧民」は實に大いなる成功を奏せり。有名なる露國の批評家ビエリンスキーは此著作を讀みたる後、作者に書を寄せて曰く、「貴下は自ら爲したる事業の價値を了解なされたるか。此書は實に文學に誇らせる一新天啓なり。宜しく自重せらるべし、貴下ば實に大いなる文學者とならるべし」と。

彼の第二の小說「ツジー」は左程の成功はなかりしも第三の著作「白夜」中其從黨が發覺せしときに一層有名となれり。一千八百四十九年の四月セントペーターースバルクの警吏は、廿三人の革命黨の一群を勾留せり。而してドストイブスキーは實に其中にありしなり。其一人なるペトラセヴスキーは彼の有名なる事件の張本人にして、其所說勿論政府に危險なるものと見られたり。彼等は直ちに牢に引入れられ、又死刑に處せられたり。然れどもドストイブスキー及び他の一部は、皆西比利亞追放の宣告を受け、勞働に從事せざるべからざるに至れり。彼は常にペトラセヴスキーの政治上及び哲學上の意見を採らざりしことを主張せり。西比利亞の東部なる牢屋にありし間、彼は多くの手紙を其兄弟なるアンドレ氏に書きぬ、牢獄に於ける苦惱は終に彼の自由なる、哲學的、政治的見解を改めしめ、彼は露國の共和政を願はざるのみならず、且つ露國は一點の取得なき國にして、ピーター大帝以來最大惡國となれりと罵り、下よりは自我と殘酷の外何物も上り得るものにあらずとなせり。牢獄の生活は殆んど彼を狂せしめ次の如き言を發せしめたり。

精神上の苦艱は、吾人の受くる尤も恐ろしき肉體の難儀よりも一層惡し。修養ある人が常人と同一の刑罰を受けんか、其苦惱や蓋し後者に盛ること幾何なるや知るべからず。彼は其住宅を離れ、其習慣を止め、又吸ふも馴れざる低き場所の空氣を吸はざるべからず。彼は砂に投げられたる魚の如し。彼の刑罰は實に常人よりも一層惡しく一層慘らしきなりと。

四年の勞働と、五年の軍務に服したる後、ドストイヴスキーは其健康を回復し、其家族を維持せんか爲めに、セントペーターースバルグに歸らんことを皇帝アレキサンダー二世に嘆願せり。彼の財政及び身躰の境遇は實に痛ましきものにして、彼の記する所によれば「予は錢を得んが爲めに筆を執りて大に精神を損じたり。六ヶ月間、予の妻と予は最後の衣服の破るゝを見る程見すぼらしき境遇に陷れり。小なる子供は病床に臥し、妻は其發育物をも得ること能はざりき。……ツルゲネフ及びゴルチヤロフの如き富める人を見よ。予は彼等が予の著作する哀れなる有樣を見んことを望む」と

而してドストイヴスキーが一種の僻論を抱いて大に批難せらるゝに至りしは全く此時にあり。露人が決して他國の趣味を交へずして己れの國を保護せんとする樣は、恰かも士耳古人が其閨房を守るが如し、何れの國にても外人は敵なりとなす、露國は歐洲の文明が其政治上及び社會上の組織に効果を及ぼすべきことに就て毫も知る處なく、外國市場に對する露國産物の擴張を計り、又外國思想に對する露國の國民的思想を維持し、ピーター大帝及びカザリン二世が外國文明を輸入したることの惡しかり

しことを主張せんとするは、スラヴォニックの思想にして、而してドストイヴスキーは實に其長なりしなり。我等は結論として左の一節を引用せん。

「ドストイヴスイーは其主人公の心裡に就ては、驚くべき智識を有したり。彼は彼等の胸底に潜める感情を洞察し、其行爲に關する動機を透觀せり、彼はあらゆる人類、殊に惱に沈めるもの、貧民又は壓制せられし者に就て、深き惻隱の心を抱きたり。彼は耻に閉ぢられたる家の奧まで行き、不德と不幸の窟の底まで見たり。彼は吾人の德不德は多く境遇によつて定まるものなることを悟し、又罪と德の應報に就て驚くべき明確を以て描寫せり。彼は一步〳〵に讀者を運び去りて主人公の胸底深く探りて、人の眞情の如何なるものなるかを知らしむ。彼の頁は滿面やさしさを以て顫動しつゝあり。其やさしさは慈悲よりも一層深きものにして、眞に愛人の互に抱くが如き心より溢るゝやさしさなり。彼は又深き心理家にして、殆んと人心の內部を洞觀するの明を備へたるなり。兎に角彼は露國文界の一明星にして、其感化は長く後代に及ぶべきは疑を容れず。

吾人は終に飛行し得べきか

「三月十二日」　　「リテラリー、ダイゼスト紙」

學術雜誌の報ずる所によれば吾人をして飛ばしむべき飛行器は初めて世に現はれ、運轉の前後に喇叭の吹奏なくして遊行することを得るに至れり。そは千九百三年十二月、其製造者オルヴイル、ウイルブル、ライトによつて試みられ尤もよき結果を呈したり。而して其の槪畧は智識と科學と稱する新誌に於て記されたり。

ネーテユアは記して曰く

此等の兄弟が重力の下にあつて徐動する實驗に於て成功したる事は尤もよく知られたる事實なり、然れども今日はたゞ僅かに起動機の力によりて地面の上に身を擧ぐるといふに過ぎざるなり。始め四十呎の間、單線に沿うて走り、空中に上り、一時間二十五哩吹く所の嵐の力を借りて、一時間地面に關しては十哩、風に對しては三十五哩の速度を以て飛べりといふ。最後の實驗に於ては、器械が空氣に對して廿哩飛び地面に對しては八百五十二呎飛べり。吾人は幾多の先例の如く此成功も亦不幸なる偶然の事によりて中止せられざらんことを望むや切なり。

ライトの經驗は實に輕氣球によつて得られざる器械を以て飛行する問題を解決せる第一着步なり。彼はラングレー氏及び他人の失敗を以て器械を放船し、又運轉する人の實際的才能に缺乏するによるといへり。此れ一見不合理の如く見ゆべしと雖も先づ飛ばんことを企る前、久しく飛ぶことの經驗を持たざるべからず。ライト兄弟の成功したるは全く此事を實行したるが爲めなり。記者曰く

三年間彼等は徐行する處の器械を經驗なしたり、而して彼等が起動機を附したるは空中に於て其器械を自由に動轉し得るに至りて後にあり。如何にして此れを成就せしやは、彼等が其器械の組織、又は其動作の方法を未だ世に向て發表せざる前に當つていふを憚る所なり。

然れども今日に於て餘り多くの賞讃を彼等に向て呈するは却て宜しからず。器械の製作終りてより、彼等は自らの力によりて新たなる效果多き器械を附加するの裝置を考へ、數多の危險を犯して之れが用法を研究せり。彼等は市人の何人も其れに適せざるを悟つて、自ら起動機を計畫し、且つ製造せり。彼等は又暗輪機の形をなして、新奇にして優勝なるものたらしめたり。是れ全く彼等の手によつてなされ、少しも他人の力に借らざりしは、實に感ずべきの至りなりといふべし。

此人々は擢を前面に据ゑ附け、後尾に置くよりも大に其效果あることを

語り、又人躰を地平に並行して置くが如き裝置をなせり。一千九百年より四年の間は、毎年一の偶然の事なくして數千度徐行し、又時々一分時又は其れよりも多く空中に飄ふことにも成功せり。彼等は起動機を附し、暗輪機を備ふる迄には、此裝置に就て全く熟練の域に達したり。總てかくの如き發明に從事するものは、かくの如き處置を爲すにあらずんば到底成功をなすこと能はざるべし。餘りに急に成功を望み、一時に全機關を製造せんとするが如きは大失敗の基にして、此兄弟の如きはかゝる人に向て見習ふべき實に好模範を與へたるものといふべし。

トルストイ伯の扶助

四月廿八日萬朝報

露國文豪トルストイ伯は其の著書一千種を書店に托し、其の利益は悉く之を從軍者遺族扶助料に寄附することに決したりと

從軍者の遺族に扶助を給與するは事實に於て戰鬪者に對する後援也、從軍者は其の遺族の扶助せらるゝに於て心を安んじて死地に就くを得る也

トルストイ伯か斯る行爲に出てたるは、其の平生の主張に照らして聊か矛盾の嫌ひなきにあらざるも、實は議論の末節に拘々たらすして時の必要に應ぜる人間至情の發露也。トルストイ伯の大、之に依て一層を加ふるも決して減ずるごときことなかるべき也



雜錄

北歐自然派の戯曲論

（ストリンドベルヒ作悲劇「ゆり子」序）

上田敏

予夙に謂へらく、劇場は一般の藝術と等しく、刊行物或は作品を讀むこと能はざる人々にとりて、宛も貧者經、繪入聖書の如く、又戯曲の作家は一種の平人説敎家なりと。蓋し戯曲の作家は、其世の思想をよく通俗の形式に盛りて之を表現する者なるが故に、觀劇者の過半數を占むる凡流社會は、甚しく頭腦を痛むることと無くして、演ずる所の意を了解し得べければなり。

されば少年の輩、一知半解の徒、又は婦女子の如く、自ら欺き又は他に欺かれ所謂幻惑を起して、作家より暗示を受くる能力をなほ未だ失はざる者に對ひては、劇場は常に一の普通學校たりしなり。かるが故に、幼穉不完全なる人間の思想が、空想の力に依りて漸々發展し來り、反省、攷究、試驗の域に進まむとする觀ある今日に於ては、劇場も亦かの宗敎と等しく、瀕死の形式を棄てむとする途に上ぼりたれど、充分に樂み味はれむとするには、なほ未だ必須の準備を欠きたらむ如き感あり。わが此言の誤謬に非らざるは、現今全歐洲を風靡せる劇界一般の危機を見ても明らかなるべく、又現代の思想家を產出すること最も多しと聞ゆる文明諸國、即ち英獨等の地に於て、劇詩が、他の諸藝術と同じく、消滅に歸したる狀態に徵しても、亦自から推知し得可からむ。

　而して他の諸國に於ては舊樣の形式に新時代の內容を盛りて、新劇詩の成立を見たりと揚言するものありき。されど或は新思想發達の機未だ熟せずして、これが演劇を理會する力、公衆に存せず、或は黨爭の弊、徒らに騷擾を攪起するのみにして、內に顧みれば心未だ得ざる所あるが如く感じ、外に察すれば、贊非褒貶の聲、力を逞うして、劇場の許るす限り、勢を張るを知り、終に純然たる客觀の享樂を容るゝ能はず、或は新內容を盛るべき新形式の發見せられざるために、新酒を注ぎて、古瓶を破りたる古の譬喩を想起せしむるのみ。

　此劇詩(『ゆり子』)に於て予は新らしき物を造りしにあらず――これ不可能の事に屬すればなり。――唯、現代の新人が此藝術に求めて可なりと予の信ずる條件に從つて、形式のみを近世化せむと試みたるに過ぎず此目的を貫かむ爲めに予は一の詩材を撰擇したり、否寧ろ之に動されたり。而も人或は此詩材の、世と遠ざかりて、今日黨爭の問題外に立つを咎めむ。蓋し盛衰高卑、善惡、男女の問題は實に永久不變の興味を有すべきものなればなり。旣往已に然り、豈ひとり當來のみ然らざらむや。

　嘗て人の此詩材を語るを聞きて、深く心に銘記せしは旣に數年の昔なれど、今なほ其悲愁を覺ゆるがまゝ以て悲劇の材となしぬ。それ多幸の境遇に在りし個人が一朝悲境に沈淪するを見ても、なほ既に忍び難き思あるに、況や一階級の倒るゝを見るをや。されど後來吾人の心情更に進步して知性明らかなるに至らば、今

の粗笨冷刻なる人生の活演劇を見るも何等の悲愁を感ずることなく全く平然たるを得可き時或は來るならむ。その時は即ち感情と名つくる劣等にして信を措き難きかの思想機械が、判斷力の發達を遂ぐると共に、忽ち無用の長物と變じ、且又有害のものとなるが故に之を放棄せざるべからざるに至りしなり。而して予が戯曲中の女主人公がなほ人の哀憐を惹き得る所以のものは實に人間の弱きが爲めにして、同一の悲運或は吾人に降下することなきかとの恐怖の念、未だ感情の見地よりして抑壓すること能はざるが爲めなり。若し同情の念殊に甚しき觀客あらば或は單に此哀憐の情を以て滿足せざる可く、又當來の人間は恐らく、更に進て此禍を除去す可き積極手段即ち一種の計畫を要求するなる可し。されど世に絶對の禍は無し、一階級の沒落は他の階級の福となりて、之に勃興の餘地を與ふ。一盛一衰の交替は人生の一大快樂にして、幸福は實に比較に存せり。故に予は彼の荐に計畫を要求する人々に問はむと欲す、誰か鷙鳥の鴿を食らひ、また亟の鷙鳥を害するを救はむとするものぞと。人生はしかく杓子定規のものにあらで大は必らずしも小を食はず、却て螻蟻の獅子を殺し、或は少くとも之を狂せしむるを見るなり。

予が悲劇が諸人に悲愁の感を與ふるは、これ全く諸人自らの罪なり。もし吾人にしてかの佛蘭西大革命時代の人士の如く强健ならむには、朽ちたる遊苑の老樹久しく他の障礙たりしもの丶根扱にせらる丶を見て、必らず喜悅の感を得るならむ。そは他の樹木と雖、生長の齡を有する權利に於て、かの老樹と異なる所なければなり。此喜悅の感は恰も不治の病者が、終に死することを得るを見て、心落居ると同じ感なり。

近者わが悲劇『父親』に對して非議を加ふる者あり、難じて曰くこれ悲慘に過ぐと。嗤ふべきかな其言や、これ宛も愉快なる悲劇を要求するに似たらずや。世人は囂しく生存の快樂を呼はり、劇場の主事は頻に道化芝居を求む。然らば生存の快樂とは徒に愚者となりて舞踏病者、白痴の徒を描出するに在るか。あらず、予は謂へらく、生存の快樂とは人生の强健悽愴なる奮闘に在りと。一事を閱歷し、一事を修得するは、人間の喜悅なり。かるが故に予は異常なれど敎訓多き一事件即ち異例外なれど却て法則を益鞏固ならしむる一大異例換言すれば平凡を愛する人々の感情を傷くる如き事件を殊更に詩材として擬擇したるなり。加之、一二の

人の反對を釀すべきは、此事件の源因、單純ならず、これが見地の唯一ならざる事なりとす。それ、人生の事は多少心理に深く潛みたる幾多の源因より湧出するものなり（予は之を新發見なりと誇稱す。）されど觀劇の人士は大概己が判斷力に訴へて最も了解し易き一源因、若しくは己が見識を最も高からしむる一理由を選ばむとするなり。例へば茲に一自殺者ありとなさむか、市人曰く商業の失敗なり、女子は曰く失戀なり、病者曰くこれ病苦のためか、破船の客曰く、突望の外づれたればなりと。奚ぞ知らむ、眞の源因は此等の何れをも兼ね、あるは何れにもあらざるを。死者は全く其本心を隱蔽して、歿後の名譽に最も利ある外見を粧ひたらむも圖られざるなり。

（未完）

文學上の櫻花（下）

畔柳都太郎　口述

「淵青し石に抱きつく山櫻、几董」の本體かとも想像される王安石の櫻桃花の詩「山櫻抱石蔭松枝、比並餘花開最遲、頼有春風嫌寂寞、吹香渡水報人知」を擧げて「觀此則中國亦非無櫻」と評したる文句は確に間違ひはない、これは前に述べたことゝて了解されると思ふ、しかし日本に賞美するサクラはないので、現に宋の景濂の詩でも分かる、「賞櫻日本盛於唐、如被牡丹兼海棠、恐是趙昌所難畫、春風纔起雪吹香」支那の櫻桃といふのは即ちミザクラと稱すべきもので花瓣の色がヤマザクラよりも濃いくて花梗がよく／＼短かくて、其果實は食ふことが出來るのみならず、支那の史實も詩も櫻桃の實を食ふことを中心として居て花を賞することが却つて少いやうです、櫻桃は含桃とも鶯桃とも朱櫻とも紫櫻とも櫻珠とも言ふて居る、何故に櫻桃と稱するかに就きては、李時珍は「其顆如櫻珠故謂之櫻而許愼作鶯桃云鶯所含食故」と謂ふて居ます、朱櫻といふのは蘇頌の言に從へば「實熟時深紅色者」紫櫻といふのは「紫色皮裏有細黃點者」櫻珠といふのは「小而紅者」です、尤も私自身も未だ明瞭ならざるところがあるので、ユスラウメ即ち山櫻桃と櫻桃とは支那で如何程の相違があるか、此點が今以て不明瞭であるのです、更に詳言すれば植物學で支那の櫻桃だといふてデスクライブしてくれるものと李時珍などの櫻桃だといふてデスクライブするものと相違があるやうに思はれ、從つてまた漢詩に顯はれておるものと相違があるやうに思はれるので、後者は何とやら山櫻桃の趣きがあることとです、即ち花

暦には「正月櫻桃始葩」としてあり綱目に「櫻桃樹不甚高春初開白花繁英如雪葉團有尖及細齒結子一枝數十顆三月熟時須守護否則鳥食無遺也」の文句があるからです、なほ専門家に教を乞ふ心算でありますが、いづれにせよ花よりも寧ろ實を賞するといふことと丈は同じことです、實を賞することは實に禮記にありまして「仲夏之月農乃登黍天子乃以雛嘗黍羞以含桃先薦寢廟」これ實に「此果先成」て百果に先ちて熟するが爲めに古人が多く之を貴だのであります、漢書叔孫通傳「惠帝嘗出遊離宮通日古者有春嘗果方今櫻桃熟可獻願陛下出因取櫻桃獻宗廟上許之諸果獻由此興」とあります、東觀漢記「明帝月夜宴羣臣於照園大官進櫻桃以赤瑛爲盤賜羣臣月下視之盤與桃一色羣臣皆笑云是空盤」實に一塲のコメヂーといふべきものですが朝庭て貴ばれたことがイクラカ分るやうです、況んや翰林集詩注に「毎歳初進櫻桃先宜賜學士」でありますから摭言の「唐時新進士尤重櫻桃宴」も理解されます、零陵總記には「李直方第諸果以櫻桃爲第三」とあり花經には「四品六命櫻桃」とあります、從つて文學上の地位も凡そ想像されるでありましやう。

梁の宣帝の櫻桃賦の冒頭に「惟櫻桃之爲樹先百果而含榮既離離而春就乍苒苒而冬迎」云々とあり、唐の張莒の紫宸殿前櫻桃樹賦のうちに「玩芳誠百花之首充薦乃衆果之先」の文字があります、要するに實のことが主となつて居ます、李杜兩詩聖の集を披いてもそうです、即ち李白の白櫻桃と題するものは「江羅袖裏分明見白玉盤中看却無疑是老僧休念誦腕前推下水晶珠」杜甫の野人送櫻桃と題するものは「西蜀櫻桃也自紅野人相贈滿筠籠數迴細寫愁仍破萬顆勻圓訝許同憶昨賜霑門下省退朝擎出大明宮金盤玉筯無消息此日嘗新任轉蓬」としてあります、梅堯臣の朱櫻の第五六句に「味兼羊酪美食厭楚梅酸」とありますし、白居易は更に此果の位づけをやつて居ます、即ち與沈楊二舍人閣老同食敕賜櫻桃翫物感恩因成十四韻の第十三句より「李俗難爲對桃頑詎可偏肉嫌盧橘厚皮笑荔枝皺瓌液酸甜足金丸大小勻」と書いて居ります、王叔承の荊溪遊櫻桃園の第四句にも「甘勝荔子漿」とあります、然し決して果のみに終りませんで、花も葉も賞して居りまして、中には日本の觀櫻の趣きがあるものもあります、葉の方は私は白居易の樟亭雙櫻樹の第三四句「素華朱實今雖盡碧葉風來別有情」より外に見ませんが、花の方は可なり多くありまして例せば劉禹錫の和樂天讌李周中丞宅賞櫻花の第一二句「櫻桃千萬枝照曜如雪天」溫庭筠の二月十五日櫻桃盛開の第一二句「曉覺籠煙重春深染雪輕」于若瀛の櫻桃花の第一二句「三月雨聲細櫻花疑杏花」などですが、李紳の作の何とやら日本的な北樓櫻桃花を擧げまして支

那を終ることに致しましよう「開花占得春光早雪綴雲裝萬蕚輕暖靄折時初照日落英頻趁作閒窓錦弱若無力帶月愁疑似有情多事東風入閨閣散亂芳思委紅城」

支那から南又西に進めばビルマ地方ヒマラヤ地方に擴がつて居るプツムといふ酷だサクラに似たるものがありますが、此地方の文學的研究は未だ私の力の及ばないところでありますから猶ほ西に進むで行きますと、ペルシャ語のKerasと名けられる果が羅甸語のケラススCerasusを生じたかの疑ひがあつて、從つて其名を帶びてゐるCerasusの市即ちClerasondよりLucullusが以太利亞に移植したの傳說あるセイヨウミザクラは斯の如くして歐洲に及び、羅馬人の征服と共に英吉利に入りたりとは、プリニイの言ふところて證據を擧げられます、しかし野生のものは亞細亞と同じく歐羅巴にもあつたのらしい、野生のものを改良し培養したのが西漸したのです、抑も佛蘭語でセリシエー、メリシエー獨逸語でフォーゲルキルシェといふ所謂西洋の櫻は日本の櫻とは異なつて花が白く葉が大きく果實を賞翫するのが主でありります、然し野生の方についても少し詳しく言ひますと、少許の吸枝を生ずる木本てありまして葉は垂れて廣橢圓形若くは倒卵狀廣橢圓形、花瓣は短縮したコップ形に擴がつて、春季に森や垣に花を咲きます、木の高さは數々一丈五尺程より二丈四五尺程の間に達し時には夫よりも餘程高くなります、枝々は擴がつて一の圓頭形になり花は若葉が現はれると間もなく咲きまして直徑四分三インチ位の白花で、三から五の花梗は長さ一インチ二分一より二インチ位のものがあつて垂下し、花瓣は多少深く裂目あつてそれで、實に早落するです、果實は長さ八分五インチ位の紅若しくは黑の食へないやつて葉の色は立派な綠色です、傳說に依れば英吉利の初めての櫻畝はケントに出來たのであつて今日猶ほ其美しい櫻て有名でありま す、千四百十五年に書物を書いたリドゲートは旣に櫻の實を市場で賣つて居ることを述べてをりますし、千五百九十七年に「ハーバル」を出版したるヂェラードは其時代に數多の變種あることを知らせてをります、佛蘭西では櫻實が甘いといふのみでなく貧者の食物となるからといふ理因で非常に貴ばれて居るので、現に此果て作つた汁にパンとバタを少しばかり入れたものを冬季林間に居る木樵が常食として居た時代もあります、大陸では或は櫻酒があり或は櫻菓子がありまして仲々盛に使用しますが、英吉利でもまた食卓に上ぼすに櫻

ブランデーもあり生菓もあるてす、就中尤も有名なるは所謂「チェリー、パイ」てす

"If you will but be mine,
You shall dine on Cherry pie, and drink nice currant wine."

全體小供等の間には櫻樹は仲々愛されてをりまして、理因は不明てすが此樹には必ず聯合して Cuckoo 鳥が出て來て日本の梅に鶯の感があるのてす、尚ほ此鳥のことに就きましては他日「文學上の鳥」と題してお話する時期があらうと信じて居ます、小供等は次の歌を唱ひながら櫻樹を廻つて舞踏するのてす。—

"Cuckoo Cherry-tree,
Come down and tell to me
How many years I have to live,"

夫れから小供は一人〳〵樹を搖つて櫻實を落してみて其落ちた數て右の歌の文句の返事を得るのてす、可愛らしく詩的な所があるてはありませんか、これは今日猶ほ片田舍てはやるそうてすが、別にまた昔行はれた遊戲があります、それは櫻の實の種子を小さな穴に投込むことてありまして、現にシェークスピーアの作の "Twelfth Night" に一寸出ています—

Sir Toby Belch: "'Tis not for gravity to play at cherry-pit with Satan."

これは私の故郷て小供等の間に流行しまする銀杏の種子の遊戲を聯想させます、私は斯かる種類のことを集めてみたひ考はありますのてすが未だに手を着けないて居ます、それから櫻の木の話しや、また漢詩と反照する櫻實に離せない蟲鳥の話しや、また英のケムブリッヂ獨のハムブルヒに於ける「櫻遊び」のことやなどお話しをしたいこともありますが、文學上主要の植物は西洋に於ては櫻花よりも寧ろ櫻草に存するが爲めに私は一切此等のことを省畧しまして直ちに櫻草に向つて突進したく思ひますが、何とやら前回よりも長いような氣がして酷く疲れましたから次回にお話しすることに致します、但し彼地に於きましても櫻花の白く豐かな、實の赤い美麗な、生長の熾んな所は人々の注意を惹いて詩人や歌人の愛する所となつて數多の詩歌があるのみならず、實に古歌一篇「熟れる櫻」は汎く人口に膾炙してをりましてハーリックが之をかりて自分の理屈をつけてをりますから其詩一篇と、及び同じ作者が花の散ることを一寸歌ふて居りますから其詩一篇とを擧げて櫻を見送ることに致します、二篇の詩は言ふまでもなく Hesperides のうちから取りました—

Cherry, ripe,

Cherry, ripe, ripe, ripe, I cry,
Full and fair ones, come and buy;
If so be you ask me where
They do grow? I answer, there,
Where my Julia's lips do smile
There's the land or cherry isle,
Whose plantations fully show
All the year where cherry grow.

To Cherry Blossoms.

Ye may simpler, blush, and smile,
And perfume the air a while;
But, sweet things, ye must be gone;
Fruit, ye know, is coming on:
Then, ah! then where is your grace,
When as cherries come in place?

（社員筆記）

ヴィクトル、ユーゴーの繪畫

白鳥生

十九世紀の詩人中最も社會を動かせし二大詩人ゲーテとユーゴーとは共に繪畫について非常の趣味を有したりき。而して彼等は啻に古今諸名家の作品を愛玩するのみならず、又自から彩筆を弄して、生中の専門家をも凌ぐの製作をなしたり。ゲーテは其の「對話篇」によりても知らるゝ如く、折々は殆んど詩歌を棄てゝ全く丹青に從事せんとせしことあり、青年の時代伊太利旅行時代に書きしもの甚だ多く、其の繪畫や彼れの詩歌と同じく氣品高く餘韻紙幅に溢るといふ。

ユーゴーの繪畫は此迄左程世に知られず、博物館などにて二三を見るに過ぎざりしが、近時詩人モーリス氏等數人の熱心なる蒐集によりて幾多未知の作品を捜し出し、巴里に於てユーゴー博物館を設立するに至りたれば、吾人はこれによりてかの大詩人の美術的天才をも窺ふを得べしと。

彼れの繪畫を研究すれば、自からこれを二大別すべきを知る。この二種は執筆の際に當りて用意全く相異なるなり。一は自然によりて刺激せられたる者にて、想像力も劇的興味も加はれど、比較的現實に忠なり一は又全然自己の頭腦より湧出したる者、例へば東洋の夢幻境の圖の如き者なり。ユーゴーの美術上の作品はこの二種の一に屬せずんば必ず他に屬す。

誰れも知れる如く、ユーゴーは各地に旅行したり。其の佛國内地、ライン地方、白耳義、ピレニース山などを跋渉せし記行文は詳細なるが、彼れは風物を敍し感想を記しつゝある傍、又殊に己れを喜ばせし景色を寫生したり。かくしてライン河畔を逍遙せし際には其地方の有名なる舊都古城跡は悉く描寫し、吾人をしてそゞろに詩人と美術家との合體を感ぜしむ。一千八百三十八年八月二十三日コローンよりラインを溯りてバチャラッチに達せし際二幅の風景畵を物したり。自から記して曰はく「バチャラッチは予が見たる中最も古き人類の住所なり」と。彼れはこの地にてレンブラントの繪畵にもありげなる部落に宿し、非常に興味を感じて細密に寫生して傑作をなしたり。尙この町にて畫きたる一幅は「ビザンチン敎會堂あり、後に赤煉化を疊上げたる十五世紀頃の會堂高く聳ゆ、半は壞れかゝりて、戸もなく窓匡（マドワク）もなく玻璃（ガラス）もなく、・・・さながら偉大なる骸骨の空中に現はれたるが如き」圖なり。こはユーゴーの詩心に觸れし景なるが、これにも勝りて彼れを感動せしめしは、都邑の山川にて、下には河水昔ながらに波立ち、上には巉巖屹立して鷙鳥其の蔭に巣ひ、古城墟には草木繁茂して行人をして今昔の感に堪へざらしむ。彼れはこの光景に接して死と生、老年と青年との對照を味ひ、幾多の畫圖を作りたり。これ等皆淺薄なる寫生にあらずして想像力にて一層美化したればこれに對すればライン河畔の傳奇的風色活動し、古來歷史上の連想腦裡に湧出し、深奧なる人世の面影浮動し來る。

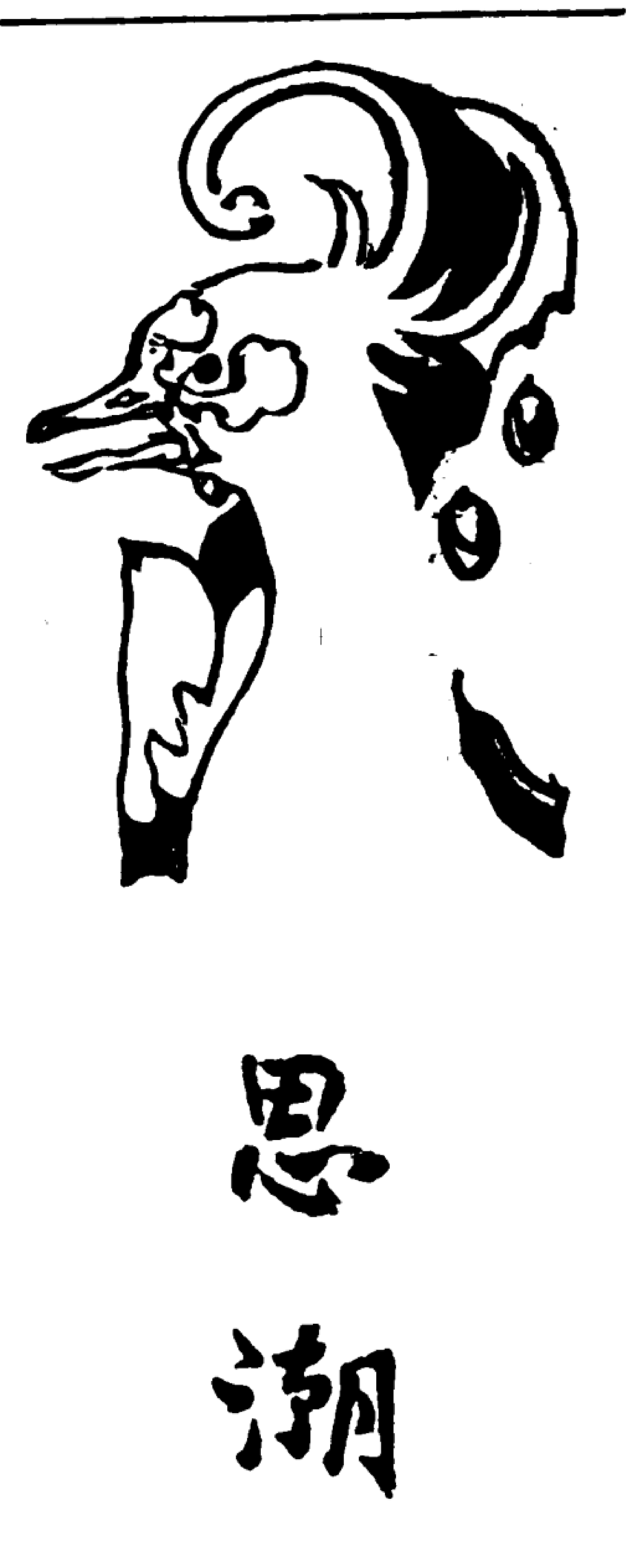
畫家としてのユーゴーは詩人としての、ユーゴーと同じ。されば彼れは詩歌小說に於いて歷史上の人物または空想裡の人物を材料とする如く、繪畫に於いても折々は全く現實を棄てゝ純ら想像の馳せるに任すことあり。「バント村落」「ノートルダム」など彼れの小說に於ける如く詩趣横溢し、殊に東洋の荒唐無稽の物語を畫題としたる者は想像の豐富計かり難たき思ひあり。ユーゴーはかく意味深遠なる畫圖を造るに當りても繪具は極めて單純にて、嘗て友人に書を送つて曰はく「予は白墨と烏賊の墨汁と木炭と煤其他の異樣の者を混じて繪きたり、これ等の材料にて最もよく我眼に觸るゝ者又我心に浮ぶ者を現出し得」と。彼れは又臙脂をも點ずることありき。時としては偶然に生じたる一點―インキ壺の覆つて紙面を塗りしことなど―を基礎として畫き始むることもあり。サイモン氏評していはく

「彼れは其の折手に觸れし者を繪筆として繪く。尖端の開けるペンにても、鷲鳥の羽にも、鉛筆の小片にても、小刀にてもよし。否指にても可なるべし」と。かかる單純の具によりて强健の作を爲し、又細微の描寫をもなし得たるは驚くべきこと也。

過去の產物は過去の產物として見るべし。美術も退即すべき者ならず。されど美術家が純乎たる寫實に飽き新しき描寫を求むる今日、ユーゴーの繪畫は他の異なれる方面についてヒントを與ふる者なるべし。彼れは自然の景色をも想像力にて動かし得る點を示すに於て甚だ有力なる功果を奏したり。これ彼れが詩人的頭腦を以て丹青に從事したるに由る。

ヘンリー、フランツの說に由る





愛國心

「日本人」

愛國心は事と理とより觀ることを得。人は其の父母兄弟を愛する如く、皆な必ず多少國を愛する心あり、無事の日、自國を恨み往々騷亂を敢てせざるに非ざるも、一旦外邦と釁端を啓くに及び、一意其の國の爲めにせんことを期し、謂ゆる兄弟牆に鬩ぐも外其の侮を禦ぐは、常に見るの實況たり。但だ時として精神の病的なるあり、敢て父母を窘めて平然たると同じく、毫も其の國を念ふことなく、依然として事を亂さんとする無からず、是れ確かに一種の狂なり。將た又た列國互に分立して各自國の爲めに盡くすは是れ相互の競爭の即ち人類の進步を遂げしは、實に列國各〻自國を本位として競爭したるに因る、支那は土地人口此よりも大且つ衆しと雖も、國を別ちて競爭すること少く、爲めに百年千年進步の極めて遲々たるを免れず。故を以て愛國心は人類の進步に缺くべからずとするも、而も世界の情勢更らに一轉進し、國と國との關係益〻密接するに至らば、個々相互の競爭は隨ひて著しき變更を呈すべく、均しく愛國心といふも、其の發現する狀態自ら相ひ異なるあらん。

* * * * *

社會主義者の話を聞くと人間に對して中々熱情が見えるやうであるが、國家と云ふことになると其の情が誠に冷淡のやうに思はれる、何故なれば、若し國家が吾人を壓制し、自由を害するやうの事があり、生活の不便を與へんか、世界は廣し、何れの所にも綽々として餘裕あるから、區々一國内に止まる必要はない、故に世界に出てゝ差支のないやうに學藝も世界的に修めおかればならぬ、帝國主義の如き其見る所が誠に小さい、人は宜く世界的ならざるべからずと云ふのである。サー斯うなつてくると愛國心などゝいふものは要がなくなる、社會主義の實行さるゝ、何百千年の後はイザ知らず、吾人がまだ國家といふ一局部に生存し、一國家の世話になり居る間は、どうしても國家を思ふの情が厚からればならぬ隨つて愛國心なるものが必要と思はれる、一身を托する國家の事を思はぬときは、國家全躰の幸福も社會一般の利便も計るには及ばぬ次第となる、吾人の苦樂運命は、國家を離るゝことは出來ない、吾人は中天に懸りて生存するものでないから、今の世に於て、社會主義者が餘り廣く世界的となり、吾人が屬する國家と云ふ觀念をなくなすに於ては、終に彼等が唱ふる社會改良なるものも、無意義になりはしまいか、何故なれば我說行はざれば忽ち一國を去り、一國を去り、主義の實行に至らず、其の感化を衆人に及ぼす能はすして已みなんか、彼等が國家を輕ろんずるが如きは、主義實現の道程中、少しホコトンの次第てはあるまいか、余は社會主義者が見る愛國心に對して大に疑ひなき能はずである。

大隈伯の演說

（開國五十年紀念會に於ける）

日本は開闢以來常に開國の國是を持し居れる殆んど世界に比類なき開國主義を持し大に門戶を開放してあらゆる人種、あらゆる民族を抱容して之を自己の民族に同化する感化力を有せり見よ印度の宗教を輸入し此教化を以て世を導き民を教へて以て毫も支障困難を感ぜざりし然るに何が故に一度鎖國の時代を見るに至りたるか世界の大勢已むを得ずして之に出でたるなり即ち曾て異教の我邦に渡來して以來漸次に無識の傳道師渡來し以て宗教と政治とを結び付け無識野心の徒之に附加して何物か企圖せんとせるより遂に宗教を恐るゝもの蔟出し來れるなり現に歐洲に於ても同教徒の間に於て三十年戰爭を惹起すあり西班牙の如さ宗教と政治を混同したる邦家が諸に無殘の最後を示すに至り我が邦の政治家が之を恐れて鎖國を敢てしにるも決して無理なる事にあらずと信ず彼の不世出の英雄德川家康か宗教を禁じ同時に鎖國を爲してより二百十六年此間實に世界に稀なる平和を見以て文學、學藝を奬勵し武士道此間に養はれ國民敦厚の風此間に長じたるもの實に鎖國に伴ふ太平の賜なりし、ペルリは此際日本に渡來し以て條約を締結せんと試みたるが此鎖國の時代に於て日本は西洋の事情を全然忘却したりやと云ふに決して然らず德川家康は長崎の一港を開きて以て貿易交通の途を開き居りしより醫術、本草等の學術は頗る見るべきものありペルリの渡來したる際には開國の準備は充分熟し居りしなり而して米國に於てもカリフオルニヤを領有してより我邦と一衣帶水の間となり黑潮の關係に因り日本の漂船船は屢〻米國の沿岸に流着し彼我の事情は間接ながらも既に業に諒解し居り只機會の到るを待つのみなりしが如し

ペルリが使命を帶びて渡來したるに付ては余は先づ其人格を研究するの必要ありと信ず氏は久しく日本の事情を研究し居りメキシコの戰爭に從ひて最も勇悍にして智略に富み兼て意志の鞏固なるものありしと果せる哉斯くてこそ能く我が因襲の久して階級制度の下に適法の條約を結びて以て我が國運發展の素質を作りたるなれ

當時の神奈川條約、下田條約、江戸條約今日に於て之を評すれば頗る議すべきものありと雖鎖國の時代に於て能く我が執政者を誘導したる其勇氣と厚意とは決して忘るゝ可らざるものあるなり殊に千八百五十九年我が國の執政者を導きて米大陸の遊覽を求め次て維新の際功勞ありたる岩倉、木戸の諸老其他現に生存し居れる伊藤侯抔の使節となりて渡米するやワシントン政府の之に對する好意は延て後來の事々物々に好き影響を與へて我が國運の進化に力ありたること數ふ可らず余は又多少余の關係したる所なるを以て終世復に忘るゝ能はざるの一事は我が明治政府三十五年間の外交は合衆國政府の日本に對して與へたる好意の發現の結果なりと斷言して憚らざる所なり見よ近くは明治二十七八年の日清戰役に於けるが如き將た又今回千載無前の日露戰爭に際しての如き其友誼や交情や五十年來終始一貫して以て今日に及べり豈に啻に友誼的關係なるのみならず商業通商的關係なるのみならず商業通商的關係に於ても我が國の蒙りつゝある利便測る可らざるなり

夫れ商業は平和に伴ふ東洋貿易の點よりしても支那の門戸開放は世界の輿論なるにあらずや然るに世界に於て列强の一と稱する露西亞は何が故に之を拒み平和を尊重せざるの狀態にあるや是れ實に世界の輿論に反するものならずや世界共同の利益を無視するものにあらずや我が邦は多年の友誼國に對する謝恩の意を以てするも將た世界の平和を希圖する點よりするや今も世界共同の利益に代りて遂に劍を拔て起たざる可らざるに至りしなり

ペルリと相前後して始めて我邦に渡來せし露國使節の人物に就ては余は未だ研究する所なきも當時ペルリが協同の態度を拒みて我が國に與へたる友誼の關係より延て今日の狀態を考ふれば實に一種の感に堪へざるものあるなり今日の事態に際して余は紀念すべき當時の追懷を感謝し併せて兩國の將來に於ける前途を記せんと欲するなり(時事新報)

○島田三郎氏演說

(開國五十年紀念會に於ける)

次て千八百六十年米國公使が我邦の執政に對して其渡航を促したるの一事は吾人が忘れんと欲して忘るゝ能はざる多大の利益と功績とを國家の上に寄與したりと稱せざる可からず而して又此一事に徵して如何に我當時の國民が世界の大勢を知らんと欲するの觀念熾んなりしかを察するに足る可きを知るなるべし當時友邦の勸說を容れ渡航の大任を負ふたるを勝安房とし又當時の社會組織の結果階級制度の惡弊に壓せられて其列に加はるを得ず殆んど身を從者の位置た下して木村攝津守の配下に屬し以て其志望を貫かんと企てたる偉人あり福澤諭吉是れなり

彼三宅東洋なる人の手錄に因るに此一行が如何に米國に迎へられたるかの厚きを知るに足るもの多くあり此一行は啻に米國の厚意を待遇の上に於て受けしのみならず文明國の新空氣に浴したる一行の感化は直ちに國家の大局に及ぼし就中勝、福澤此聰明なる二大人の行爲は維新の際に於て國家を支持するの偉力を表明したり即ち平和を尙ぶ米國の氣風を感受したる勝安房は其所轄を國家紛亂の間に遂行し人道を重んじ自由を好愛する福澤諭吉は戰鬪紛爭の裡にありて靜座講學以て教育の大本を築けり今や此二大人去つて故人となりしと雖も其主義理想は實に國家の主張とし理想とする所なり(時事新報)

科學的發明の功勳

(國民新聞)

身陣頭に立ち、砲火を冒して勇戰健鬪する將士は、其の功勳の花々しく、

目醒しきが爲に、國民の賞讃と感謝とを博すと雖も。苦心慘憺の後に成りたる科學上の發明に至りては、發明家の苦心は、一般の識認する所とならず、其の功勞は、往々にして看過せらるゝを無きに非らず。是れ決して、公平を得たるものに非らず。

我が海軍の有効力は、今回の戰爭によりて、最も適切に證明せられたりき。而して。海軍部内に於る、幾多の科學的發明が、我が海軍の有効力を增進するに於て寄與する所尠からざりしを見るは、吾人の最も喜ぶ所なり。我が國民は、奮戰力鬪せし勇士の功勞と與に、此等發明家の勳績に對して感謝の意を表せざる可らず。此等の科學的發明たる、其の成るや成るの日に成りたるに非らず。多年の日子と、考慮とか費し、幾多の研究と、苦心とを重れたりし結果にして、決して盜賊を捕へて、繩を綯ふが如き間に合せに非らず。是れ誠に我が海軍が、無事の日に於て力を教育に用ゐ、無事の日に研究し、無事の日に訓練し、無事の日に成りたる發明が、國家有事の日に於て、實地に試みられ、有事の日に方りて、其の實功を擧げたるものなり。

夫れ戰に臨みて、勝を制せむとするや、死を恐れざるの勇氣を要し、職分の爲には其生命を犧牲として惜まざる義務心を要し、更に一指一髮をも忽にせざる科學的知識を要す。而して、我が海軍軍人に至りては、我國固有の勇氣を有し、燃ゆるが如き愛國心を有し、且最新の科學的知識を有す。此の當る可らざる勇氣と、義務心とを持して。精鋭猛烈なる武器を操縱し、三者抱一其の宜しきを制す。所謂是れ鬼に金棒にして、艦ふ所敵なし、其の敵艦に對して、大勝を制したる決して其の故なしとせず。

其他無線電信の如き、之を發明したるものは、我が國に非らずと雖も、實戰に於て、之を應用したるものは、我國にして、第七ー八次旅順攻擊に於て、之が使用により、作戰上便宜を得たることは、東鄕司令長官の報告に徵するも明なり。吾人は、我が海軍に於て、如何に無線電信を利用し、如何なる功果を奏したるかを知らずと雖も、其の効用は一般の豫想にに比して、更に大なるものあるべきを信ぜずむば非らず。

斯の如くにして、我が海軍は、我國の發明を、實戰に應用すると與に、亦た最近の科學的知識を我に收め、之を研究し、之を實驗し、其の効力を實戰上に發揮しつゝあり。是れ我が海軍が益精鋭を加ふる所以たらずんば非らず。然りと雖も、戰場に於る功勳は賞揚せられて、平時に於ける發明家の功勞は閑却せらる。是れ發明家の苦心に酬ゆる所以に非らず。吾人は、此等發明家の功績を特筆大書して、我が國民と共に永く其の功勳を記憶し且つ感謝し、更らに將來に向ても、愈よ其の研究的精神を發揮せんことを、奬望せずんばあらず。

體育と體格

「體育」

リヰョル博士稿
前田長太氏譯

彼等も亦光明を追求する道を有す、彼の競技、競走、競漕等の際に於ける、誰か其の力量勇氣を發揮して以て覽者の拍手喝采を招かんと欲せざる者あらむ　、斯道の競爭塲裡に於ても亦勝者に報あり、賞あること毫も知識界の戰勝者に於けるに異らず、後日壯年に達したる時、體格軀幹の美大なるは言ふも愚か、斯くして獲得したる力量は人生の行路難に際して寄貢する所實に鮮少ならざるべし、此の意味に於て、人物となるが爲に、體育豈之を忽諸に附すべけむや。

然りと雖是が爲には他に亦合力を仰がざるべからず、此の如き條件に於ては體軀のみ獨り自ら發達するものにあらず、倘之には努力を要す、耐

忍を要す、意志の强力を要す、是を以て體育の効果なるものは啻に身體に止まるものにあらず、延て意志にまで及ぶものなり、否、體育の良好なる結果は意志の强健に在りと言ふも可なり、所謂人格なるものは是に由りて養成せられ、後日體力衰ふるに至ると雖、意力は依然留存するが故に、强健なる人格を一毫も損益せざるものゝ如し、天下に人生分を完滿に竭さんが爲には、强健なる意志は美大なる體格より尙一層大切なりとす、此の意味に於て、體育と德育（意育）とは、二者相待ち相扶けて須臾も相離るべからざるものなり。

體美外觀は人物の眞價を實際に於て輕重せずと云ふと雖、人の見倣に於ては確に輕重せられ居るものなり、體美外觀の缺如する者は、世人往往之を尊重せざるを見れば、人物の價値は是が爲に其幾分を失へりと云ふも可なり、此點に就て現今識者の間に時々左の如き問題起りたり、日く工匠田人の子が全く紳士となるまでには、幾代を要するやと、蓋し之が定數を揭ぐることは難かるべし、何となれば紳士となるが爲には、先づ第一學識と美感とを具備せざるべからず、是れ確に主因なり、然れども亦是のみを以て足れりとすべからず、論より證據、請ふ試に街頭を步する今日の青年學生を視よ、其の行步、其態度果して如何？余は固より青年の惡罵者にはあらず、青年は將來なり、須らく萬方を以て之を獎勵せざるべからず、然れども彼等にして、少なく彼等の或者にして今日の如き體軀上の習癖を永く保持するものと假定せよ、恐らくは此の好箇の青年、其の學識才能の力によりて、異日國家緊要の位置に立つに至らむ、蓋し亦是れ其の目的なればなり、其が野心なればなり、然れども余は斷ず、彼　如何に有爲の學才を懷て、要路に立つと雖、其外美に於て確に何等かを缺乏せざることを。

此の理由と此の方面に於て、國家の榮譽と利福は、今日の青年子弟に相當の體育を受けしむるを要求しつゝあるなり。

戦争と教育

「教育學術界」　　加藤弘之氏

それとモウ一つは、武士的の理想か今日未だ全く泯びない。今日の老人を除くの外はモウ武士的の世界を知らぬ人である、四十歲以下位では封建時代にはまだ幼い小供であつて、それより下はまだ生れない位であるから、固より老人ばかりが昔の武士的に養はれたものであるけれども、併しまだ武士的の思想といふものは餘程受けついで居る。平民といふ者は封建時代でも武士ぢや無い、違つて居つたけれども、今日は平民でも自然武士的の氣風に感染されて居るやうな所である。それが又餘程今日に於て强味であらうと思はれる。さう云ふことは教育以上のことである。教育で出來たとぢや無い。教育といふても自然の教育とは言へやうけれども、狹い意味、本當の意味で言ふ教育で出來たことではない。それであるから、私は教育以上のことだと思ふ。教育以上のことが今日の外國に對する上での、日本の利益になつて居ることは、マア餘程盛んないをと思ふ。

それは教育の御陰とは言い惡いが、併し此以後に於てさう云ふ氣風を保つといふことは、是は又教育に依ることで無ければいかぬと思ふ、武士的の氣風といふやうなものは漸々薄らいて仕舞ふに違ひない。モウ其境界に居つた人は段々無くなつて仕舞ふ。段々封建時代に遠かつて來るから、さう云ふ氣風は自然に任せて置けば段々薄らいて來る。けれ共其薄らぐのを一つ喰止めて保つて置かうといふには、是れから教育に依つて行かなくちやならぬ。ナカ／＼それは六つかしい事であらうけれど

も、教育といふので無くてはいかぬ。昔はさう云ふ世の中であつたから宜いが、モウ時勢が變つて居る、其氣風の善い所を採つて、さうして又惡い野蠻的の所もあるのだから、さう云ふ所は捨てることにしなくちやならぬ。武士的の氣風の中で、善い所を採つて惡い所を捨てゝ行くといふやうなことは、マア口ではチヨツと言へるが、實際には六つかしいてあらう。けれどもさう云ふ氣風を養うて行くといふ事は、此の後は之を教育て以て養つて行くより外仕樣が無い。

戰時の二大急務

「實業の日本」　園田孝吉氏

刻下の二大急務とは何ぞや、曰く

平時刷新を難しとする惡弊を矯正すること其一なり

國富の増殖を期圖すること其二なり

抑も我社會に於て刷新改良を要すべき事は擧げて數ふべからず、就中吾人は風俗習慣の點に於て最も之れが改良刷新の急切なるを認む、例之、冠婚葬祭に向て巨額の資金を濫費するが如き、和洋兩種の家屋を建築するが如き、和洋兩種の衣服を纒ふが如き、將た又住宅を外に妾宅を構ふるが如き、最も刻下に於て矯正すべき惡弊に非ずや、夫れ冠婚葬祭は人世の一大事なり、飽迄之を鄭重にし之を嚴粛にせざるべからざるは素より其所、然りと雖も之に向て濫りに巨額の資金を浪費し其局宛然たる御祭り騷ぎ的の弊習を極むるは寧ろ却て禮を缺くのみならず、不經濟も亦甚だしからずや、又和洋兩種の家屋を建築するが如きは單に家屋のみにて足らば未だ深く詰責すべきに非ざるが如しと雖も、爲に附帶器具も亦從て兩種を要するの結果を生ずるに至ては、其不經濟にして不生産的なる到底之を矯正せざるべからざるなり　又和洋兩種の衣服を調製せざるべからざるの必要あるが如き、不經濟にして亂雜なる社會組織は速に打破せんことを望む者なり、若し夫れ妾宅を構ふるに至ては其不經濟なるは論ずるまもなく、道徳上に於て速に刷新改良すべきものなりと信す。夫れ紛々たる此社會に於て改良刷新を要すべきの事項何ぞ限らん、以上は唯其重且つ大なるものを列擧せるのみ、吾人は速に其矯正刷新を望むものなり、惟ふに風俗習慣たる其來る所遠く、其因る所深し、縱令其弊害を感知すと雖も、之を矯正刷新して更に善良新鮮なる風俗習慣を作るは、風穩かにして波靜かなる太平の時代の能くする所に非ず、今や日露兩國干戈を交へ忠勇武烈なる海陸の將士は砲煙彈雨の裡に馳突す其勞苦眞に想察すべきなり、吾人國内に殘留する者將た何の面目あつて温柔塲裡晏夜の夢を貪ることを得んや、須らく其衣を減じ其食を節して、國家の爲に櫛風沐雨の苦艱を冒しつゝある海陸將士の勞苦を分たざるべからざるなり、嗚呼今や是れ國運隆替盛衰の危機に會す、其平時最も矯正刷新を難事とせる惡風弊習は、刻下に於て之を革新改良するを最も容易の事に屬せり、吾人は改良刷新の端を刻下に發し、之を長へに踏襲せんことを望む、蓋し惡風弊習は啻に戰時非常の塲合にのみ矯正刷新を要すべきものに非ずして、平時和風波靜の際に於ても緊切なればなり、否な長へに必要なるが故に之れが斷行の端を啓くに容易なる戰時非常の塲合を機とすべきのみ。(第二國富増殖の事は省く。記者)

文明戰爭の法規慣例

「太陽」　有賀長雄氏

(前略)此の通り政府及陸海軍ては更に手落はないが、茲に一言したきは、國民一般が文明戰爭の法規に通ずることてある。交戰例規を守るのは獨り政府軍人の義務てなく、國民の義務てあつて、國民一般の腦髓に其の觀

詞藻



紫陽花

漱石選

紫陽花の衰へや人戀に病む　初聲
紫陽花や七面鳥を飼ふ小家　同
紫陽花に雨一過して夕日かな　同
紫陽花や讀書の窓の雨しぶき　同
紫陽花の雨に懶し庭の隅　同
紫陽花に暮れ逼り行く流れ哉　同
紫陽花や垣くづれたる一つ家　松村
紫陽花や庭に干したる蛇の目傘　逸名
紫陽花の小川は暮れて蛙かな　同
紫陽花の午を鷄鳴く山家かな　柳波
紫陽花や蜂過ぎがてに白き蝶　同
紫陽花や一夜宿かる山の寺　同
病やゝ紫陽花に雨を見る夕　同
山の上や紫陽花もある公園地　虚牛
紫陽花や土用をこもる濱館　同
紫陽花や水にうつるは毒々し　同
紫陽花の下や土蜂の穴二つ　同
紫陽花を下宿の庭に見飽きたり　琵湖舟
紫陽花に茶かす捨てけり庭の隅　同
紫陽花や點灸もする寺の庭　同
客僧の紫陽花に歌なかりけり　同

選者吟

紫陽花や雨に溢るゝ手水鉢

六月分課題　◦白の字讀込（夏季）五月十八日限
七月分課題　◦黑の字讀込（夏季）六月十八日限

盆（春季結）

花散るや人なき茶屋の煙草盆　紫太夫
病ある蠶えりだす盆の上　同
春雨や盆くる店のうすぐらき　夕村
塗盆に雛の五器を並べけり　同
僅かなる摘茶を選るや盆の中　湖聲
つれ／＼に盆みがく日の遲きかな　同
盆栽の小石洗ふや春の水　玄骨
木を接ぐや椽の茶盆は日に破れぬ　松溪
櫻湯の盆は白木ぞよかりける　白風

初午や盆に盛りたる小豆飯　負天

花茶屋の盆にちりくる櫻かな　飄々

盆にのせし三寸程の接穗かな　無余

顔かくす下女がお盆や春の宿　同

盆の上に汐干の獲物移しけり　繞石

活くべきの花と鋏や盆の上　同

紅白の菱餅蒔繪の盆小さき　同

花吹雲茶盆の花を掃ひけり　同

行春や塗のはげたる朱ぬり盆　同

尾上柴舟選

夜濤

○　正富汪洋

泡だつ海それのひとときとわが歌のひとときといづれ君さだめませ

さらばわれうたの萬卷君におくりきみが小さき胸ふたぎてむ

にひ妻の姉さま冠りそれもまた小松にはゆる蕨おほき山

老の眼になみだたゝへてさらば往けとのたまひし師よなどゆきましゝ

○　高林柳子

楯に乗りてかへれとばかり出しやりし夜より母の夢たゞならぬ

椽に出てゝ髮干すほどのつれづれを籠のめじろと語りても見つ

うらわかき夏におごりの大孔雀尾羽のゆらぎに牡丹もくづる

岩をつたひ岩をすべりてくれなゐの島山椿波にまぎれたり

○　木村鈴子

ふと摘みてふと口をつけてふと捨てし野の花われになにのよしある

舞ひたちて勇士の柩めぐらふよ落花ことごと靈あるがこと

何のみだれ瞑座興がるこの夜ころけしうも鐘のわが胸にひゞく

君ありて我世榮あり君なくてこのちさきものよりどころなき

○　華畝

うるはしき春のまきまきかきをへて神の投げこし筆つくづくし

○　松子

いくばくの眞理(まこと)小さき(ちい)書(ふみ)にこもる丈夫たゞ誦せたゝかひのうた

●前號正誤、姤ましと云ふにもあらず恨みありと云ふにもあらず御手離れしは　汪洋、垣はあれど行きかひ易きうらの畑君と雀の聲まれびしよ　文子、人の園の圃によろなよろな目白たくみある世と我も知らざりし　華圃、

念が浸込んで居なければ獫狁に冠したると同じ話になり、見苦しい結果を生ずる。歐羅巴に於ては既に十分民心に浸染して居るが、日本は日尚ほ淺いから多少の遺憾がないとは言はれない。例へば今日の某新聞にも露國の無法と云ふ見出しを付けてドミトリ、ドンスニイが地中海に於て東亞に航行中の中立船を抑留したとが書てある之は無法でも何でもない、戰時禁制品、戰時禁制書、戰時禁制人等を積て居らぬかと云ふとを調へる爲に正等の手段である。露國艦隊が戰備のない北海道の市邑を砲擊せんとしたとを違法の如く言ふたのは誤りである、此の事は未た確定して居らず、英國海軍の如きは現に開放市邑砲擊の演習をして居る。又昨今何處の停車塲に行て見ても俘虜に宛てたる恤兵部は無賃にて輸送すると云ふ張出しが出て居るが、是れは一躰ドゥ云ふ譯かと云ふ事は平和會議て締結した戰の法規慣例に關する條約の第十五條以下を見ない人に恐くは分るまい、又彼の俘虜情報勤務なる者は何の爲におかれたのであるかアレキシーフの咽喉に匕首を貫した繪はがきを警察は何故に發賣させなかつたのであるか。日本に居る露西亞人は何故に悉く追拂はないのであるか、本邦に在る露清銀行の支店に保管する露國の債權は何故に押收しないのであるか、外國人が日本の國債募集に應ずるのは中立違反てあらうか。開戰當時日本の港内に居合せた商舶は何故に猶豫期限を與へて無事歸國させたのであるか、長崎上海間の海底電信は敵に於て切斷の樣子があるてあらうか、戰時禁制品は一切買入れが出來ないてあらうか、交戰中外國商船を買入れるとは出來ないてあらうか、敵國の知人へ郵便を出すとは出來ないてあらうか、凡そ此等の事及今後陸續發生すべき幾多の問題に付て公衆が直に正當の判斷を下し得る樣にしたい。ソレに就ては公衆の耳目たる新聞雜誌が公法觀念の普及に勉めて天下を指導するとが必要であると思ふ、因て日露戰爭の晴れ舞臺を立派に演じ終るとに熱心の人々は此の一事にも應分の注意を拂はれんとを希望するのである。



戰後に於ける吾人の覺悟

長谷川天溪

有史以來、戰爭の開かれたる者、擧て數ふべからず。さて戰爭は、其れ自身に於いては惡なると、吾人の娓娓論述を俟たずして明白ならむ。然れども、是れを結果より觀ずれば、即ち功利的に觀察すれば、必ずしも絶對的に惡なりと謂ふべからざるなり。若しも一の戰爭にして、世界の大勢進步に、幾分かの貢獻する所あらば、吾人は其の戰爭を指して、正義公道に愜へるものと論斷せざるべからず。反言すれば、正義公道を維

持すべき最後の手段として戰爭を許さゞるべからず。此の故に釋迦の聖賢を以つてしても、孔子の仁義を以つてしても、基督の博愛を以つてしても、場合によりては、戰爭的態度を許容せるのみならず、彼れ等自ら其の態度をとりし事すらあり。戰爭の價値の輕重は、單に其の年月の長短、兵士の多寡、戰域の廣狹、武器の精粗等を以つて論定すべきにあらずして、必ずや、世界の大勢を、進歩せしめたるか、或は退歩せしめたるか、換言すれば、文明を進開せしめたるか、或は其の發展を阻害したるか、否かを討究して後に隱價すべきなり。斷じて一國の膨脹、一個人の榮華を以つて、その標準となすべからざるなり。

この理や寸毫も動かすと能はざるべし。而して是れに依つて、古今の戰爭を評價せむか。幾千百の戰鬪は皆な邪惡として觝排擯斥せらるべし。これを我が一國内に就きて見るも、前九年の役と稱し、後三年の役と云ひ、或は川中島の戰と云ひ、或は西南の戰爭と云ひ皆な何等の價値をも有せざるべく、是れに反して、壇浦の海戰、關ヶ原の役、日清戰役の如きは、實に重大なる戰と稱すべし。更に世界史上を探れば、遠くはサラミスの海戰の如き、ピユーニック戰爭の如き、十字軍の如き、オットマンの東羅馬と戰ひしが如き、近くはトラファルガー海戰の如き、普佛戰爭の如き、皆なこれ世界の大勢、文明の進歩に關する所重大なり。斯くの如き戰爭にして、其の表面の短所を補ひ得るだけの、良結果を有する以上は、これを有益なる戰爭と言はざるべからず。然らざれば則ち非なり。

然らば今日の日露戰爭は、果して幾許の價値を有するものぞや。又その結果は、善と稱すべき乎、はた惡と稱すべき乎。是れ固より今日より推知するを、早計に失すべしと雖も、而も吾人は、これを豫言するに憚らざるものなり。即ち日露戰爭なるものは、世界の大勢を一變して、文明の進開發展を助くるものなりと斷言するに憚らざるものなり。而して是れを斷言すると共に吾人の覺悟する所、深大ならざるべからざるを一言せむと欲す。

日露の戰爭が、世界の大勢に關與する所、密接なるは、吾人の喋々を要せざるべけれども、事の順序上、これを約言せむと欲す。それ世界の歷史は、從來二大潮流に分れたり。其の一は西洋の歷史を造り、他の一は東洋の歷史をなしぬ。固より其の間、數小流の相通じたるなきにあらずと雖も、大勢より論ずれば、瞭然

として二大流に分れたるは、三歳の童子と雖も、熟知する所なり。然るに日露戰爭によりて、此の兩文明の一大衝突こそ起りぬれ。露は西洋文明の大なる一要素たり。而して吾が帝國は、東洋文明の中樞たるの位地に在り。此の兩國、今や滿州の野に於いて、雌雄を決せむとす。これ史上空前の一大戰爭にあらずして何ぞや。

更に人種上より是れを觀ずるに、これ黄色人種と白色人種との衝突なり。高天原より勃興しる日本人と、カルパシア山麓より北漸せるスラヴ族とは、Xと見做されし山野に於いて角逐す。空想に富める露人は、白色人種の勢力を東洋に伸張せむと欲し、やゝ着實なるスラヴは、歐洲に於いて、勢力擴張の困難なるを悟つて、東洋に一の不凍港を建造せむとす。さはれ孰れにしても、白人の勢力範圍を、支那海岸に求めむとするは一なり。此の時に當つて、吾が帝國は、東洋を代表して、其の野心を抑壓せむとす。かのサラミスの海戰と云ひ、トラフアルガーと云ひ、米國獨立戰爭と云ひ帝國に於ける蒙古の襲來と云ひ、その激烈なる大戰爭なりしは疑ふべくもあらざれども、皆な同人種間に於ける衝突爭鬪に外ならず。然るに今日の戰爭や、根源を異にせる兩人種の間に行はる。即ち人種競爭の一端と言ふも敢て不可なきなり。これを大戰爭と言はずして、又何をか大と稱すべき。

一轉して政治的關係より是れを見るも、此の衝突の關聯する所廣大なるは、識者を俟たずして明かなり。スラヴは、歐洲中、最後に發達せる民族なり。そのダニューヴ河岸に跼蹐し、蒙古人種の侵掠に苦み、氣候と戰ひつゝありし間に、拉丁、チユートンの二族は、歐羅巴の優者となりぬ。而して其れ等の勢力は、後進たるスラヴ族の當るべからざるに達しぬ。是に於いてか、彼れは歐洲の天地を棄て、亞細亞に向つて、其の羽翼を伸張し、その基礎鞏固なるに及んで、轉じて歐洲を覗ひ、以つて全世界の覇者たらむとの遠大なる謀を廻しぬ。かれが滿洲を占領し、尋いて韓國を掠め、而して後に英獨佛米に當らむとするは、火を睹るよりも明かなり。若しも此の謀にして成功せむか。世界は露の暴逆無道の手段に罹りて、幾多の困難を感ずるに至らむ。然れども日本ありて、彼れ非道なる野心を抑壓す。露は爲に、世界の舞臺に跋扈すること能はざるなり。これ此の大戰爭の世界の大勢と關係ある第三の要點なりとす。

此の他精細に觀察し來れば、此の戰爭が、結果の善惡は兎も角も、世界の大勢と關係を有する點多かるべしと雖も、主要なる點は、是れを以つて盡きたり。然らば是れより一轉して、此の戰爭の、如何なる善果を生ずべきかを一言せむ。これ前記せる所より、略ぼ推察するを得べし。即ち第一は、露の無道なる野心を壓迫すると、第二は白人の迷妄を濟度すると、第三は東洋文明の長所を發揮して、やがて東西文明混和の一大潮流を造ると、これ此の戰爭の善果なり。

戰爭現在の形勢を以つてするに、露は遂に和を請はざるべからず。世界の平和を害し、文明の進歩を阻害するものは、曾つて平和會議の主張なりし露國ならずや。其の國家たる、外に向つては、領土擴張、利益收得のために、如何に卑劣無道の手段を執るも、如何なる譎瞞を用ふるも恥づる所なく、内に向つては、壓制暴横極まる所なし。トルストイ伯を迫害し、猶太人を苦め、フヒンス、ポールスを虐げ、善良なる農民を貧窶に泣かしめて、毫も意に介せざるものは露國なり。これ人道の敵ならずや、これ正義の敵ならずや。而して今や日本の懲討する所となる。失敗せる露國は、内政を改革し、外に對する手段を改善すべし。これ日露戰爭に因りて生ずる善良の結果なり。

白色を誇るアーリアンには、一の自惚根性を有す。彼れ等以爲らく世界は白人の爲に創造せられたり、白人は終極に於いては、異人種の上に立つべき運命を有するものなりと。彼れ等は狹小なる眼孔を以て、過去を觀察し、而して世界最優等の人類は、白人なり、其の白人は、遂に世界を服從せしめ、基督教を以つて、人類の宗教たらしめむとの空想を懷く。愚憎も亦甚しからずや。發展し得べき能力を有するもの、何ぞ夫れアーリアンの一人種に限らむや。宗教、哲學、科學、文藝を有するもの、何ぞ白人のみならむや。是れ古代の歷史に徵して明かなり。古代を顧るの必要もなく、現在に於いて證據立つるを得べし。何ぞや、白人の一派なりと言ふスラヴ民族が、吾が帝國の鞭打つ所となれり。亞米利加インヂアン、或は亞非利加黑奴をのみ相手とする場合には、白人最高の想念も生ずべけれども、今日となりては、其は全く自惚根性に生じたるを自覺すべし。卓見の士は、夙に異人種の能力を知りて、黄人患なる文字を作りぬ。その黄人患を防禦し、驅除すべき金城鐵壁とも見做されたるスラヴは、果敢なくも、東洋の打擊に遭うて破れぬ。白人の空想は、

ますく其色褪せて、あはれ夢の如く消え去らむとす美しき夢想は、仁川、旅順に砲聲の轟々たると共に、かすみ行けばこそ、黄人患なる警戒の言は、愈よ激しく用ゐられる。さはれ白人が、斯くの如く、異人種に對して、警戒を加ふるは、これ一面に於いて、競爭を意味するものなり。既に人種間に競爭ありとすれば、人文の發達、更に亦大なるべし。此の故に吾人は日露戰爭に因りて、文明發達の上に眞果を生ずと主張す。

白人の創造せし文物制度のみが、文明的なるにあらざるは明々地たり。東洋と雖も、燦爛たる文物を有し制度を組織せり。去れど此の制度、此の文物は、永く白人の侮辱を蒙りぬ。これ白人も其の眞價を知らず、東洋の人種も、果して幾許の價値あるやを自覺せざりしが故なり。これ一に、兩人種の激烈なる競爭なかりしに基く。然れども今や其の機會は來りぬ。而して吾れの能力は、決して泰西に劣らざるを、自ら悟ると共に、歐人も亦之れを承認せり。かの金剛力士が、巨石を動かして、初めて自身の怪力を知り、熊野の僧坊皆な驚嘆したると均しく、吾が日本人の力は、露國といふ巨岩を動かして初めて世界に現はれ、また自らの知る所となりぬ。既に此の能力あり。これ一朝一夕にして養はれたるものにあらで、過去數世紀の鍛錬に基くは明かなり。然らば同じ能力によりて作られたる文物制度、これ決して白人の產物に劣るものに非ず。況や支那數千年前の文華あり。げに東洋には東洋固有の文明あり。此の文明や、戰後に於いて、世界に紹介せらるゝは、當然の結果なり。何となれば、吾れは夙に歐米の文化を學び、今や固有の文化を發揮せむとし、彼れは東洋の新勢力に驚きて、吾れを研究すべければなり。是に於いてか、東西文明の一大競爭生ずるか、然らずんば兩文明の大融和來らむ。これ亦日露戰爭の結果なり。

斯くの如く觀じ來れば、日露戰爭なるものは、實に重大なる關係を有するものなり。然らば吾等は、戰後に對して如何なる覺悟を定めざるべからざるか。一に曰はく、反省的なるべし。二に曰はく、泰西に對しては研究的なるべし。三に曰はく本能發展主義を執るべし。

反省的とは何ぞや。吾れ等の能力の過去と現在とを顧よと言ふに在り。維新の改革以來、泰西崇拜主義行はれて、假りにも東洋の名あるものは、悉く擯斥せられたるに非ずや。その間元より二三の反動ありしとは

雖も、要するに好奇的反動のみ。然れども今や、眞に吾が能力の大なるを自覺しぬ。此の時に當つて、吾が能力の、如何なる活動を爲しゝあるかを研究するは、最大の急務なりとす。吾が文學、美術、宗敎、政治、實業、工業等の發達は如何なりしかは、未だ充分に研究せられざるに非ずや。况や東洋の文明をや。今後の日本は、世界の大舞臺に活動せんとするに當りて、自國をはじめ、東洋の文明の迹を知らずして可ならむやげに吾れ自身を顧るべき時代はは到來せるなり。

泰西文明に對しては、須臾らく研究的たるべし。從來吾れの泰西に對せし態度は如何なりしぞや。一言して盡せば崇拜的なりき。舶來どさへ言へば、釦一つまてが尊ばれ、西洋的といへば、必ず優等なりと思惟せられたるにあらずや。否、今日に於いてすらも、西洋崇拜の熱は除らざるなり。今や泰西と角逐すべき時期に入れり。されば先づ彼れの眞相眞價を識別せざるべからず。されど從來の崇拜的態度にては、到底彼れの長短を判定し難し。たゞ是れを爲し得るは、冷靜なる研究的態度なり。彼れの文明の皮相のみを觀じては、何等の利益もなし。その根底を究むるに於いて、初めて多大の利を占めむ。

西洋崇拜は、一轉して模倣主義を呼び起しぬ。ハイカラ徒は其の最も熱心なる信徒なり。世界の强國たるものが、徒に模倣するのみにては、忽ち强國たるの資格を失はむ。而も特有の能力を抱きながら、彼を模倣するが如きは、無氣力の甚しき者ならずや。此の故に吾人は、今日より本能性發展主義を以つて、國民活動の方針たらしむるヿを主張す。本能性といふ、決して劣等なる性情の意にあらず。吾が國民の脳中に潜在する優等の性能を發達せしむるヿ、是れ將來の目的たらざるべからず。

日本帝國の臣民たる以上は、皆な此の覺悟を定めざるべからず。政治家と言はず、敎育家と言はず、文學者と言はず、實業家と言はず、皆な此の決心をもつて各其の專門の方面より、帝國の文明に、貢献する所あらんヿを切望す。勝利の歡聲に醉うて、將來の謀策を誤るヿ勿れ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

マカロフ中將を弔す

成川生

露國東洋艦隊司令長官マカロフ中將、遂に國家の爲

に斃れたり。嗚呼、誰れか亦之れを悲まざる。中將は海軍界に於いては、マハン氏と相列べる名家なり。その經驗に富み、戰略に長じたるは、吾人門外漢の喋々を要せざるべし。然るに中將や、むしろ戰略なき庸將に等しき最後を遂げぬ。これ中將にとりては、永劫に消えざる憾なるべし。露帝は中將の未亡人に、巨額の扶助料を下し給へりと雖も、中將の魂魄や、慰藉せられざるべし。

　中將の戰死たる、中將の過失にあらずして、露國民の罪過なり。中將如何に戰術に長じ、武勇ありと雖も氣力なく、德義心なき兵卒を率ゐては、終に勝利を占むると能はざるべし。露の兵士は、敎育なき利己主義の徒なり。その眼中には、皇帝なく、國家なく、將校なく、只自己の存在あるのみ。彼れ等は、皇帝と國家との爲に戰ふにあらずして、金錢の爲に戈を執れるなり。これを以つて看れば、露政府の、兵卒に對して、壓制の手段を取るは、幾分か恕すべき點ありと言ふべし。根帶に於いて精神氣力なく、外部より無限の壓迫を蒙る兵卒の、用ふべからざるは、多辯を要せず。故に曰はく、マカロフ中將を殺したるものは、我が帝國海軍にあらずして、實に露西亞の國民なり。

　更に一步を進めて論ぜむ乎。中將を殺したる者は、露西亞の政府なり。中將は純然たる武人なりき。アレキシエフ大將と中將とは、もと同號なりしかど、前者は政治的野心ありしが故に、遂に大將に進み、極東總督の任に當れり。然るに中將は、純正なる武人なりしが故に、遂にアレキシエフの命令を俟つべき位地に至れり。中將の胸底、一點の不平なくして可ならむや。かりに中將を君子とし、其の胸底、何等の怨恨なしとするも、露國が中將を用ふるの明なかりしは、事實に於いて證明すべし。何ぞや。中將の主張せる水雷艇活用、戰鬪艦無効力の戰術は、露政府の排斥する所たりしにあらずや。政府は斯くの如くに中將を冷遇せり。世に容れられざる將軍として、無氣力なる兵士を率ゐ百計遂に空想に歸するは、是れ當然の結果なり。此の故に吾人は謂ふ、マカロフ中將を殺したるものは、我が帝國海軍にあらずして、實に露西亞政府なりと。

　故中將が、海軍の發達に貢獻する所多かりしは、世界の承認する所なり。その破氷船の發明の如き、實に偉大なる功績と稱すべきものにあらずや。而して其の戰術に關する著述は、世界各國に翻譯せられ、現に吾が國に於いても、之れを譯して敎科書とす。その書は

果して幾許の進歩を、吾が海軍に與へたるかは、吾れ等の知らざる所なりと雖も、旣に其の書の採用せられたるを以つて看れば、中將は吾が師なり。其の師や、後進と戰つて死せり。さはれ吾が海軍の戰略が、故中將の理想とせる所に近きを見れば、中將は死して、其の主張の確實なるを證明したりと謂ふべし。

動物虐待防止會とは何ぞ

動物虐待防止會なるものあり。文明の世に生れたる動物は幸なるかな。されど一轉して考ふるに、我が國內にては、斯かる會を組織する必要ある程、動物を虐待しつゝありや。

繁華なる都會にては、家畜を虐待することあるは、吾人の熟知する所なり。然れば一步地方に踏み出さば、牛馬が、いかに優遇せられつゝあるかは、旅行家の等しく首肯する所なるべし。田舍の如きは、荷馬を愛して、馬子は、自分の食物よりも、上等なるものを、彼れに與ふるは、吾人の屢ば見たる例なり。而して都會の地と雖も、虐待と言ふべき程の虐待は、吾人の未だ觀察せざる所なり。否、世人が、虐待せられたる動物に對して、深き仝情を懷きつゝあるは事實なれば、事事しく虐待防止會を組織するの必要もなからむ。西洋諸國にて、此の種の會團あるは、虐待に對する反動に外ならずと雖も、吾が國にては、未だ其の必要ある程に動物を虐待せざるなり。殊に人間と下等動物とは其の性質を異にするものなれば、彼れ等牛馬に對する仁惠は、却つて其の不利となることなきを保し難し。某の小兒は、寒中、水中に游泳する金魚は、定めし寒かるべしと念ひて、熱湯を注ぎ込みしとか。淺薄なる博愛主義は、此の兒の愚と擇ぶ所なからむ。

されど虐待防止會は、決して惡しきものに非ざれば吾人とても其の成立を非難せざるべし。否、むしろ其の成功を祈りつゝある者なり。然れども只感情一遍の防止會は、吾人の取らざる所なり。動物なればとて、これを虐待するの非なることは、くだ／＼しき說明を待たずして明かなれば、斯かる長談義よりは、直に虐待防止の方法を案出するこそ要なれ。

單に消極的に、虐待を防がむとするよりも、今日の狀態より言はゞ、むしろ動物改良の事を計るは、急務なりとす。牛馬の種を改良して、人類の利益を多大ならしむべき動物を作らむと、これ吾人の望む所なり。是れが爲には、啻に拔苦の方法を考究するのみならず

躰力增進の道を開かざるべからず。如何に動物を愛すればとて、人類の利益を減じて、之れを實行するの必要もなかるべく、又人類社會を等閑視しても、彼れ等社會を顧るの必要もなし。吾人は未だ該會の內容目的を審にせずと雖も、其の事業として見るべきものもなく、且つ動物改良の一大目的と遠ると甚しきを慨じたるが故に、玆に一言を加へたり。會員諸氏よ、更に深く考慮する所あれ。（此の一文二月十七日稿）

戰時に於ける婦人

日露戰爭は、史上稀に見る所の大戰爭なり、此の一大刺激を受けたる日本婦人は、如何なる覺悟をか決すべき。日々の新紙は、婦人の美擧を傳ふ。吾人は是れを讀む每に、我が邦固有の婦德の、美しき光彩を放ちつゝあるを怡ぶと共に、吾が婦女が、今回を機として日本特有の婦德を發展せしめんことを瞩望す。

維新の事業は、吾が國家に丕大なる進歩を與へたりと雖も、婦女子の敎育といふ方面を見れば、一般の敎育に通ずる弊害と仝一性質を帶ぶるの傾あり。何ぞや智育に偏して、德育の衰退せることこれなり。淺薄なる敎育家は、動もすれば舊幕時代の婦女無敎育を痛罵し、尙ほ現今、女子敎育の不完備を說く。現今は暫く措きて論ぜざるべし。されど德川時代に於いて、婦女の敎育劣等なりと論ずるは、文字さへ讀み得れば、敎育ありと信ずる者の愚論のみ。知らずや、仝時代に於ける德育は、到底今日の及ぶ所にあらざりしなり。かりに其の婦女に對する思想は、不完全なりとするも、その模型の內に是れを養成するの道は、頗る堅固なりき。

然るに維新後に至りては、婦人が智識の不足を感じ之れを補充せむとするに急にして、德育を等閑視せり。此の弊や、今日に至りて愈よ瞭然たり。かゝる方針にて養成せられたる婦女は、恰も鸚鵡の如く、口上のみ立派にして、心中は虛空なり。即ち其の一擧一動は、心底より湧きしものに非ざるなり。

斯くの如く養成せられたる處女が、將來に於いて、良妻賢母たらむとは、到底望むべからざるなり。現に今日に於いてすらも、女學生上りは役に立たずとの非難多きにあらずや。今や道德的情操の尤も顯著なる時代なり。此の時に當つて、女子敎育家の、將來の計策を講ずべきは勿論、婦女子自らが、女子の本分を自覺せむと、吾人の切望する所なり。女子の本領とは何ぞや。家庭を圓滿ならしむる一點に歸着す。これ語るに

易く、行ふに難きもの、鞏固俊儼なる精神あるにあらずんば、決して行はるゝものに非ず。戰時に於ける社會は、婦女子に對してよりも大なる要求を爲す。これ戰國の社會には、婦女の勢力を俟つもの多きが故なり、故に婦人としては、此の方面に於いて有らん限りの力を用ふべきなり。例へば軍人遺族の慰問の如き是れなり。然れども徒に戰爭熱に浮かされて、良妻賢母たるべき本領を忘るゝこと勿れ。即ち圓滿なる家庭を造るべき職務を忘却すること勿れ。社會に對する義務を盡すことは、往々にして一家内の平和を破ることあり。これ未だ眞正の義務を知らざるに基く。げに今日の婦女子たるものは、如何にして家庭を圓滿ならしむると共に、如何にして社會に對する義務を果すべきかを、深く考慮する所なかるべからず。

尚ほ吾人は一言望む所あり。何ぞや、今回を機として、婦女子が確固たる意志を鍛錬せむこと是れなり。往昔の婦女子には、男性的性質ありき。然れども今日の婦女には、剛勇なる精神は、殆ど全く失はれたり。其の原因に關しては、幾多の議論ありと雖も、そは別問題として今は論せず、只現狀のみを記すれば、婦女は全く感情的と變じぬ。米國式の體操は流行して、身體は、ぞく／＼肥へたりと雖も、其の性行は、益々ヒステリー的に傾く。こは吾人の、實例を擧ぐる迄もなく具眼者の知る所ならむ。斯くの如くんば、日本將來の世界は、ヒステリー患者の病院と變ぜむ。されど幸にして好機會は來れり。是れを利用して、精神意志の鍛錬を勉むること、これ婦人自身の責任ならずや。

無題錄十五則

◎學制研究會から檄文が出た。曰はく、戰時に由つて教育事業、殊に市町村の經營に關する普通教育の事業は、非常の損害、打擊を蒙つたと。事業左樣てあらう。吾か輩とても其の事を認ぬのでもない。然しながら經費節約のために、教育事業か振はぬと言ふのは理屈に合はない樣に考へられる。

◎今日の節減は、形式上の節減であつて、決して精神上の儉約ではない。して見れば、教育家たるものさへ確固たる精神を持して居たならば、教育事業の出來ぬ筈はあるまい。經費節約のために、教育事業に打擊を蒙つた、など、言ふのは、教育家諸氏の無氣力無精神を證明するものと言つて宜しい。

◎吾か輩は言ふに憚らぬ、今日全國の學校を閉したからとても、決して教育事業は中止されぬこと。何となれば、日露戰爭によつて、國民は老少男女を問はず、一大教育を受けつゝあるではないか。其の教育は單に

精神上許りではなく、智育の上にも、非常の利益あるとは、形式的敎育に優ると、數等である。忠勇美談か如何に四千万の同胞を動かすか、日日の戰報が、いかに知識を增加するか、これ多言を要せずして明白である。げに戰爭は大なる敎育機關である。

◎全體日本の敎育方針が、形式外見を先にするのは大なる缺點である。地方などで、寒村中最も立派な建物は何かと見れば、必ず小學校である。是れ校舍建築の嚴重なる規則があるからであらうが、そんな事で、民の負擔は愈よ重くなる。校舍が無ければ、敎育が出來ぬといふ理由もない以上は、都合上、寺院を借るも宜しからう、又已むを得ずんば、野原に小屋掛しても宜しからう。所が今日では校舍がなくてはならぬ。これ單に小學校のみならむや。萬事皆な此の筆法で運ばれて居て、それで敎育事業が揚つたと言ふ人も多いやうだ。從つて今日經費節減のために、其の事業が揚らぬと推論する人のあるのも當然である。何ぞ知らざる一年四億七千萬の巨額は、戰爭といふ一大敎育機關を運轉する敎育費で御座りますぞ。

◎二六新報が休刊した翌朝からは、東京二六新聞か發行された。發行禁止の力、何處にあるぞ。

◎近頃外國新聞雜誌の日露戰爭のポンチ書を見ると段々日本が大くなつて來た。從來日本と言へば、豆の樣に小く書いてあつたのが、今日では、すばらしく大くなつた。西洋人も中々お世辭が上手だなア。

◎ポンチで思ひ出したか、米國のポンチは、全く西洋風の日本人を描き、佛蘭西では、日本の古い時代の風俗で、日本人を代表させる。これを見ても、佛國には日本の古美術を研究して居る人の多いとか知れる。

◎萬朝報と二六新報とは、互に不正呼はりして、醜い喧嘩をした。誰れか烏の雌雄を知らむやだ。

◎讀賣新聞は、『今死なば』といふ不思議の題で、現代名士の歿後を想像して居るが、吾が輩は、同新聞の大往生を遂げた後を想像して見やう。先づ法號に曰はく『魔風院戀慕憧憬新紙』。そこで冥土で發行さるゝ場合には、持主が光源の君、會計掛長が時次郎、實捌か金五郎、主筆が業平朝臣、女記者には初野女史。號外賣が伊左衞門。

◎米國のマッギー夫人と一行とは、日本の負傷病兵を看護せむ爲に來朝された。吾が國民は深く感謝の意を表さねばならぬと共に、吾が婦人界は、大に奮發する所が無くてはならぬ。舞踏とか、體育とか、面白さうなものだけ外國に眞似て、斯る方面を模倣する場合になると、グニャリとする婦人連は、マッギー夫人一行に對して、合はす顏もあるまい。

◎邦人の恩人スタージ氏夫妻は、三月下旬を以つて本邦に來られたが何しろ、戰爭中であるから、國民が充分に歡迎するとの出來ぬは遺憾である。否、戰爭に氣を奪はれて、氏の來遊に氣が付かぬ傾のあるは、實に申譯の無い次第である。

◎スターヂ氏は醫學博士である。曾つて感ずる所あつて、桑港の一大青年會館を設けて、日本青年の薫陶に從事されると、十五年の久しさである。その篤實溫行なる博士の薫陶を受けて、立派な位地に上つた人も決して尠くない。げに在米の邦人が、父母として尊敬する君子は、スターヂ氏であらう。

◎曾つて桑港で、日本人の間に、博士に對する感謝會の開かれた時、誰れ言ふとなく、博士の日本漫遊の旅費を醵金しやうと言ふとて、忽ち千弗の金を造り、これを博士に贈つたと言ふとたか、是れだけでも、博士が如何に善く日本人を教道し、薫陶されたかゞ推察するとが出來る。博士は喜んで此の金を受けて、今回來朝されたのである。

◎仝博士並に夫人の詩集がある。これは日本の歴史風俗を詠じたもので、其の書は吾が　天皇陛下の乙夜の覽に供せられた。然るに此の書の公になつた來歴は面白い。在米の日本人は、博士の詩歌を是非とも一冊の書にしたい考で、これを博士に謀つたならば、名利を好まぬ人であるから、必ず中止を命ずるであらうと言ふので、極々秘密にして出版し、感謝會の時、其の書を博士に呈したさうだ。是れ等の點から見ても、博士が名利の爲でなく、全く博愛義俠の精神から、邦人を教育し、監督されたとが解せられる。

◎此の恩人は、今や日本の地に來遊された。吾れ等は如何にして其の恩に酬ゆべきであらうか。吾が國民は動もすれば外人の恩を忘却する傾かあつたか、今回は大に勉むる所がなくてはならぬ。何も盛大な觀迎會などを開く必要もなからうか、哀心から湧き出でた尊敬を拂はればならぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

尾崎行雄氏　一　二　三

▲最近の「日本人」にこういふことがいつてある、曰はく「東京市長は尾崎氏が天下の名士として迎へられしに、今や氏の評判頗る好からず、芳野氏は是れ能不能の問題にあらず、彼れの人格松田にも劣るが爲めなりといへり。現行市制にては何人も之を困難とせざる能はざるべきか、尾崎氏たるものは、此際奚んぞ大に奮勵せざるべけんや。」と、

嘗て東京市會の群盲が輕擧して尾崎氏を市長に推したるや、識者は私かに苦笑を禁じて傍觀したりき。今や則ち何爲る樣ぞ。凡そ我が國現代の公人にして尾崎氏ほど買ひ被られたる人なし、試みに想へ彼れが尚ほ白面にして當世の事務を喋々したりしより東京市長の今日に至るまで詭辯的法螺を吹き通さゞるはなし。只其の詭辯に愛嬌あるが爲めに、新聞記者等の道樂者に煽てあげられ、彼が言ふこと爲すこと、「共和演説」の輕忽、政治的出處進退の大より、日常茶話の些事に至るまで不思議にも厚かはしき新聞記者等によつて辯護せられ、賞讃せられたり。甚だしくも惚れ込みたるものは尚ほ今日に於ても曰はく「尾崎は事務家にあらず見識家なり」と、彼れももう五十歲に近からずや。



社會

戰爭と勞働社會

天涯茫々生

戰時に於ける貧民部落の消息は、前號の中央公論誌上に於て余は其の一端を記るせり、今回は勞働社會の影響如何を記るして、讀者の參考に資せん。

工業勞働者に二種の別あり、工場勞働者と、非工場勞働者と是なり、工場勞働者とは、原動機を据ゑ、蒸汽力を用ゆる工場の下に、勞働に從事する職工の階級にして、非工場勞働者とは、手工に從事する工場職工以外の勞働者を總稱し、從來我國に存在せる都鄙普く見る所の大工左官石工の類、悉く之に屬す。既に戰爭と勞働社會といふ、固より工場勞働者と非工場勞働者とを總括して記るすべきを順序とすと雖も、余は、單に工場勞働者の影響如何を見て、他は異日に讓るべし。（博文館發刊第二卷第七號及第八卷、拙稿戰爭と手工業者參考）

一　府下有數の工業部落

戰爭は工場職工に如何なる影響を與へつゝありや、といふ漠然たる疑問の下に、直に世人の眸裡に映ずるは、一工場の中に最も多數の職工を收容し、其の製作品は、支那貿易の第一位を占むる紡績職工の狀態なるべし、知らず、紡績職工の現狀は如何。

紡績職工！、常に蝦茶袴を材料とし、戀愛を題目とする詩人小說家の眼には、紡績職工は、汚ろしき衣服を纏へる、蠢然たる一物躰に過ぎざるべし。然かも何等の詩趣なきげに見ゆる此の紡績職工は、余輩の間に在りては、最も多様の意味を含める職工階級にして、其の狀態に幾種の敎訓あり、研究に價値多し。二月一日、戰爭來の聲を聞くや、余は逸早く、府下第一の工業部落を以て名ある鐘淵紡績會社の所在地。都鳥の浮べる隅田川に沿ふて、天には煤烟漲り、地には汽笛の聲充てる吾妻村に趣けるなり。

讀者諸君、余輩は今爰に簡單に、此の工業部落の現狀を擧ぐべし、府下有數の工業部落と知らるゝ鐘淵紡績會社の所在地――南葛飾郡吾妻村は、戶數より言へば、各種の工場集れる王寺村に劣るべしと雖も、其の住民の過半、否七八分迄は、鐘淵紡績會社に關係ある

者を以て成る、會社附屬の社宅を擧ぐるも、八疊の一室を一戸とし、十六戸を一ト棟とせる長屋四棟、即ち六十四戸あり、而して八疊一室の一戸に三人四人、甚しきは五人の同居者あり、單に社宅の人員を擧ぐるも、二百人以上に出づべし、其の他千戸に近かき住民の中、工場に關係なきは甚だ稀なり。

蓋し同紡績會社の使役せる職工、男女を合せて二千百人、而して女工の大半は、寄宿舍に寢食すと雖も、尚其の半分は、男工と共に、工場外の工業部落に散在す、而して爰に料理店あり、寄席あり、雜貨を兼ぬる菓子屋あり、酒屋あり、湯屋あり、理髮店あり、女髮結あり、皆職工を中心として相集れる者、名は村落と言ふと雖も、一小區劃の間に、各種の機關備はり、之を從來の農業村落に比ぶれば、其の性質に於ても、其の風俗に於ても黑白の相違あり。然かも工業部落なるの故を以て、時勢の影響あるも亦甚だ大なり。

常に最も景氣を示しつゝありし此の工業部落は、今日に果して如何なる狀態に在る乎。

二　戰と紡績工場

東京には紡績工場の數五種あり、錘數四万千二百餘錘の鐘淵紡績會社を筆頭として、東京紡績會社、瓦斯紡績會社、毛斯倫紡績會社、及昨年の春富士紡績會社と合併せる小名木川大島村の富士紡績會社、即ち是なり、今兵庫分工場を合せは東洋第一の紡績會社たる鐘紡工場の現狀を擧ぐれば、戰時に於ける紡績工場の現場を審にするを得ん乎。

讀者諸君、余輩をして爰に少しく閑文字を弄せしめよ、工場研究の上にも幾多の滑稽あり、喜劇の裡に悲慘を認むるは、讀者の勝手なりとす。

余は六七年前より、鐘淵紡績會社を訪へると今に數回、會社掛員は、常に余輩の來訪を喜び、工場及寄宿舍の內部を開きて、快く其の質問に應ぜり、之を以て余輩は、世人に告ぐるに、同會社が資本金額の大なると共に、其の方針を時勢に伴へる公明正大を稱せり。然るに我國の大工場を以て知らるゝ此の鐘淵紡績會社は、米國の棉花相場が、意外の暴騰を示せるに周章狼狽せる各紡績工場の間に立ち、超然して、獨り操業の平日の如くにせるにも拘らず、開戰の報に接するや、俄に從來の方針を變じて陰蔽主義を取り、工場の內部を秘密にす。それとは知らぬ余は、工業部落を見舞へる序を以て、同工場の工務掛長に會し、質するに戰爭の影響如何を以てせり。

『影響！棉花が今日のやうに暴騰してゐるんですもの！そら非常なる影響です

と答へて、其の言葉の終らぬ間に、直に態度を換へ「が、騒いだつて仕様がありませんさ、本社の如きは、例年の通り遣つてをります」と眞顔なり、職工數に增減なきや、と切り込めば、恰も余が言を解せざるが如く、すと立ちて、己れの席に還へり、暫らく他の役員と何事歟打ち語らひ居れり、可笑しな眞似を爲す者よ、と同人の席に還へりしを見て、再び質問を繰り返へし、更に、夜業の有無如何を併せ問へり、職工數はその日〳〵に相違あり、今日は幾千幾百幾十幾人、と精確に答ふる譯に參らず、と不得要領の挨拶。夜業の有無如何に對しては、余の何者たるを眼中に置かざるが如く、：昂然として

『日本の紡績業は、夜業といふやつが、その習慣ですからな、世間の書生が、色んな事言つても、それは駄目だ

と余が戰爭の爲に、夜業を廢しつゝあるにあらずや、との疑惧を懷けるを過り、夜業廢止の意を以て質せる者と解するに似たり、あゝ鐘淵紡績會社は、果して夜業を廢せざる乎。

更に、其の賃銀如何を質したるに、之も極めて不得要領、「その賃銀も、從來の通りです、いや昨年よりは二三錢宛昂つてをるかも知れません、左樣、多いのが六七十錢、少いといつても二十錢――二十五錢位であらうか」、余は餘りに其の答辯の漠然たるに、聊か興を醒ましたりしが、凝と心を靜め、倘、膝を前めて、賞與の種類を聞けるに、掛員は不在ですから譯りません、と呆氣なし。

鐘紡工場工務掛長の答ふる所、實に右の如きを以て、余は到底滿足の返答を得ざるべしと考へ、終りに、工場縱覽の事を以てせるに、果然！、大果然！　如何なる株主の請求あるも、操業中は、工場の縱覽を謝絕しつゝあるといふの故を以て、見事に工場内部の縱覽を謝絕したり。

讀者諸君、邪推を起す勿れ、棉花の暴騰に加ふるに、戰爭より來れる必然の結果として輸出の杜絕を重ね、未曾有の難境に際せる今日の紡績會社に役員たる者は、實に右の如き返答を敢てせざる可らざる餘儀なき位置に在るなり。余豈は事業者の返答の曖昧なるを尤むる能はさるのみならず、寧ろ渠等に若干の同情を有する者、併ながら之と共に幾千幾百の工男工女が、以

上の如き不得要領の中に葬られつゝあるに思ひ到れば余輩は冷然として、此の工業部落を去る能はざるなり。

* * *

工場を辭して、余は更に工場を圍める附近の村民に接し、親しく工業部落の現狀を質せり、而して工務掛員の語らざる幾多の事實を耳にしたり、然れども本稿の紙幅に限あるを以て、余は爰に唯一事實を掲げて、他は讀者の推察に委せん。即ち工務掛長は、夜業を續け居るといふにも拘はらず、目下夜業を中止しつゝあるといふの一事は、最も余輩をして驚かしめたり。但し未だ大阪府下の紡績工場の如く、職工解傭の事なきは、聊か喜ぶべしと雖も、夜業を廢せる結果として、工場勤務を三日交替にし、即ち各職工は、一日出てゝ二日休みつゝあり、故に例令一日三十錢賃銀を得るといふも、食料を拂ふて僅に三日間に三錢の金錢を剩すのみ、憫れむべきに非ずや。

故に府下有數の工業部落を以て知らるゝ吾妻村も、寂として、燈火の消へたるが如し。基礎の堅固を以て名ある鐘紡工場にして即ち然り、營業資本の不十分なる一般紡績工場の窮迫、蓋し想像するに難からじ、職工の現狀、亦想察するに足るべし。

三　小名木川河岸の小部落

紡績工場の現狀は、概ね前記の如し、併し乍ら府下の紡績工場悉く然りとせは、或は事實に相違せんか、紡績工場と言へば、鐘紡工場を初め、東京紡績も、瓦斯紡績も、毛斯倫紡績も、其の職工は何れも窮迫の位置に在りと雖も、獨り綿布の製織に從へる富士紡績會社は、綿布が陸軍御用品と爲りしの故を以て、其の紡績工女も、從來の如く靜かに勞働に服し居れり、大島町の藍倉及三木屋の裏長屋は、儼然として、世間に戰爭の事を知らざるが如く然り、寔に異例に屬す。加之昨今、張紙を掲げて、百五十名の工女を募集しつゝあり、世は樣々。

小名木川河岸の工業部落は、右の如く多福の位置に在りと雖も、富士紡績と斜めに相對せる砂村の砂糖工場は、新に工場を加へて、昨年來其の精製に忙しかりしが、今春臨時議會に於て、砂糖稅の騰りしより、俄に製造は中止せられ、三四百名の勞役者は、方に業に離れんとするの危急に在り。

あゝ戰爭の爲に販路を失へるより、影響せる職工あり、增稅の爲に苦める砂糖勞役者の如きあり、併しながら、此の勞役者の如きは、之を絹織物工場の職工に

比せは、或は影響の甚きものならん歟。

四　市中繁華の間に彷徨する工場職工

東京市の工場職工中、最も理屈に富み、文明に伴へる工場職工は、其れ印刷工乎、日々の新聞紙を見れは、戰爭雜誌發刊の廣告、眩ろしく、某々二三の印刷工場は、夜業を續けて、繁忙の態を示す。然かも印刷職工の現狀如何と見れは、都下の各書店が出版に緊縮を加へたると、鉛類は拂底を致して、小工場の閉鎖せるより、其の職工の業を失へる者多きに加へて、更に地方の不景氣なるが爲に、地方印刷工の上京する者多きを以て、今や印刷工の巣窟たる煉化地のみにても、二百名以上の失業者ありと稱せらる。

今、試に二十八年以來、本年に至る十年間の印刷工の賃銀額を擧ぐれば

二十八年	三十錢	三十三年	五十五錢
二十九年	四十錢	三十四年	六十錢
三十年	四十五錢	三十五年	六十錢
三十一年	四十五錢	三十六年	六十錢
三十二年	五十錢	三十七年	六十錢

なりとす、是れ植字工の平均賃銀にして、年に物價の騰貴しつゝあるにも拘らず。三十四年來、賃銀の昇らざるは、注目に値す。然かも本年に入りて、失業者を出せるのみならず、偶々業に離れざる者と雖も、開戰以來、著しく其の待遇の異り來りたるは傷むべし。例令は夜業等の場合には、辨當料と稱して若干の金額を得たりしに、今や一般に辨當料の風習消失し、若くは或工場の如き、月末には利益配當の名を以て、勤勉者に若干の賞與を與ふるを例とせるに、今日は利益配當の無くなりしは固より、職工を減じて、休憩時間をさへ節約せる印刷工場もあり、或は喫飯の茶を廢せるもあれは、手洗用の石鹼を廢したるもあり。

五　戰爭に依りて最も繁忙を極むる者

讀者諸君、余輩は以上に於て、戰爭の消極的影響を受けつゝある工場職工の重もなる者を擧げたり、僅に其の一斑を示せるのみ。余は、更に本稿を終るに當り、以上の職工と相反して、戰爭の爲に繁忙を極めつゝある工場職工の二三を擧ぐべし。

曰く製皮職工、曰く靴職工、曰く莫大小職工、曰く馬具職工、曰く製鑵職工、皆是れ戰爭に依りて繁忙を示せる工場職工となす、而して前掲の綿布職工の如

きも、此種の職工にして、煙草職工も、蓋し此種の範圍に屬せん、特に煙草職工の如きは、政府專賣の期、明瞭と爲りしを以て、某々の煙草工場の如き、午前五時といふ早刻に、工場を開きて製造を急ぎつゝあり。

尙、戰爭に依りて繁忙を示せる職工を還こせり、世人の注意を集むる砲兵工廠二万の職工、即ち是れ。

砲兵工廠！、製作品は、外に出てゝは、滿韓の野に運ばれて、國威を示すの用に供せられ、內に在りては幾多の民庶に職業を與へ、生活を補ひつゝあり、其の職工は嘗て勞働組合期成會を起して、勞働運動の先驅を爲し、鐵工組合を作りて、團結の勢力を張れり。斯くの如く、自由の空氣磅礴たるに拘らず、嚴密なる規則の行はるゝ官設工場にして、世間一般の鐵工場とは、大に性質を異にす。好し、其の性質の如何に拘らず、余輩は、何よりも勞働者に職業を與へつゝあるの一事は、愉快に堪へず。

余輩は、今爰に聊珍らしく、砲兵工廠の內部を說かざるべし、小銃、銃包、包具等各職工に種々の特色あり、其賃銀、待遇等の上にも、記すべきこと多しと雖も、今暫らく之を省くべし。唯、一事の、勞働者研究の上に趣味を有する人士に告ぐべき者あり、即ち砲兵工廠賃銀支給法が、一種特別の方法なること是なり。

今より四五年前迄は、砲兵工廠の賃銀支拂法は、世の鐵工場と同じく日給と受負方法とありて、別に夜業世間の例と多く異ることなかりき。然るに二三年來より、砲兵工廠當局者は、一種の賃銀支給法を採用せり。即ち日給金額の外に、受負方法を取れるは從來の如しと雖も、其の受負賃銀に一定の標準を定め、例令其の標準以上に、技術の勝るゝ者あり、若くは其の受負時間に餘裕あるも、標準以上を出でしめざる一種變妙の勞働方法たり。

實例を擧ぐれば、爰に日給四十五錢の仕上職工ありとせん乎、名々掛員より、日々若干の製作品交附せらるを例とす。而して一時間の賃銀額に標準定りあるのみならず、更に其の仕事一箇に付同じく賃銀定り、各ゝ分擔あり、而して實際其成蹟が標準額に上らざる時は其の不足分を標準額より引下げらる、之れ可なり、若し十時間に標準額の製作品を、八時間に仕上げて二時間を餘まし、標準以上の成蹟を示すことあるも、骨折損の草臥儲に終りて已む、是れ今日砲兵工廠に於ける受負方法にして、亦其の賃銀支給法たり、之を以て、技術の勝れたる職工間には、不平の色あり。

因に、四十錢の日給者も、目下夜業を兼ねて十五時間の勞働を常とするを以て、七十錢乃至八十錢の賃銀を得。以上、砲兵工廠職工の概略と爲す。

戰時の勞働者狀態は、好個の研究資料たり、開戰後、日淺くして、未だ勞働者の實情を審にするの機會を得ず。右の如き零碎の事實も讀者の一顧に値せば、余の望足れり、豈敢て多きを期せんや。(四月二十一日夜、記之)

出征軍人家族と救助法

太田宙花

今や其の父母も妻子をも棄てゝ、勇ましく滿韓の地に出征しつゝある人々をして、敢て後顧の憂ひ無からしめんと、其の家族を救助する事に就て、大ひに世間同情の集つたのは誠に喜ぶ可きところである。帝國軍人援護會と云ひ、帝國婦人會と云ひ、奬勵義會と云ひ、兵事義會と云ひ、又徵兵慰勞會と云ひ、其の他何會と云ひ、某會と云ひ、或ひは出征者家族授産場と云ふが如き、皆これ出征軍人の家族に對する救助を目的とする團躰であつて、いづれも出來得る限りの救助を盡しつゝあるが、猶政府にても過日『應召下士卒家族救助令』を公布し、公私相俟つて其の目的を全ふせんを期するのである。乃救助令の施行規則を見るに

第一條　下士卒家族救助令に依り救助を受けんとするときは一家經理の任に在る者若くは之に代る者より住所地地方長官に願出べし

前項願出ありたるときは地方長官は資産の程度勞役の能否扶養義務者其他救護を爲す者の有無並に各種の狀況を調査し其許否を決定すべし

第二條　救助は生業扶助、現品給與、施療、現金給與等の方法に依る

前項救助は適當なる他の施設に委囑し之を行はしむることを得

第三條　救助の額は戰死者の遺族に支給すべき扶助料の最低額を超ゆることを得ず其の支給額の標準等は被救助者の狀況に依り地方長官之を定む

第四條　救助を受くる者自營の途を得若くは他の扶助等を受くるに至りたるときは其狀況に依り救助の程度を減少し又は救助を廢止す

第五條　本令に規定するものを除くの外必要なる事項は地方長官之を定む

とあつて、蓋し其の趣旨は生業扶助を主と爲し、家族に職業を奬勵したもので、勞役に堪へぬ者か扶養義務者の無い場合に給與しやうとするのであるが、其の程度は四月九日內務大臣から各地方長官に內訓したのに依ると、

下士兵卒家族にして男女老幼を問はず既に生活に差支ゆるものに限り左の如く救助するを得

十五歳以上七十歳未滿　一箇月につき金一圓五十錢以內
十五歳未滿七十歳以上　一箇月につき金一圓以內

てある。次に帝國軍人援護會と帝國婦人會の救助法は、普く諸新聞雜誌に幾度か記されたから、今又此處に轉載するにも及ばないが、東京市十五區の救助法は、各自其の方針が異ッて居るやうであるから、これを少しく述べやうと思ふ。

(一)神田區　は昔しから神田ッ子と云ッた丈あッて、其の奬兵義會に寄附する者續々あるので、既に其の金額は三萬五千圓近くになッて居る。救助の標準は、疾病及び不具若しくは孤獨の者には月に五圓以內、又五十以上の父母や妻子には一人につき月に三圓以內、其れから直系親族て自活の出來ぬ者には月に一圓五十錢以內を與へるのであるが、區內に本籍があッて　他區に現住の遺族に對しては、區內居住者の半額を給與する事になッて居る。〔此の半額と云ふのは、寄附の多い此の區の方針としては何うも面白くない。日本橋や淺草のを參酌すると可い。〕

(二)淺草區　も寄附金は既に三萬圓に達して居るが、此の區の救助法は、大人一人につき一日八錢、五歳以下は四錢てあるが、現役にある家族に對しても疾病者ある場合には、今回に於ける出兵遺族の救助のやうに同一の給與をするのである。其れから他區に軍籍のある者ても、去年十二月以前に區內に寄留した者には、其の家族に一時金として三圓以上五圓支給するのてある。

(三)小石川區　も七十ヶ町と云ふ割合には寄附金の額二萬圓を超えて、山の手としては成蹟の可い方てある。救助の方法は、十五歳以上六十歳以下の者へは一日白米四合、六十歳以上十五歳以下へは白米三合て、副食としては一人につき一日五錢以內を支給する規定てあるが、音羽や指ヶ谷町柳町などに窮民が多いのてあるから、現在〔四月中旬〕救助を仰いて居るのは三百人からの遺族てある。

(四)深川區　は二萬三千圓ばかりの寄附金が其の區の報公會に集ッたが、救助を仰ぐ貧困家族は百五十名位の者て、十歳以上が一ヶ月三圓、十歳以下が一圓五十錢を給與するので、疾病者に對しては別に一日三合の施米があるのだ。

(五)日本橋區　は救助を仰ぐ貧困者が他區に比しては少ないのは明な事實てあるが、寄附金額は既に三萬圓に達して居て、救助方法は、遺族の十五歳以上一人に

つき月に四圓、十五歳以下二圓であるが、小兒でも疾病の際は四圓を給與する事である。其れで此の給與は區內居住の者ばかりでなく、他區に寄留する者でも本籍があれば、區內に居住者同樣に與へると云ふは行き渡ッた方法であると思ふ。

(六)麴町區　は華族方の多く居住し居るのであるが、公共事業には冷淡と見えて、華族の寄附は割合に少く、公民會內の恤兵部には未だ一萬五千圓位の寄附金しか無いのである。救助の方法は、大人一人につき三圓の者と二圓の者との二種に分けてあッて、小兒（十歳以下）は其れ等の半額であるが、疾病者ある場合には區內の醫會で無代にて治療するのであるが、現在の救助を仰いで居る者は僅か五十餘名。

(七)本鄕區　は本籍寄留を問はず現住者の遺族には大人が一日十錢、十歳以下が半額と極めてある。寄附金は二萬三千圓內外の兵事義會の集ッたのだが、現在救助を仰いで居るのは二百名內外と云ふ。

(八)赤坂區　は現在の寄附金は一萬圓にならないが、出兵家族の貧困者も少く、五十戶足らずで、其の上極めて貧民と云ふのは無いと云ふ事である。救助方法は、家賃二圓五十錢までは給與するし、米は一人について一日三合、其れに菓子を五錢と見積ッて給與するのであるが、斯う云ふ風に家賃と食べるものとを支拂ッてやるから、其の他は各自に稼いで行くが宜からうと云ふのである。

(九)麻布區　は平生兵士の多く往來する土地だけに、遺族救助の寄附金も既に一萬圓を超えて居る。此處も本鄕同樣本籍寄留を問はず大人一人につき一日十二錢、七歳未滿は其の半額を一班に給與する事になッて居る。居住の華族も麴町のやうに公共事業に冷淡なのとは異ッて、先んじて寄附するとの事だから、僅か五六十名の貧困者に對して、今少しく奮發もすれば出來るとの事だ。

(十)牛込區　の救助法は一戶について月に十圓まで給與するので、他區に比すると稍や漠然たるものだが、寄附金は既に一萬五千圓內外其の區の兵事奬勵會に集ッて居る。現在救助を仰いで居るのは百五六十名もある。

(十一)芝區　の公民は本所同樣、遺族の救助には冷淡だとの事で、寄附金は一萬七千圓ばかりも兵事義會にあるが、一人で一戶を構へる者には一ヶ月三圓の規定であるが、然し通例は其の半額と云ふのであッて、其

の上區内に籍は在ッても他區に寄留する者には一切支給しないのださうな。

(十二)本所區　も公民の多い割には遺族に冷淡の方て、芝同様徴兵慰勞義會に寄附するよりは陸海軍に寄附して、同じく出金するものなら、賞狀でも貰つた方が可いと云ふやうな人が多いと見えて、漸う一萬圓を超えたばかりてあるが、平生から窮民の多い方て、現在百餘名も救助を仰ぐ者があるのてあるから、僅かに五歳以上には一日六錢、五歳以下には三錢を支給するに止まッて居る。

(十三)京橋區　も一萬五千圓位の寄附額はあるが、公民の多い割には寄附申込者の少い方て、救助法は、一人につき一ヶ月三圓乃至六圓の割になッて居るが、之を仰いて居るのは現在八九十名てある。

(十四)下谷區　は其の兵事義會の現在一萬二三千圓寄附が集ッたが、此の會に關係せず、金杉、谷中、及び二長町の三ヶ所は少しの感情の衝突から分離して了ッて、各自其の町内の遺族を救助する事となッて居る。扨て兵事義會の救助法はと云ふと、大人が一日八錢、小兒が三錢、其の間の者が六錢と云ふので、これを十日分づヽ渡すのてあッて、其の他一時金は七圓、五圓、三圓の三種に分けてある。其れから區内に本籍は在ッても他區に寄留して居るものには、其の區に照會の上取計らふ事になッて居るのだ、現在此の會の救護を仰いて居る者は案外少く、百名内外てある。

(十五)四谷區　は公民も少いから從ッて寄附額も少く、漸う六千圓と云ふ都下第一の少額てあるが、此處も救助を仰いて居る者が豫想よりは僅少て、七八十名に過ぎない。救助法は、大人一人につき一ヶ月三圓、十五歳以下が其の半額と云ふ規定になッて居る。

斯く概略は列記して置いたから、讀者は略ぼ市内に於ける救助法の一斑を諒せられたてあらう。此の他各地方の救助法は今悉くこれを知るを得ないが、前記の中ては(1)より(4)までの四區が、寄附金も可成多いし、又救助法も行屆いて居るらしい。

其れから出征者家族授産場と云ふのは、麻布廣尾町百三十七番地にあッて、これは出征軍人の家族で十二三歳以上の女子を收容して、相當の職業を授けやうとするのてある。現在は陸軍省より洗濯物を持ッて來て、其れに從事せしめて賃金を與へて居るが、追ッては洗濯ばかりて無く、種々其の業務を擴張すると云ふ事てある。

何にしても此の家族救助と云ふ事は、社會事業として益〻其の盛んに起る事を希望するのであるが、猶それの足らざるところは前記の救助令があると云ふ事になッて居る。然るに猶如上のもの而已では足れりとせず、或者は此の救助を擧げて國家事業と爲さんとするのである。論者は豫備後備役に在ッて召集さるゝ家族を凡そ十萬と見積り、一家族に一年百圓を與へんとするには、一年に支出千萬圓を要するのであるが、千萬圓の支出は國家事業でなければ到底至難であらうと云ひ、封建の制度を慕ひて「當時武士の戰場に赴くや、征戰中は家族饑ゆる事なく、戰死後は優待令名永く其の享有に歸するのである。死を視る事歸するが如きは邦人の美性ではあるが、導くに方を以てせざれば美性も銷磨するの恐れがあるから、出征者の家族に厚くするのは、獨り征戰の功勞に酬ゆるばかりでは無く、併せて世界に比類なき本邦人の士氣を維持するのである」と云ふのである。

然しながら、兵役と納税とは國民の義務である、其の義務に就くに國家で報酬を必ず拂はねばならぬと云ふ事はないから、此の國家事業として封建の制を考ふるには當らないと思ふ。社會事業として鄰保の相扶くるのは、益す〳〵大ならんは前にも希望する如くであるが、此の論者の如く國家が扶助を大にせん事は、我等の贊成する事は出來ないところである。既に救助令の出でた今日であれば、猶更これ以上を望むは宜しくあるまいでは無いか。終りに臨み被救助者にも一言せねばならぬ事は、如上の如く各種の救助團躰が增すに從ッて、軍人家族なる者が依賴心を生じて業務を怠るの傾きがありはしないかと云ふ事である。其の家族の中には全く老衰したものとか、又は幼い者とか云ふは自治する事も出來まいが、左無き者までが扶助料を賴んで居るやうでは怪しからぬ事と云はねばならぬ。自分の子は國家の爲に戰爭に往ッて、何時戰死するかも知れない身なのだから、も少し兵事會でも自分に盡して與れても宜さゝうだなどと、恰も其の子を國家に賣ッて報酬を求むるやうな事を云ふ不都合の者もありはしないか。よもや斯かる不量見の者も無からうとは信じるのであるが、兎に角依賴心を餘り起さぬやうにして貰ひ度いものである。であるから其の方法や、程度や、其れから範圍などは救助團躰の人々が益〻此れ等に留意して、救助さるゝ者に前述の如き弊風の起らぬやう、切に我等は希望するのである。（をはり）

鹽煎餅

橋本桔梗

繁華の市街には見當らないで、横町だとか裏通だとか、軒低く、壁壞れ、日の目の疎い、寂れて、貧乏神でも潜伏て居さうな、せゝこましい巷に多い。殊に谷中から巣鴨にかけて、所謂東京の場末には此商賣を營む者が夥多敷ある。

それといふのも、資本が餘計かゝらないのと、製造法が簡易なのと、永く貯藏が出來るのと、冗漫がないのと、稅金が課らないのと、種々其原因もあらう。

乍併、之を以て自家の本業とする者は尠ない、殆んど無い、まづ暮らし向が不如意だから何かの足し前にもと思つて、萬荒物を並べる代り、煙草の吸口を卷く代り、寸燐の箱を貼る代り、麻裏の鼻緒を紵け提灯の骨を編む代り、之をしも營むので、瓦煎餅や卷煎餅の職人とは自から別なり、何も鹽煎餅屋たらんと欲して年季を籠めるものもなく、又それが爲めに成功立身したといふ例も聞かない、即ち浮世の惠みを享くること薄き細民が、その日その日の糊口に窮して、一道の活路を開くべく始めた商賣と見たら、蓋し當らずと雖も遠からざる也。

御亭主が人力車を挽く不在中に金棒を曳くばかりが女房の役目でもなからうと、泣く兒を引背負つて、坊やは良い兒だ寢ねしなと、いぶりながら之に從事するもあるべく、孫を工場に通はせて爺さん婆さん、足腰の立つうちは、徒らに茶呑咄で暢氣に暮らすでもあるまいと、昔取つた杵柄で稼ぐのもある。て、原を糺せば甲も乙も丙も皆な素人である、素人が年數を積んで次第に巧者になつたので、懇意づくから二三日辨當を持つて見習の爲め通つたのもあるさうな、其巧者なのは手拭の冠り樣から、菜箸の握つた圖まで、立派な黑人になりすましてゐる。

▲原料●は粳米である、吾人が常食とする飯に炊ぐ米だ、全くの米だ、米も米、粉米や南京米ぢやない。と謂つた所で、眞逆一粒撰にした鮨米にもあらずさ。無論、碌な米でないことは豫め知れ切つた話ではあるが、粉米や南京米とおいてなすつたら、バサ〳〵して粘氣がない、第一餅に舂けない、煎餅にならない、仕方なしに一升買する彼の常食以上の米を用ゐて居る。

但し五等米以下だ、少々お色は黒くつても醤油で打消すから、只その粘力さへあつたら若干でも痩我慢はできる。

鹽煎餅といふからには鹽を加へるのが本式だが、鹽は入れる家と入れない家とあつて思ひ〳〵になつてゐる。又重曹を一と握み打ち込みもする、燒きあげてから、はり〳〵して齒應へが可い、消化の點も幾何か可いに相違ない、重曹は胃の藥だ、けれども多少風味を損ねる、矢張原料は粳に鹽を混ぜた舊來の製法に限るやうだ。又胡麻を加へ、青海苔を入れたものもある。

▲道具● 多寡の知れた鹽煎餅ではあるが、搗いて、乾して、燒いて、袋に入れて賣るといふまでには、種々其道具が要る。

- 碾 石の臼なり柄を回して米を粉に碾くに用ゐるの具
- 臼 底を圓くゑぐりたる普通の木臼なり
- 杵 臼に附屬
- 篩 粉を漉すに用う
- 蒸籠
- 熨板 材樫 縦三尺横四尺
- 熨棒 材樫 麺棒に同じ
- 型 武力製 圓筒形
- 竹筵 籠目に編みたる竹の一枚筵
- 火鉢 煉瓦にて疊みたるもあれど通常の火鉢にて可なり
- 鐵網 針金を龜甲形に編む普通の鐵網なり
- 竹箸 菜箸なり、二本の頭を糸にて繋ぐ
- 竹籠 目笊なり麻紐を附著し天井より火鉢の上に吊す
- 刷毛 醤油を塗るに用ふ

其外、篭、手桶、筵の類も要用の器具であるが、普通の品で辨し得らるゝ限りは煩はしいから、此に掲げぬことゝした。

▲碾● 夜となく晝となく暇さへあれば力竹に縋がつて、石の臼で、ごろ〳〵と碾く。此米を精いて、笊に入れて、ざつと水を切つて、干して置く。水に漬け過ぎて、米がふやけ出したら手がつけられぬ、碾は澁滯る、重量は半以上加はる、その挽き難くさつたらない、早く疲勞て思ふやうに捗取らない。管らない所にも手加減がある。

▲捏● 碾いた米は肌細かに篩ひ、鹽を混ぜ、水を加へ、熨板の上に載せて、鷲攫みに兩手で捏ねる、捏ねて粘氣のある一と塊のものにする。

▲蒸● 捏ねて一と塊物になつたのは蒸籠に入れて、蓋して、籠を釜の上に箝て、湯氣を通じて蒸す。普通の餅は米のまゝ蒸すに、此は碾て捏つて、然る後蒸籠に掛けるといふ順序だ。

▲舂● ふけたら蒸籠から卸して、木臼に移す、木臼に移して舂く、舂て、舂て、舂て、餅のやうに舂きぬくのである。暗らい中から起きて、節ならぬ季ならぬ杵の音に、曉の夢を破ぶらしむること屢次なり。洒落でない、事實、朝飯前の仕事だ。

▲熨● 舂きぬいたら、熨板の上で、再び捏る。すつかり捏ちあげたところで、麪棒を執つて、兩手でクルクル回轉しながら、平べつたく熨して行く。

▲型● 熨したら武力の型を以て、上から押付て、鏡ぬきに切ぬくのである。白米一升に付、徑二寸のが百十枚取れる。

▲干● 型にぬくと始めて煎餅らしい型になる、白い、極薄べつたい、全て紙のやうなものだ、それを一枚宛、竹で編んだ筵に載せて、日あたりの可い所を撰んで、陽に向けて差かけて干す、一枚の筵に百二十枚づゝ干せる。筵の數は五枚十枚、或は、より以上あつて、陽の光の疎い町屋では、差當干場に困る。そこで隣の檐下を借り、表の泥溝板の上にまで件の筵を差掛けて、陳べられるだけ列べる。もしも四下に貸家の札を斜に貼つた空家でもあらうものなら、手の屆く限り犇々と擴げてゐる。

連日、朝日に干して夕日に了ふので、その勢力は並一と通りでない、陽の光は寶だ、資本だ、時に雨勝ちの干し損ねでもしたら、折角の品物に、青く白い星が點く、いふまでもない黴が生へたのだ、だから日和さへ好ければ手拭冠つて早朝から外見も糸瓜も、義理も遠慮もない、施々と干し乾かして居る。

▲燒● 火鉢の上に鐵網を伏せ、天井から紐で竹籠を吊して、其下に坐を占める。干した煎餅を網にかけて、炭火に翳して、竹箸を握り、ひつくりかへし〳〵ほんのり焦がす、焦げた所で、生醤油(或は砂糖を交ゆ)を皿に盛り、小さき刷毛で薄く兩面に塗り、ざつと燒いて、乾かして、上から吊つた竹籠に投げ込み、更に其新たなるを燒く。

天日に晒らしたなりで、幾日も幾日も燒付を怠る時は、自から龜裂が生つて、玷貨、疵物となるから、終日髮も結ばず、之に從事して居る。

▲防濕● 煎餅は永く貯藏ができる、十日や二十日寢かして置いても腐敗るの、蟲がつくの、味が變るのといふ憂ひはない、けれどもその濕氣を帶ぶるや實に著るしい、そこで之を防ぐ爲めに、葉茶屋にある古手の茶壺の瓶を買つて、密に口を封じて置く。さもなくんば彼の銅壺と稱する石油の空鑵の臭氣を拔いて玻璃蓋を箝めた器物に入れて店頭に陳列する、蓋が玻璃張だから中の品物が透いて見えて甚だ躰裁が好い。武力職が變造するので、新らしく造らせるまでもない、古物で幾らも買はれる、從て茶甕を用ゐる家は少なくなつ

た、第一直段が極めて低廉である。鹽煎餅に限らず、駄菓子屋、麵包屋、皆な之を用ゐて重寶してゐる。

▲直段 原料が米であるから、白米の小賣相場に連れて直段に昂低がある。嘗て五升五合の時があつた、その時は一錢に付五枚に賣つた、直徑二寸の品である、當節は六枚或は七枚に賣る。

▲增減 白米と煎餅の關係は唯そればかりでない、白米が暴騰すると鹽煎餅屋の數は次第に減じ、下落すると俄かに殖える。何しろ一錢に四枚や五枚では客足がつかぬからだ。

▲粒々辛苦 何をしたからとて樂な道はないが、多寡の知れた煎餅商だ、半素半黑で遣つて行ける稼業だ。けれども米をつぶして口に入れるまでの間、粒々辛苦、前述の製法であるから、手のかゝること實に夥多しい。彼の團子を丸めて賣るよりも世話が燒ける、一刻と雖も休む暇はない。

▲暖簾 の色は白と極まつてゐるらしい、白金巾に「しほせんべい」と平假名で書く。子供の手蹟か、大人ではなさゝうな、金釘流の惡筆が多い。看板の惡筆は此商賣が或は横綱かも知れぬ。

▲越ケ谷 直徑一尺からの品がある、糸に吊して緣日の飴屋などが之を鬻いでゐる。別に年季を込めて職人があるのだ、素人が始めた煎餅屋には眞似にも這麽づぬけた型はない。それから駄菓子屋だとか麵包屋だとかで、燒きもせず炙りもせずに商ひする家がある、彼の龍閑町もの、駄菓子を卸して歩くのと同じ理屈で、問屋もあれば仲買もある卸屋もある、何でも越ケ谷邊で製造してゐるといふ話だ。

▲免稅 鹽煎餅屋は細民の一で、行商、夜市、緣日商人と共に免稅になつてゐる、店を開いて暖簾を揭げて、祭禮だ、彼岸の配物だ、井戸の附番だと町内の交際をしながら免稅でゐるのは、蓋し煎豆屋と此商賣に限られてある、けれども砂糖をつけると營業稅、市稅、附加稅といふのが、どかくと課つて來る、菓子と見做すのださうだ。

▲男の腕 今川燒なら女の手一ツで物になる、譯もない話だが、鹽煎餅と來ら重い杵を振かぶりつゝ臼で舂ぬかねばならぬ、糞力が要る、男の腕を借ねばならぬ。

▲遠雷 夜晝なしに暇さへあれば、米を粉に舂く、其響四隣に震ふ、棟割長屋で引越蕎麥を配たばかり、未だ一向容子の知ない新顏の耳には、遠雷の鳴はためくかと疑はせる、氣の早い男は蚊屋を吊つて桑原桑原(完)

雜評



大瓦小石

醉美生

▲物を論ずるに今の人ほど狭き見を有するものはあらじ。何事も一筋縄にて纏め取らんとする僻あり。花の蔭にて笑へば直ちに樂天家ぞと稱へ、月の下にて泣けば忽ちに厭世家よと呼ぶ。日暖かにして波靜かなれば、海は愛すべきものと思ひ、風荒れて水聲を放てば、海は恐ろしきものと定む。知らずや、陰晴其姿を改むるは海の眞性にして、哀樂其情を異にするは人間の實相なるを。

▲始めて面會する人の人物を知らんと欲せば、先づ應接の間に通し、凡そ半時間程も待たしめ、靜かに其以す所を垣間見るべし。其人物のみならず、其用向までも悉皆知り得るものぞ。

▲酒飲めぬ人は酒飲む者を愚かなる人よと思ひ、酒飲む人は酒飲まぬ者を話せぬ奴ぞといふ。面白の世や。

▲感化力の大いなる人は何處にか必らず大いなる所あり。善惡邪正を論ずるにはあらず。

▲美なるかな櫻の花。仰げば爛漫として空を蔽ひ、俯すれば朦朧として地に靄あり。塵多き下界の光景を化して、暫し夢甘き天上の歡樂に醉はしむ。吾は三日たりとも櫻の花たらんを望む。

▲妙齢のお嬢御達は、醜き姿の母親などゝゆめ／＼共に歩み給ふべからず。やがてかくなり給ふ行末が思ひやられて思はずもゾッとするものぞ。但し老いさらぼひしお婆さんなどの手を引き給ふは此限にあらず。そはあまりにかけはなれて聯想を逞うする餘地なければなり。

▲神田裏神保町の更紗屋にては、開戰以來變看板の露國更紗とありしを各國更紗と改めたり。然るに其上に書ける英語は未だ改めずに露國更紗とあり。頭かくして尻かくさゞるの滑稽は笑ふの要もなけれど、露の一字を改めたる一事、我國人心の如何を察するに餘りあり。

▲俳優にして予の好むは女寅と源之助。義太夫にて予の崇むるは素行と生駒。

▲友の家に五十圓とかにて買ひし犬あり。食物は人間にもおさ／＼劣らぬ程のものを喰へど、終日箱の中に入りて鎖にて繋がれ、流しを求食り歩く野良犬を羨まし相に眺め居たり。莊子が盛んに無用の用を辯ぜしも、こゝらあたりより割り出せしものならんか。

▲死を怖れざらんとするには、死を思はざるに若かず。死を思はざらんとするには、常に心を一物に注ぐに若かず。一向專念事に從ふ。奈何ぞ死の惑の入り來る餘地あるべき。

▲浮世を、歡樂の園と買ひ被ればこそ様々の不平はあれ。たゞ一つの大いなる經驗場ぞとあきらむればなか／＼に旨味あるものぞ。

▲いと幼き時に盲となれる人あり。長じて後はたゞ僅かに日の眩きと、月の清きと、空の青きと、花の赤きとを知るのみにて其外の事は一切忘れ果てつ。時々思ひ起しては昔の如く眼明きたし、人の身羨しと悶ゆることもあれど又時には其記憶に殘れる色を胸に浮べて　そゞろ浮き立つこともなきにあらず。然るにこゝに生れしより盲なる一人の男ありて日も、月も、空も、花も全く知る所なければ、人の身を羨む時もなけれ

ど、又自ら楽しむ時も絶えてなし、此二人の何れが幸薄くして、何れが悪細かるべき。この問をえ解かずんば、世にはわからぬことの多かるぞうたてき。

▲人の考は十人十色なり。脚本などに書きある三人上戸といふもの、些か誇張の趣もあれど、確かに世態を寫せるものぞ。

▲執着する程暫らく物に遂ひ、煩悶する程稍ゝ事に溺れよ。而して後始めて事物の眞相を悟了せん。

新柳樽

久良岐

軍國の花見醉つても醉はぬ顔

とある花蔭て正宗をグイと飲み

御時節柄と遠慮する中花がちり

白旗を樹てよ我これに川柳を題せん

ベランメー此ロシヤメとスグ撲ぐり

飛鳥井雅忠實は平民山田德二

見露はされしかチエー殘念なと德二

あらよくってよを先立て丶海老茶來る

田舍海老茶綿ネルなどをパクと見せ

品のよい式部自轉車からヒラリ降り

田舍式部風呂に一丁還入らんバイ

哥薩克は曲馬の一手やッて逃げ

マカロフは青菜に鹽を洗濯し

四海を呑み損ねた北魚大もがき

厄介な湖水だとロシヤこぼしぬき

遠路の所御苦勞にも敗に來る

黒鳩は目斗りピカリ〳〵させ

三日坊

四度び目は武夫地獄でヤア杉野

秋山は味方の犬に見はなされ

仁川で伊藤の持病さし起り

山水子

花見時櫻の御所で落を取り

日蓮辻雪隠とても云ひそうな

戰時の脚本作者も軍服つけた人

珍妙集

探穴生

●此の題目の下に、笑語老人の所謂牛のよだれや、笑一郎氏の滴々錄の如き、自然的の滑稽を集めやうと思ふ。故意的に作り上げたる滑稽と異りて、これは其不豫想のものであるだけ特種の可笑味が含まれて居るやうてある。然しながら、此種の滑稽は、決して其發展を希望すべきも

のではない。此にかゝぐる事にしたものも、依つて以て、かゝる不注意の減少せん事を、望むに外ならぬのである。

●三月の始め、梅を大森に探つた時に、其途上採り得たる珍數事實を、此に先づ御披露しやうと思ふ。

●芝區本芝のペンギ屋間宮といふ塗物博士の店頭に、ぶら下れる公告札に曰く、

小僧入用十四五才位十億万人

北グリーンランドのエスキモより、南ニユージーランドのマオリに至るまで、地球上に於ける、あらゆる人種の小僧を募集しても、十億万人を得るのは、餘程の困難であらうと思ふ。

●四十七士の墓所として、有名なる泉岳寺にある、上野介の首級が洗はれたりと傳へらるゝ、古井の立石に曰く、

首あら井手足洗ふべからず

まさかに、かゝる不潔なる水にて、好んでくびを洗ふ人は、あるまじけれど。

●南品川三丁目の寄席の行燈に、筆太に記して曰く、

群談席

其下に、出演者の姓名を、あまた記しあればとて、群談といふ譯にも行くまい。

●品川遊廓中の或軒に、標札と並べて貼附されたる紙に、

良風會員

成程よきとあしきとは、絶對的の者ではない事がわかる。こは、湯島天神町の檢番に、

陸軍風紀衛兵宿所

と大書されたのと、好一對の可笑味である。

●品川の町を離れ、青海原を眺めつゝ、街道を進めば、程なく掛茶屋あり。其障子に曰く、

自轉車休憩所

自轉車も、道路を乘り回されては、休息せではつらかるべしと、考へたものらしい。此屋の主人は、遠からず、非動物虐待防止會でも組織さるるであらう。

●本門寺參詣の道筋にて新井宿あたりであつたか、路次の入口に掛けられたる札に曰く、

安腹もみりようじ

按摩が盲人ならば、非難する事も出來まい。

●余が休息せる茶店の老婆、種々御世辭をふり撒きたる末、曰く、

昨日の號外を御覽に入れましやうか

と、成程此あたりは、新聞の配達が、餘程遅れると見える。





讀者之文壇

音樂に於ける故マクス、ミュラー

安藤正次

左に、巍巖峨々たる高峯を仰ぎつゝ辿り行く崎嶇たる人生の行路も、右に、天空海濶の風光を専にする事を得ば、誰か、其の辛勞に安慰を得さるものぞ。松柏森森たる幽林の裡、そこに香蘭のゆかしきを見出でたらむ時、げに、人生は單調なるべきものにあらずとは、何人の胸裡にも浮出る思想ならずや。人生れて此の宇宙に在り。山の美、水の麗、花の艶、鳥の妍、是等は明に吾人の享受すべき天與の至美なり。吾人生れて此の社會にあり。永き歷史の發達を經て幾多天才の貢獻により現代に傳へられたる藝術は實に吾人の誇たるべきものにして、吾人は、宜しく充分なる感謝を拂ひて、此等先人の恩賚の鑑賞に忠實なるべきと共に、亦實に益之を發達せしめて以て後昆に傳ふべき義務を有するものにあらずや。

吾人は、彼の、一意專心、敢て他を顧みずして其の業に努め、孜々として倦むことなき學者、事業家、政治家を尊重する者なり。希臘以來、幾多の哲人學者の傳記を飾れる所謂逸事奇行は、亦以て追懷の好個の紀念として常に吾人の記憶に新なるものなり。然れども、世は替り、星は移りて、今は二十世紀に屬す。今は、天文を案しつゝ水に陷り、普佛戰爭の周圍に熾なるを知らず顏に、考察に耽るか如き奇行を再演すべき時にあらず。物質界に於て、動物が、其の高等の階級に屬する者程、益銳敏なる交感神經を有し、殊に、人類に於て甚しきが如く、精神界に於ても、人類の發達、社會の進歩に伴ひて、人の腦力は益多方面に活動すべき可能性を有するに至る。此の腦力を圓滿に發展せしめ

て後にこそ、始めて、人は此の世に生れ甲斐ありとはいふべけれ。然れども、吾人は吾人が接觸する凡ての事物、あらゆる方面に向ひて、之を發展せしめよといふものにあらず。園丁が、其の樹木の性質、園地の如何によりて、枝條の剪除を行ふが如く、其の何れに發展せしむべきかの選擇は、極めて重要なるものなり。高尙なる、典雅なる方面に、圓滿なる趣味を有する事は、實に、人格の偉大と崇高とを加ふ。彼の、人生に對して偏狹なる思想を有し、自、其の腦力の發達をして不具ならしむるが如きは、寧あはれむべき哉。十九世紀の末に於て、すべての社會的事業か益分業に傾き學藝の研究が愈專問的部分的となれるは事實なり。然れども、此の分業や、此の專問的部分的研究や、決して、普遍的統一的の性質を超絕したるものにあらず。普遍と統一とは常に其等の基礎たるものなり。此は矛盾の如くにして矛盾ならず。樵夫が、脊に負へる薪に折りそへて里に下れる花一枝は、既に、此の矛盾にして矛盾にあらざる眞理の消息を傳ふ。

吾人の筆は、本題を外にしてあまりに理義に奔りたり遮莫、吾人が、故マクス、ミュラーの生涯にあらはれたる敬慕すべき一事實を此に記述せむと思立つに至りしは、實に如上の意見を有するによる。

碩學マクス、ミュラーの、言語學、梵語學、神話學、宗教學に於ける偉大なる貢獻は、吾人の贅言を要せざる所なるか、此の碩學の、さはかり廣く深かりし學術研鑽の餘暇、其の至樂として心をやりしは、實に音樂なりき。吾人は、昨千九百二年ミュラー夫人によりて公にせられたる「マクス、ミュラー教授の生涯及書簡」二卷を讀みて、こゝかしこにあらはれたる音樂に對する故碩學の趣味を窺ひ得て、益其の偉と大とを認め得たり。

デッサウ侯家の圖書館長にして且つ敍情詩人として名ありしウヰルヘルム、ミュラーの子、フリードリッヒ、マクス、ミュラーの、一千八百二十五年十二月六日の誕生より、一千九百年十月二十七日オックスフォードのホーリーウエルに永眠するまでの彼の傳記の中に於て、其の幼少時代の事實は、頗他の諸偉人のそれと趣を異にせり。彼の幼少時代の多くは、惡戲跳梁の記事を以て充されずして、却りて、音樂に關する事項其の重要なるものたり。

マクス、ミュラーの音樂的訓練は、彼が、未、學校に上らざりし程の夙き時代に始められたりきといふ。蓋、

彼の隣家に一青年音樂家棲めりしが、此の者によりて彼は、其の音樂の初歩の敎授をうけたりしなり。此の青年音樂家と彼とは、互に垣を隔てゝ、相知り、相親しむに至りしものなるが、音樂家は、此の紅顏の美少年が、異に、音樂を愛する事を知り、日々、垣越に之を抱きあげて、音樂を敎ふるを事とせしき。嗚呼、是、何等絶好の畫題ぞや。かくの如き事數月。兩人共深く之を秘して人に語らざりしが、或日、數人の友の前に立ちて、其の初奏を試みたる事によりて、人々は、始めて、此の少年の、いつしか、かゝる技能を學び得たる事を驚きぬ。今日も猶ベートーヴェンのソナタの平易なるものに、自、その名と修得の日時とを記したる儘のものゝ、彼の家に傳はるを見るに、彼が、始めて音樂に指を染めたるは、其の六歳の時なりしなり。かくて、年齒既に十四に及びては、其の演奏甚巧にしてデッサウ及ライプチッヒ等に開かれたる演奏會にも臨み、又、會ゝ家にあるや、音樂家として聞えたるデッサウ侯爵夫人に招かれて、ピアノの伴奏を試みし事も多かりき。

かくて、此の少年音樂家の名聲は、早くも喧傳せられしかば、デッサウにて開かれたる如何なるよき音樂會にも招待せられざる事無りき。而して、此に、又、彼の有名なるメンデルソーンに關して、興味ある逸話の傳へらるゝあり。即、老メンデルソーンがデッサウに來れる時は、マクス、ミュラーの漸く六歳に達せる時なりしが、此の大音樂家は、此の可憐花の如き好少年を伴ひて、該市の大會堂に趣き、おのれが膝の上に之を擁して、自、踏板(ペダル)をふみつゝ、彼をして鍵盤(キイ)を彈せしめたりきといふ。あはれ、此の時の景、此の時の情、いかばかりかめでたかりけむ。かばかりの稚兒も此の世にありけるものかとは、當時の會衆の心に、ふかく刻まれたる感なりしならむ。

此の如くにして、彼の少年時代は始まれり。吾人は、若、彼が其の當初の嗜好のまゝに、其の生涯の行動を定めたりしならむには、吾人は、彼に於て、近世罕覯の一大音樂家を得たりし事蓋疑を容れず。然れども、此の如くむば、一方に於て、梵語學者宗敎學者としての彼を失ふことの痛苦を感ずる吾人は、未、俄に、その得失禍福を斷言し得べからざるなり。

此れ、吾人にとりては興味ありと見らるゝ方向の撰擇に於て、彼は、毫も、躊躇すること無かりき。その逝去後久しからずしてあらはれたる彼の自傳、若くは、

前にあげたる彼の未亡人の著述によりて見るに、その方針の撰擇に就ては、音樂は全く問題外のものなりきかくて、音樂は、彼の生涯を通して、光輝ある餘技となりぬ。悲に於ての慰め、愁に於ての力、煩ひに於ての光明として、彼はいかなる多忙の時期に於ても、之を捨てざりき。後年、オックスフォードなるノルハムガーデンの靜廬の窓帷を洩るゝ微妙の樂音は、幾多の人の胸憶に、限りなき感興を與へたりけむ。その邸宅の窓を繞れる常綠葉の色、今も猶ありし昔にかはらざるべし。然も其の妙音復聞く可らず。嗚呼。

彼は、英國に於て、常に同志を集めて、盛に音樂の會合をも催したりしが、彼は、殊に、メンデルソーンの作曲をよろこびて奏したりき。彼は、此の事に關して其の自叙傳に於て、當時、猶、メンデルソーンの音樂は、舊派の或者によりては輕蔑せられし事を述べて曰はく。

（上略）ニユーカッヂの老オルガン家たるドクトルエルウェスは、「賞嘆の歌」の曲を聽き居たりしが進み來りて、余に感謝の意を表するかと思ひきや眞面目なる且稍粗暴なる非難を以て、余が、此の如き散慢なる音樂をオックスフォードに輸入せる事を責めたり。云々。

此の如く、彼は、常に、音樂に心を寄することを止めず、熱心なる學術研鑽の間に、綽々たる餘裕を以て、之を樂しみしかは、有名なる音樂家の、彼の家に到れるもの尠からず。試に、一千八百八十六年の訪問錄を見るに、ブルーメンタール、エミールサウエル、ジョアチム、フリードレンデル等を認めるべし。殊に、フリードレンデルのシュベルト歌集には、マクス、ミュラー自其の序を加へたり。

彼の、多くの書簡中にも、音樂に關せるもの多し。今其の二三を擧げて示さむとす。

一千八百五十四年十一月十一日、即ち、彼が三十一歲の時、オックスフォードよりその母に宛てたる書狀の一節に曰はく、

人の音樂に對しての嗜好愉悦は、常に永續するものと存ぜられ候。小生は、此の舊技の爲に、たゞに、樂しき興趣を得、且、之が爲に、生面の地に於て、人の知を得る事を得たるのみにはあらず、音樂が、不知不識の間に與ふる感化によりて、心じらひもおのづから幸福なることを得、音樂に趣味を有せざる人に於て屢々認めらるゝ如き粗野の

缺點を有することを免れ申候。歌ふこと能はざる人は叫ぶこと能はざる人とも申すべく不都合極まることにてされど常に叫ぶことの必要ならざる如く亦常に歌ふべき必要も生ぜざるべく候若吾人が爲し得べき事をだに知らばそれにて充分なるべく候

「若吾人が爲し得べきことをだに知らはそれにて足る」とは、以て、當時の彼が、音樂に對する意見を知るに足るべし。此の時に當つて、彼は、非常の精勵を以て彼の專門事業に盡瘁したりしなり。此の書簡の始に於て、喝破して曰はく「人生れて既に三十一、時間に於て大に節約する所無るべからず候」。

然も、彼は、人々の爲に音樂の指導者となりて大に努めたる事多し。一千八百五十七年五月廿四日、彼の母に與へたる書狀の一條に曰はく、

小子等は、復、音樂會を相始め、ジェルフ孃等始め、多くの貴女等相集り申候が、いづれも好く歌ひ申候。昨今は、メンデルソーンのローブゲザングを學び居り候へども、二十の聲を保ちて之を指導しゆくは頗る容易ならざる困難に御座候。小子は、老裁縫師の如く、之を縫合せさるべからず。

始休日をも有する能はざる有樣に御座候。云々。

一千八百五十八年三月七日、彼が、一友に與へたる書は、全篇、音樂の力を論じ、頗詩的興趣に富む。遒勁なる文致は、吾人譯筆の到底及ぶ所にあらねど、此によりて、聊、彼の思想の一端を伺ふに足らむ。

ベートーベンの「七部合奏」と共に御おくり下されし候御書簡は、小生にとりて、全く音樂に御座候ひき。時間といひ空間といひ地といひ人生といひ人々の嚴肅なる實在とよぶ所のもの果して何ぞ。小生は、貴兄の手翰を拜讀しつゝありし間は、身は、全く、貴兄の室中の靜なる一隅に坐し居り申候。――廣き枝をさしかさして、貴兄及貴兄の家に祝福の影をやどせる彼のシダー樹を眺めつゝ、小生は、一々の節調に耳傾け、而して、少時、未だ六歲の頃、醉へるが如く、恍として、同じき不思議なる諧調に聽き惚れたりし幸福なる往時を追憶致し申候。當時、小生は、只、母が、美なりと申しゝ故に、之を然りと信ぜしに過ぎす候ひしが猶も、その後、常に之を信じ、今も猶變り申さず候。然して、此は、そも、何故ぞ。誰か、それ等諸音の意義を吾人に闡明し得るものぞ。而して、

此等の音は、いづれより來りていづくにか行く。小生、少時、小生の老音樂教師に向ひて、師は、誰より音樂を學び給へりやと問ひ申しゝに、師はやはり、その師より學びたりと答へ給ひき。よりて、更に、その師は、誰に學びたりやと問ひしに師は、此の問の要領を得給はざるやうなりしか、小生が、少年特有の、信じて疑はざる風(Kindliche Authorität)にて、自分は、神が、最初の音樂教師なりしに相違なしと確信する旨を語り候に及びて師は、感じよろこびたりし事を記憶致し居り候。只今、小生は、小生が、將に、ライプチヒの學校に趣かむとせる際、即、一千八百三十六年に、師と袂を分つにあたりて、師が、寫眞帳に書きつけておくられたりし句は、下の如きものかと存ぜられ候。即「音樂は、遠き調和せる世の反響にして吾人の中なる天使の徽號なり。若、言葉にして、其の力を失ひ、眼に涙の枯れなむ時、吾人の默々たる心が、吾人の胸の堡障のかげに淋しく潛める時、是等の者が、依りて以て、互に相呼びかはして、その相隔たれる嘆息を交へ得べきものは、音樂にあらずして何ぞや」。といふ文句に御座候。師は、好老人にて候ひき。小生は、師が、自、これらの句を書き得たりしか如何を存じ申さず候へども、今、之を書きつゝ考ふるに、此は、ジュアンパウルより引きしに相違なしと存ぜられ候。然し兎に角、誰にても、此等の句を書きし人は、眞の音樂家たるに相違なく候。詩と貧とは、相似たり。眞の詩人、眞に貧なるものは、自苦しめる事及、自望想所を人に示すを愧づるものに御座候へども音樂にありては、然らず。如何なる詩的感情にも耽ることを耻づる人をも、不知のもの、無限のもの、美なるもの、神なるものか、一度音樂の音によりて、其の頑々たる心に訴ふるあらむか、よく、之を和らげて、その精神をば全く之に傾注せしむる事あるは、往々見る所にて御座候。あらゆる人に於て、現在的の冷酷なる人に於ても、何處にかは、彼が故き朋友、故き思想、故き感情に會して幸福を感じ、平和を感ずる山間、茅屋の如きものの存ずる事に御座候。然も、此等のものは、直接客室に於て面する事あらむには、彼は必、宛も曾て會したる事無きものゝ如く、傲然たる嘲笑を加へて、之を斥くるに相違なきものに候。

亂雜の文意御容赦被下度候、貴兄の如く、小生も亦、此に、音樂あり。そは、彼方の室にて奏せられつゝあるベートーベンの「七部合奏」に外ならずと申さゞるを得ず候。早々。

吾人は、人生の趣味の圓滿なる發達を論じ、各自、日常專問の業務以外に、高尙なる餘技を有すべきことを主張し、マクス、ミュラーが、少時に於ける音樂の異才を述べ、後年、彼が、餘技として、如何に音樂を見たるかを述べたり。庶幾くは、少しく、此の故碩學の一面を世に介することを得、併せて、吾人の抱懷の一端を告げ得たらむか。(完)

(明治三十七年三月稿)

短文

●兵士の老父母

▲此題を見てそゞろに、眉山の作、野人が憶ひ出した、今度の日露戰爭にもかゝる幾多の悲劇が操り返へさるゝて有らふか。(小說通)

●杖とも柱とも賴み、後々の事までも只こればかりを力にしてる一人の悴に別かれるのは、外に賴りのない此年寄共に取ては、悲しくも、辛らくも、心細くも、又別れたくもないが、しかしそこは國の爲め君の爲めだ、何の、何の未練が……。(老父母)

▲悴から愈戰地へ向たと云ふて來たが偖々困た事だ、此貧乏世帶に若しも悴の身の上に万一の事ても有たらそれこそ大變、是から後々はどうして暮らさう、なにしろ對手は中々强いそふだからほんとに心配でならないて、一體我々の難儀もかまはずに戰爭なんかやり出した御上が悪いんだ、どうせ戰爭なんか敗けてもよいが、命有ての物種だ、どうか悴が無事息災て戻て來る樣に、どうぞ神樣、どうぞ御願ひ申します、どうぞどうぞ、アーメン。(露兵の)

▲六十になる父は、僕が召集令に接した晩、兼れて秘藏の白鞘の短刀を無言て手づから渡して吳れた、僕も無言のまゝ押し戴いて、親子互にじつと目を見合はしたが、其時の父の目色は明らかに……、然り僕は父の心を推し得ぬ程愚かてはない、屹度……。(後備兵)

●隣りの隱居殿は、豫備少尉の次男が召集されてから、今迄ろくく讀んだ事もない新聞を三種までも取り、號外は必ず缺かさずに買ひ、朝晩其話ばかりして居ろ、親心だれ。(國民兵)

▲父ちゃんが戰爭へ行てからね、內の御祖母さんが、毎朝神樣へ御燈明を上げて拜んでるのよ、それにあたいが御汁がさめましから、早く御飯を喰べましようと御呼びに行くまて、何時までも何時までも拜がんて居るのよ、可笑しな御祖母さんね。(花ちゃん)

●拙者は此頃戰爭の御陰て大に景氣が善う御座るて、實際あてにはならないとは知りながら、そこはそれ人情の弱點て、從軍した悴や孫の消息安否を知りたいと、拙者の所へ押し掛ける、御爺さん御婆さんは、それあ澤山な者てし、それが下々の人ばかりてなく、立派な方々まて入らしやるてし、子を思ふ親の心は誰ても變りませんね、御陰て柳原物だが羽織も高帽も買た次第て、どうか此上にも御爺さん御婆さんが餘計に成て吳れば善いと、願てる次第て御座るて、オホン。(占者)

▲父は男で母は女だ、男女二人揃てるから夫婦、間に子が出來て適齡に成て兵士、それの親だから兵士の父母、年寄てるから老父母だ、なんだ下だらない。　（短氣）

●成程兵士も人だから親があるれ、即ち父母だ、それが老と云ふ形容まであるから、時節柄こんな題は人目をひき易いれ、記者先生いや中々以て抜目ないて。　（悪口生）

▲旦那、戰爭はどんな、あんばいて御座ります、悴の居りまする、〇〇隊は、モーあちらへ、上陸したんてしようか、陸戰は、まだ初まりませぬか、今度のは、ドーセ早くは、濟みますまいなあ、なとゝ心配顏て、新聞の話を、毎日かたみがはりに、聞きに來るのは、今度豫備役て召集せられた、三軒向ふの、兵作が、老夫婦てある。

●毎度御尋れ下さいまして難有ー……ドーセ悴は御國の爲に御奉公申すのてすから打ち死するのは覺悟して居りますし私等も御承知の老いほれてすからとても此世て對面は出來ますまいが、和尚樣の御説教を聞かして貰ふと後生さへ願て置けば假令此世ては遠く離れて死なふとも御淨土樣て必ず親子名乘りが出來ると、おつしやるから其れを樂みに勢出して御念佛申して居ります、ハイまゝにならぬか浮世の習ひて御座ります、南無阿彌陀佛〳〵と平氣な挨拶をして居たのは村一番の難有屋の杢兵衛老爺の挨拶てあつた。

▲皇軍の大勝利我が子の無事を祈らん爲に好きな酒食を斷つて鎭守の神へ日參して居る老夫婦が僕の村にあるのだ、諸君は老いぼれの迷信なあと必ず笑はるゝてあろーが、僕はむしろ其情が察してやつて貰いたいのだ。

●我子の出征に臨んで家に傳はる日本刀を授くる老翁、神佛の守り札を手渡す老媼。

▲汝が祖先も武士なるぞ。
命の續かん限りには。
敵の頭を斬りまくり。
死んで御國に報へとは。
愛兒が出征に臨みての。
老父が勵辭。
隨分躰をいたはりて。
人に後れず功名し。
無事息災て歸れとは。
老母が最後の慈愛て
せき來る淚共にかくしつゝ
（近江琶湖舟）

▲日本人の強いのは其の祖先に三浦三代記の中に在る老母のやうなのが居つたからだ。

▲僕は兵士の老父母を記すに當り、「杉野兵曹長」のお父さんのことを記さう。お父さんは島村平兵衛といつて最早六十三。芝區新櫻田町十七新し橋際に俥車を營業にして居る。お母さんは阿竹といつて四十七。兵曹長には繼母なさうだ。本姓は杉野であるが、故あつて島村を名乘つて居る。お父さんは平生兵曹が廣瀨中佐の知遇に預つて居るのを無上に難有がつて二人が横須賀に居る時分には始終中佐の處に訪れて、厚く禮を言つて其の度毎に物新らしく行末の事どもを賴んで居つた。壯烈無比の猛者を何時までも幼兒の如くに思ふのは是れぞ年老いた親心の常てあらう。されば此度二人が戰死の報に接した時の如きは御母と若い衆とを面前に集へて『みんな悅んて呉れ、實に名譽の事だ。親の口から賞めるも可笑しいが、天晴れ勇ましい最期と云ふものだ、が併し何とも申上げやうのな

いのは腐瀬様だ、二度までも』と語りさして『閉塞』といふ語は口に上らず、潸然として暫し涙にかき昏れ、また並居る若い衆も感極つて貰ひ涙に袖を濕したのであつた。（之れは新聞に書いてあつた事）

▲今日僕はお湯に行つたら三助が肩を流し〳〵、戰爭は何うです、二三月頃は皆な大騷ぎをして居つたが、今頃は誰れも飽いてしまつて噂をしませぬ。といふから、お前は可い體だが何うだ兵隊の方はといふと。私は去年の暮れに除隊になりました、野戰砲兵で鴻の臺です。また其の內に出るでせう。私は四人兄弟、兄が二人で弟が一人、今三人共兵隊に出て、二人はもう彼地に渡つて居ります。所は煉馬で近うございますが、親爺がもう五十八か九かで一町から田を作つて居るものですから、コボしてゐます。

（實驗談）

以上礫川茶人

▲おいらの三太郎はア、とう〳〵昨日戰爭にとられて行きましたがれ、行かれー中は早く行きてい〳〵て毎日饒舌つて居つたけがれ、昨日親父の眠て居る床の側でもう二三ケ月も經たて病氣の癒るのを見てから行きていてホロリと泣いて居たので、おらア…フム（隣りのばーやの談話）

▲こういふと何だか國の事もなにも思はない樣でお耻しい事で御座いますが、アレが戰に行つたら、どうも戰といふもの程世の中に厭なものがない樣な氣がして、每日神佛に願ふのも早く戰がやめになる樣にと思ふて居るので御座います、然しまさか人樣にその樣な事も申されませんからお目出度いといはるれば有難うございますといふては居るものゝ、ほんとうに戰はいやなもので御座いますれ、然しこりや、貴君ぎりの話てすよ。

（僕の友人の親父談）

以上二件筆記生

▲忠臣藏や伊賀越あたりの事を考へて見ると今の戰爭などは樂なもので內の仙三の事なども餘り思はなくともよいと思ひますよ。

「芝居好老人」

▲僕の隣りの息子が戰爭に出たもので、其兩親は每朝僕の二階に登つて來て新聞を聞くのを唯一の樂しみ、終日の課業として居る。親の心はこうしたものかと思うて僕は家にやる手紙の數が增えたよ。

「牛込の學生」

課題

▲風呂（五月十八日）

▲看護婦（六月十八日）

新刊批評

▲清澤先生信仰座談

安藤州一著

浩々堂發兌

「精神界」を發行して奥ゆかしさ文字に高雅なる思想を行られたる清澤先生が、著者安藤氏と語られたる宗教談を集められたるものにして、其發行の主旨は、先生が安藤氏の懊惱の雲を掃うて、安慰の光を與へられし喜びを弘く衆に頒たんとするにあり。叙述の體は大抵、當時の四邊の光景を記し、而して後先生との問答に及べるものにして、プラトンのダイアローグ的に書かれたり。書中の記事一々先生の人物を親ふべき材料に充ちたりと雖も、惣じいに文章語を以て書かれたるの弊は、先生の語氣を充分にあらはし居らざるは些か遺憾ならずとせず。斯の如き談話的のもの

は彼の氷川清話などの如く言文一致にて其口調をも寫す方、遙かによく人物を活躍せしめ、感銘を深むるものなりと信ず。然れども少しく精神界の事に志あるものは宜く斯の如き書によりて清水の一掬を飲まざるべからず。(定價十五錢)

▲外人より觀たる日露戰爭

河島紫川編
園谷書店

外國の新聞雜誌に出でたるを譯したるもの即ち我中央公論の海外新潮的のものを編纂したるものにして時節柄尤も便利なるものといふべし。海外の形勢に志あるもの此書によりて益する所蓋し少々にあらざるべし(定價二十錢)

▲新法令、附軍國議會史

博文館發兌

太陽の臨時增刊にして卷首には我國名士の寫眞版數葉を附し、新法令を載せ、本年に於ける議會の經過を詳記せり。本年の議會は殆んど滿場一致、何の波瀾もなく決議せらしなれば、花々しき論戰を讀まんことを好む人にとりては寧ろ興味薄しとすべきも區々たる末節に拘泥せざりしは我國民の奉公の念厚きを見るべく。寧ろ心ある人の喜悅禁ず能はざる所なり。此間にありて少しく曲折あらしめしは彼の秋山問題にして、官報又は新聞によつて讀まざる人は之によつて多少の感慨を起さゞるを得ざるべし。(定價三十錢)

▲教育研究第一號

大日本圖書株式會社發行

初等教育研究會に發行したるものにして、學說と實施と兩々相待ちて進まざれば教育界の事舉らざるを慨し、發行せられたるなりといふ。其內容は全く學術的の事のみにして其道に與かる人の指導となること少からざるべしと雖も、發刊の辭の如きは餘りに劃多き字のみを用ひゴツ／＼として讀み難く、讀んで意を了し難きは此種の雜誌に於て尤も釣合の取れぬ憾ありといふべし。(定價廿錢)



戰事彙報

第三

戰事彙報

●名譽ある第二回旅順港閉塞決死隊員 第二回の閉塞隊員募集に就ては司令艇艦にて大に苦心せしが前回の決死隊員恐く懇願せしにも拘らず將校以上は多く前回の通りとし（歐洲諸國にては決死隊の如き危險の行動に列したる者を再演せしめず）下士卒以下を新たに募りたる全隊の人名は左の如し

▲第一閉塞隊

千代丸指揮官海軍中佐 有馬良橋
同中尉 島崎保藏
同大機關士 山賀大造
同一等水兵 林門平 輕傷
同一等水兵 下田與之助
同 三上勘次郎 輕傷
同一等機關兵曹 佐藤吉末
同 藤山新吾
同三等機關兵曹 久永市之助 負傷後死亡
同一等機關兵 阿部宗治
同 奥村又次郎
同 河瀨信三郎
同二等機關兵 有馬八重一
同 折戸直次郎
同 山岡宗郎
同 臼井與作
同 神永次郎
同 石井銀藏

▲第二閉塞隊

福井丸指揮官海軍中佐 廣瀬武夫 戰死
同大機關士 栗田富太郎 輕傷
同兵曹長 杉野孫七 戰死
一等兵曹 飯村仲之助
同二等信號兵曹 菅波政治 戰死
同一等水兵 平野一
同二等兵曹 松下軍吉
同三等機關兵曹 平野松三郎
同一等機關兵 坂井周敬
同 中條正惟
同 石井友一
同 小林吉太郎 輕傷
同二等機關兵 塚本逵吉 重傷
同 堀澤海藏
同 小池幸三郎 輕傷
同 山本牛二 輕傷
同 楠鐵三
同 江畑小次郎 輕傷

△第三閉塞隊

彌彦丸指揮官海軍大尉 齋藤七太郎 輕傷
同中尉 森初次
同中機關士 大石親德
同一等兵曹 村上卯吉
同一等水兵 德田宗一郎
同三等水兵 畑元富造
同三等機關兵曹 逗子熊太郎
同 伊東三治
同一等機關兵 小出由太郎
同 木下清藏
同 小西萬吉
同 濱崎茂三
同二等機關兵 富田芳次郎
同 古賀重雄
同 平野與太郎
同 近本太吉

▲第四閉塞隊

米山丸指揮官海軍大尉 正木義太
同中尉 島田初藏
同少機關士 杉政人
同二等機關兵曹 鹽谷巳之助
同二等信號兵曹 船田泰一
同三等兵曹 赤杉寅太郎
同二等機關兵曹 鈴川太郎右衞門
同 土屋五郎吉
同一等機關兵 河野幸次郎
同 溝淵平太郎

同　恩品　逸三
同　後藤　叛
同　福島　熊喜
同二等機關兵　中村義次郎
同　林　豐一
同　芳賀　力藏
計　六十八名

輕傷

●第二回閉塞隊士卒の請願書

旅順第二回閉塞に對し各艦の士卒が挺身選拔の榮を受けんと各々其長官に向つて左記の請願書を提出せり（原文の儘）

我大日本帝國軍人として上元帥の下一等卒なる事を論ぜず其忠節報恩に於ては決して輕重なる事無らん不肖不吉等身を軍隊に投じて以來殷渥なる御勅諭を拜讀する久し而して其忠君愛國の念寸時も胸中を去らず日夜報恩の期を待つ事實に寤寐の寤覺も替らず而して今まで日露の開戰第一着手として旅順仁川等に於て敵艦を破り其擯爽に立つの人は既に聊かたりとも其報恩の一端に費す然れども不肖身賤しくして其衷心の萬一を盡さず其前途に於ても尙然りとす誠に郷里の知己に對し將た多年の脊顧を受けし各長者に對し汗顏に堪へず彼れ露國も一度び敗勢を取りし以來は必らず（以下二百字揭载を禁せらる）不肖等從來の本望を遂げ聊か國家に對して万一の報恩に供する事を得ん若し中途にして倒るゝあるも大日本帝國の體面は斷じて恥かしむる事あるまじく一度び出師に望む素より生還を期せず今にして願望御許容あり一臂の助力を仰ぐに於ては正に其赤心を貫くに躊躇する處なし願くは不肖等の衷心御推察の上御許可相成樣且つ御一臂の御助力賜りたく伏して懇願仕候

海軍一等水兵　井上　末吉（血判）
海軍二等水兵　浮田友三郎（血判）

（尙は敵を破るの方略附記しあり）

謹んで御願申上候先日來の御厚志を謝し併せて此度び第二決死隊組織相成り再三再四分隊長に願ひ候へども兎や角申され實に慨嘆に堪へず小卒國家の爲め倒れて後巳むの決心に御座候へば何卒書の誼を以て高官より艦長に御願ひ被下度願上奉り候

明治卅七年三月十八日
出雲海軍二等水兵　安保　助藏

昨年十月御內諭され候冒險事業不幸にして第一次は成功を期せず依て次回の事業を相待ち居候處聞く處によれば既に今回の閉塞隊は各艦御確定と承り私魂遺憾に堪ず是非御供致し度く熱望に候ゆえ中佐の御厚情を以て何卒御公明の御指示を乞ひ奉り候也

有馬中佐殿

嗚呼愉快かな君國の爲め決死隊旅順口閉塞實身右につき意見ある處を御洞察遊ばされ是非共御採用被下候樣御盡力の榮を仰ぎ度伏して哀願に及び候也

中川作太郎

三月十六日　大河原藏之助

齋藤參謀殿

拜呈早速ながら實意を得候此度組織せられたる決死隊本艦にては最早定員となり聞く處によれば高官再度此名譽ある事業に御臨しとの事小卒儀も一度び死を決し高官と死を俱にせんと誓しも敵彈不冝にて惜しからぬ命を永らへて（原文不明）益せんと今まで待ちに待ちたるに幸ひに命あり直ちに志願せしも選ばれず前回と異なる事なれば止むを得ず然れども其前同樣の事なるに選ばれざるは其意を得ず小卒も一度び行きて經驗もあれば何卒從軍御許可相成り度最早人員も整ひ居れば御選び合せの程偏に奉願上候人は死すべき時に死せざれば死に優るの耻ありとかや小卒名譽ある事に死すは本望に御座候

軍艦出雲　安保　助藏

齋藤參謀殿

謹んで一書を草して以て玉机に呈し候間ば此

度又々閉塞隊指揮官として御出向あらせられ候由にて全く成効を遂げさせ候やに承り候ひしが之れ全く貴官の忠烈勇武の致させらるゝ處と國家の爲め欣舞措く能はざる處に御座候小卒も又々此擧に應ぜんとの覺悟にて志願致せしも哀いかな此行を許されず轉た慨嘆の至に堪へず成効もなさずに新聞雜誌には揚々として小卒等の事書き立て居り候故今般の行にかざりしかば或は世間の者や愚父親類共が義名を售りしと笑ひ罵らんかと存じ實に慚愧の至に堪へず腸切て死なんと迄も思ひ扨てこそ御無禮をも顧みず貴官へ書輸差上申候其節は時日切迫致し殊に往き度き一念の爲心は顚倒し且無學短才加ふるに拙文亂筆にて或は不敬の文字は無かりしかと夫れのみ唯々恐懼の至りに存じ候若し左樣の儀之有候へば以上の次第に御座候に付何卒御容赦被下度此後決死隊樣の事有之候はゞ貴官の御力を以て何卒御盡力被成下度偏に奉希候時節柄國家の爲め玉體御自愛專一に奉祈候恐惶謹言

青木　五郎

齋藤參謀殿

謹啓時下春季の候に御座候御尊官様益御勇健御奉職の段奉大賀候降て愚生無異艦務致し居候間乍恐御休神可被下歸艦後早速御禮狀差上申べくの處軍務多忙に取紛れ延引致候段恐しからず御海容被下度候扨仁川丸乘組の際百事は御貴官樣の御厚配に預り無事歸艦致候段有難候御禮申上候就ては自分の軍人として出戰の命を蒙り更に名譽の事國家の爲め忠節を盡し皇恩の億万分の一に報い奉るの時期到來と眞悅致し候處先日の如き重大なる難有御命令を受け實に欣喜に堪へず候出戰の上は美事に閉塞の目的を遂し屍一港口に曝し御尊官樣の御供仕る精神に御座候處不幸にして十分の成功を期せざりしは實に殘念に御座候在郷中父の教訓諭に死すべき時に死せざれは死に優るの耻ありと決して卑怯未練の振舞致す間數一死以て聊かたりとも皇國に報ゆるの決心に有之候一説に依れば近日の中に第二決死隊を御選拔致さるべき風說有之候が若し眞なれば其節は御高官樣の御盡力にて今一度御選拔に預かり度此儀別けて御願申上候御逹し有之候はゞ艦長機關長分隊長殿へ出願するは勿論なれども御採用にならざるやと自分は夫れのみ心配致し每夜安眠出來ず候間希はくは御生死を共にせし御尊官様等へ御約束の通り冥土に御供仕り申度候間眞なれば特別の御詮議を以て御選拔被下度候私は一旦死を決したる上は死せざれば止まざるの決心に御座候間是非與々も御願申上候皇恩の二字に報い奉るは今日なりと日夜考思致し居候御話申上度事山々御座候へども何れ面會の節御話申上べく候前々無學故失禮の文言有之候時は平に御許し被下度候

軍艦八島　土名勝太郎

齋藤大尉殿

突然申上候陳ば今般又々決死隊組織有之候に付再三再四分隊長に申入候へ共採用相成らず小卒等甚だ慨嘆の至りに堪へず候に就ては旅順口閉塞の御節を以て何卒貴官より御盡力被下度偏に御願申上候

出雲艦
青木　五郎
貝原　六郎
安保　助藏
三島　健六

齋藤參謀殿

謹啓愈〻御淸勝國家の爲め欣喜の至に堪へず候偖て旅順口閉塞の節は厚情に預り深謝仕候〇〇〇〇にての寫眞確かに拜受仕候扨て今般又々決死隊組織相成りしも小卒等は御採用なく甚だ慨嘆の至に堪へず候に付一同貴官へ御願申上候へ共到底總員は六ヶ敷有之候はんに付小卒丈けにても宜しく候に付何卒小卒のみ

志を御憫察有之て十分御採用ある様御盡力被下度偏に御願申上候短才無學意の如くならず乞ふ御賢察被下度候不敢

齋藤參謀殿　　　　青木　五郎

●第二回閉塞運動に於ける廣瀨中佐の壯烈なる最期　廣瀨中佐の最期に關しては幾多の歎美すべき事跡あれども特に吾人の感服を深うすべきものは三月廿六日の夜に於ける閉塞船指揮官として中佐は其目的を達し敵彈急雨の如く飛來る下にボートに乘るや危險甚しく下士卒の害せられんことを慮り中佐は双手を擴げ身を以て下士卒を擁護したりと當時中佐の部下に在りたる男士は各本艦に歸り來り當時の狀況を物語り談之に及びて嗚咽禁ぜず言葉を續くる能はざりしといふ、又東郷長官の報告に在る如く杉野兵曹長を物色すること三度に及べる後中佐はボート中に立つて左手に海圖を振り右手にボートの操縱を指揮し居たる後敵彈飛來中佐の體軀を海中に轉落せしめたるが彈丸は中佐の頭蓋を破摧し彼の遺骸として送致されたる二錢銅貨大の肉片の外其腦漿迸りて持てる海圖に附着したるもの船中に殘り居たる由にて朝日艦長は此軍神の腦漿を印せる海圖を永く紀念として同艦に保存したりと云ふ

●廣瀨中佐と杉野兵曹との辭世　廣瀨中佐が福井丸船長に與へし辭世の語は一句四字にして四句十六字即ち

七生報國　一死心堅
再期成効　含笑上船

此の外同船汽關長に語りたる正氣の歌次韻詩一篇あり、又杉野兵曹の辭世は

國のため十年のむかし死する身の
今ありしとは思はさりけり

●露艦我商船を追捕す　（二十九日午後九時芝罘發海軍省着公報）當地方沿岸航海小蒸汽繁榮丸二十六日午前七時牛閒嶋列嶋大欽嶋附近航海中露國艦隊に追捕せられ日本人十名支那人七名敵艦に捕はれ船長外水兵二名ジャンクにて逃れ沿海州を經て今當地に歸りたり露國艦隊は驅逐艦を率ゐ該船を擊沈の末旅順口へ向け引擧げたり

繁榮丸は大阪村上吉十郎氏の所有にて一千八百六十二年英國に於て製造せられたる老朽の汽船にして總噸數七五登簿噸數四〇公稱馬力一七、長七十一尺幅十三尺深七尺の最小汽船にて僅に沿海の航行に堪へ得るに過ぎずと云ふ

●我が陸軍定州城を占領す　三月廿八日午前十一時十五分定州南門外に於て我騎兵隊將校斥候敵に遭遇し該隊及歩兵の一部は之を收容し結局此敵を擊退して定州を占領し　陛下の萬歲を唱へ士氣倍〻振ふ

將校斥候は定州南門附近に在る敵の射擊を受けて之を北方に避け騎兵の主力を收容する爲め全力を盡くして射擊す、午後一時十五分我歩兵は急行して定州の東北約二千メートルの地に來りて射擊するや敵は義州街道、郭山街道に退却す我歩騎兵の一部は之を追擊す敵の兵力は約六百なり此戰鬪に於て受ける我損害は左の如し

戰死者　中尉　加納忠勇
　　　　特務曹長　清水焼吉
　　　　下士以下　三名
負傷者　大尉　黑川敬藏
　　　　（兩臀貫通銃創）
　　　　中尉　幸村銀六
　　　　（右腿貫通銃創）
　　　　下士以下　十名
　　　　馬匹　死一、傷七

歩兵隊には一の死傷なし

戰場に遺棄せし敵の死者二名（一名下士）なるも土人の言によれば城內に在りし死者のみにても七八名ありしと

敵は巧に馬背及擔架に依りて死傷者を運搬し去れり、現に將校らしき者二名の斃れたるを擔架に依りて危險を冒しつゝ運び去るを見たり此他血痕の繃帶處々に散在しあるを見れば敵は少くも我と同等の損害を受たるならんといふ

●議會閉院式　第廿回帝國議會は三月廿九日重要議案を悉く議了したるを以て卅日午前十一時貴族院に於て閉院式を舉行せられ兩院議員は一樣の燕尾服にて各議長に率ゐられ式場に整列せり首相以下各大臣も通常禮服にて出席し首相は詔勅奉讀の榮を荷へる旨を告げ左の詔勅を奉讀せり

勅語

朕貴族院及衆議員ノ各員ニ告ク
朕本日ヲ以テ帝國議會閉會ヲ命シ
併セテ卿等軍國ノ急務ニ關シ克ク
朕カ意ヲ對揚シテ協贊ノ任ヲ完ウ
セルノ勞ヲ嘉獎ス

各員最敬禮を行ひ之にて式を終へ散會したるは同十一時十分過ぎなり

●第二十議會の成績　第二十回議會に於ける議案總數及び其結果左の如し

一、政府提出案		二十六件
	總て可決	
一、上奏案		一件
一、建議案		二件
一、決議案		三件
	總て可決	
一、重要動議		三件
	内	二件　可決
		一件　否決

以上を合計すれば衆議院に提出せられたる議案の總數は三十五件にして内三十四件可決、一件否決、又請願書の提出せられしもの總數四十四通、内採擇すべきものと決したる者一通、政府に參考として送付す可きものと決したるもの二十六通、院議に付するを要せずと決したるもの十四通、議了せざるもの三通なりと

●日米修交五十年紀念會　三月三十一日午後二時神田青年會館に開會出席者五百餘名江原素六氏開會の辭を述べ島田三郎氏の演說、米友協會々長岡部子の祝辭、大隈伯の演說あり次に米國教會監督ジョン、マキム氏は祝辭を兼ね日露開戰の際此紀念會を好機とし陸海軍恤兵及び軍人遺族扶助の醵金の動議を出すや滿場喝采して之を抑へ毛利公爵、三井、岩崎兩家の各一万圓を始めとし即座に六万三千餘圓の醵金を得五時過萬歳聲裡に散會したり

●伊藤大使の歸朝　伊藤大使一行は四月一日午後三時十四分新橋着列車にて歸京せり

●我が斥候義州に入る、北韓の敵兵退却す　我日本軍は四月三日義州を占領したり敵は其前夜即ち二日の夜に於て悉く鴨緑江を渡て退却せり其退却するや人は丸木船に乘り馬は水中を泳ぎて頗る狼狽を極めたるが如し、而して又昌城方面の敵も共に退却したる者と見え鴨緑江左岸には一人の露兵を見ざるに至り、又豆滿江方面の敵も遠くは出で來らず時々雄基灣まで偵察に出て來るの外には今や韓國内に露兵を絶つに至れり

●露軍我が廣瀨中佐の遺骸を葬る　四月一日アレキシーフ總督は旅順に於て日本海軍將校の爲めに葬儀を營めり當時將校及び水夫之を見送り且つ樂隊を付せり此將校の死骸は福井丸の船首の海上に浮びしものにて頭部に砲丸にての大傷あり其深さ一寸外套の袖に金筋あり首には革紐にて望遠鏡を掛けポケットには短劍蔵し居れり蓋し該死骸は中佐の遺體なるべく敵ながらも勇士の遺體を收容して相當の儀式に依り葬儀を營みたるは健氣の次第と云ふべし

●鴨綠江の斥候衝突公報　（海陸軍共同運動）（四月十三日午前十一時大本營着公報）

龍巖浦に到着せる上原騎兵中尉の報に依れば十日午後三時露兵九名變裝して龍巖浦西南千五百米突の海岸に上陸を企てたるを以て恰も細谷司令官の命に依り海門艦長が鴨綠江口偵察の爲に派遣したる山口海軍中尉以下々士卒五名と協力し陸より騎兵二分隊にて捕獲を努め海軍は海より船にて敵の退路を絕たんとせしも彼は早く退却を始めたる故之を射擊せり此時前面の中洲に敵兵二三十名上陸し在りて之を收容せり敵は二三の死傷あるものゝ如し我兵皆無事

此他敵は變裝して義州龍巖浦間にて切りに渡河を企てしも皆之を擊退せり

十二日朝敵の步兵約三四十名鴨綠第一江を義州の西にて渡河せんとせしを以て我步兵一小隊は之を射擊せしに敵は士官一兵卒二十一の死體を捨て退却せり此敵は狙擊步兵第十二聯隊なり我兵死傷なし

●旅順第八回大攻擊、敵艦隊主力殆ど全滅す

（東鄕聯合艦隊司令長官報告）（四月十六日午後五時海軍省着電）聯合艦隊は去る十一日より豫定の如く行動し更に旅順口の敵に對して第八次の攻擊を爲せり第四驅逐隊第五驅逐隊第十四水雷艇隊及び蛟龍丸は十二日夜半旅順口港外に至り敵の探照を冒して港口に近づき計畫の通り港外の各所に機械水雷の迅速なる沈置を遂行し得たり又特別の任務を有せる第二驅逐隊は十三日黎明港外鮮生角の南東を巡邏せる時東方より旅順口に入らんとする四本煙突を有する敵の驅逐艦一隻を發見し直に其前路を遮りて之を攻擊し約十分間戰鬪の後之を擊沈せり又同時頃西方老鐵山の方向より來れる他の敵驅逐艦一隻を發見し轉じて之を攻擊せしが距離遠くして遂に之を港口に逸せり此戰鬪に於ける第二驅逐隊の損傷は輕微にして唯電の卒二名輕傷せるのみ擊沈せる敵艦の溺者は敵艦バヤーンの近づき來りしため之を救助するの暇なかりし

第三戰隊は午前八時港外に達して第二驅逐隊を掩護し且つ敵情を偵察せり午前九時頃敵艦バヤーン我に向ひ突進し來り遠距離より砲擊を開始せしを以て徐々に應戰して之を擊退せり幾もなく敵艦ノーヴヰツク、アスコルド、デイアナ、ペトロパウロウスク、ポベーダ、ポルターワ等バヤーンと合し攻勢を取りて反擊し來り第三戰隊は之に應戰しつゝ敵を南東方向約十五海里に誘致せり此時沖合約卅海里に方りて濛氣の內に隱れたる第一戰隊は第三戰隊の無線電信に接し直ちに急進して敵艦隊に逼りしが敵は艦首を轉じて港口に向ひ背進せしを以て尙益〻追窮して之を港前に壓迫せるとき先頭に占位せるペトロパウロウスクと見へたる敵艦一隻前夜沈置したる我機械水雷に掛り爆發轟沈するを見る時に午前十時三十二分なり敵の殘艦は此慘憺たる光景に驚きて大に混亂し尙ほ外に一敵艦の進退自由を失ひたるの疑ひありしも敵艦隊混雜の爲め其艦型を識別する能はざりし其後敵の殘餘は約一時間頻りに艦側附近の水面を砲擊しつゝ漸次に港內に入り正午過ぐる頃港外に敵影を見ざるに至れり此戰鬪の初期砲戰に於て第三戰隊は一の損傷なく敵の損害も亦少許なるべく第一戰隊は遂に敵と砲戰距離に近かざりし

當日午後一時艦隊は旅順口港外を去り豫定地點に集合して洋中に假泊し更に準備を整へて十四日午後四時より再び旅順口に向ひ發砲せり第二驅逐隊、第四驅逐隊、第五驅逐隊、第九水雷艇隊は翌十五日午前三時前後相次で旅順口港外に達し豫定計畫の如く再び其任務を遂行せり午前七時第三戰隊も港外に現はれ敵情を偵察せしが港外に敵影なく港內寂然たり又第一戰隊は午前九時旅順口沖に至り途上浮流せる敵の機械水雷三個を發見し一々之れを砲擊爆沈し午前十時より春日、日進を老鐵山の西方に分派し約二時間港內に對し間接射擊を行はしめたり敵の要塞及港內の敵艦時々之に應戰せしが兩艦共に損傷あらず此兩艦は此日を以て敵に對し其初彈を發射せしが其射擊の效果は相應に之れありしが如く

老鐵山西の新造砲壘も沈默せしめたり午後一時三十分艦隊は交戰を止め歸航せり此連續せる作戰に於て聯合艦隊が一兵をも失はずして多少の戰果を擧げ得たるものは一に大元帥陛下の御威德に依るものにして麾下將卒は終始勇往敢爲其任務を遂行するに忠實するも其奏功成果に至ては人力の及ばざる所多し特に多數の艦艇が晝夜を問はず敵機械水雷の浮流せる洋中を縱横に航行し然かも今日に至るまで一の危害を受けたることなきが如きは只天佑と確信するの外ならざるなり

●マカロフ中將の戰死　東郷司令長官の公報に見えたる如く露國旗艦ペトロポーロスク沈沒の結果之れに座乘したる露國艦隊司令長官マカロフは幕僚八百餘人と共に僅に數分間の中に溺死したり生存者僅かに數人キリル大公も負傷ながら溺死を免れたる一人なり

●第八回大攻擊後報　第八回旅順攻擊に於て初め我驅逐隊及び水雷艇隊が十二日より旅順港外に突進するや折しも濛々たる春雨は風さへ加はりて我が行動に最も適當せりと雖も從來四箇所の探海燈は同夜二箇所を增して六箇所となり頻に我の進路を照射し殊に某驅逐艦の如きは其照射の中に陷り而して敵の探海燈は之を照らせる儘暫く回轉を中止せり是に於て某驅逐艦は我の所在敵に看破せられたりと覺悟せしかば直に最も接近せる西口附近の强力なる探海燈に向て數回射擊を試みしに之が効果ありて消滅したり

我一驅逐隊が十三日黎明港外鮮生角の南東を巡邏せるとき前夜來港外にありし敵の哨艦たる驅逐艦一隻が偶々港内に向つて歸來せるに出會し直に戰を挑み之を擊沈せしは僅に數分間にして我數發目の彈丸敵艦の機關部とボイラーとの間に美事に命中し非常の音響を以て急速沈沒せしが白煙濛々として暫らく天に沖せり

十三日午前九時敵は我某戰隊に迫りしに恰も我が有力なる戰隊の現れしに驚き直に港内に向て逸走せし際マカロフ提督坐乘ペトロパウロスク號は沈設水雷に觸りて轟沈せり此事に付き實見將校の語る所に依れば何分遠距離の事とて充分判明せざるもペトロパウロスク號が初め水雷に觸るや凄じき響と共に濛々たる白煙艦隊を包みつゝ天に沖し數分間にして白煙の風に吹き拂はるゝや船體は既に海底に沈沒して僅にマストを現はせるのみなり又同艦は逸走の際も將官旗を揭げ居りしに察すれば無論マカロフ提督の此際溺死せし事疑ひなし而して此際敵砲臺は同艦の沈沒と同時に器械水雷の沈設しあるを疑ひしものゝ如く盛に同艦沈沒場所附近の海面に向つて射擊したりと

十五日午前十時より春日日進の兩艦が老鐵山の西方某地點にありて約二時間港内に向て間接射擊を行ふや我の彈丸は終始著しき効果を得敵達老虎尾の砲臺に莫大の損害を與へたるが如く兩艦の射擊力は實に猛烈なりき此時敵の砲臺及び港内の敵艦は屢々應戰せしも他の利に於て彼の我に劣るもの大なるのみならず更に射擊力も亦匹儔すべからざりしかば少しの損傷だも我に與ふる能はず斯くて我艦艇の或るものは港外にありて悠々我間接射擊の効果を傍觀し殊に某艦の將校は室内より甲板上に椅子を運び來り之に腰打掛けつゝ恰も相撲見物を爲すが如き有樣にて終始傍觀し以て同射擊の彈丸が敵砲臺等に適中する時の如きは一齊に立上り拍手喝采を爲せしが顧みて港内を見れば實に寂寞の慘狀を呈せりと

十五日午前九時我戰隊が沖合に引揚げし際敵の器械水雷三箇發見し之を砲擊爆沈せしめしは八嶋艦にして該水雷は敵が大連灣方面に沈設せしものゝ前日來の大風波に切斷され浮流せしものならんと　（四月廿日　時事新報所揭）

●名譽の艦艇と艦艇長　右第八回旅順攻擊に參與せる艦艇及び其艦艇長の姓名は左の如し

軍艦

三笠、初瀬、敷島、朝日、富士、八嶋、笠置、千歳、高砂、吉野、日進、春日、常盤、淺間、

驅逐艦

雷、電、曙、朧、春雨、村雨、速鳥、朝霧、叢雲、夕霧、不知火、陽炎、

水雷艇

隼、鵲、眞鶴、千鳥、雁、蒼鷹、鴿、燕、

艦長

三笠 大佐 伊知地彦次郎
初瀬 同 中尾 勇
敷嶋 同 寺垣猪三
朝日 同 山田彦八
富士 同 松本 和
八嶋 同 坂本 一
常盤 同 吉松茂太郎
淺間 同 八代六郎
笠置 同 井手麟六
千歳 同 高木助一
高砂 同 石橋 甫
吉野 同 左伯 闇
日進 同 竹内平太郎
春日 同 大井上磨
雷 大尉 三村錦三郎
電 少佐 篠原利七
曙 同 久津見雅雄
朧 同 高木東太郎
春雨 同 有馬律三郎
村雨 同 水町 元
速鳥 同 竹内次郎
叢霧 同 石川壽次郎
叢雲 同 松岡修藏
夕霧 同 鍵和田專太郎
不知火 同 西尾雄次郎
陽炎 同 井水篤行

艇長

隼 大尉 桑嶋省三
鵲 同 吉川安評
眞鶴 同 飯田延太郎
千鳥 少佐 櫻井吉丸
雁 大尉 阪本重國
蒼鷹 少佐 矢嶋純吉
鴿 大尉 原田松次郎
燕 同 庄野義雄

●戰局の經過

二月六日 日露國際關係破裂
同 八日九日 第一回旅順攻擊
同 八日 栗野公使露都引揚
同 九日 仁川海戰
同 十日 宣戰詔勅の煥發
同 十一日 浦鹽露艦の名古浦丸轟沈、大本營設置、露國公使の東京引揚
同 十三日 國庫債券一億圓施行
同 十四日 第二回旅順攻擊、戒嚴令公布
同 十五日 露國水雷母艦エニセーの沈沒
同 十六日 進春日兩艦橫須賀着
同 廿三日 日韓協約の調印
同 廿四日 第三回旅順攻擊、第一次旅順港口閉塞
同 廿八日 平壤外にて、陸軍斥候衝突、貝加爾湖上汽車陷落
三月二日 帝國々會召集令
同 六日 第一回浦鹽砲擊
同 七日 伊藤侯韓國差遣の御沙汰
同 十日 第四回旅順攻擊
同 十五日 貝加湖上の再椿事
同 十七日 露國驅逐艦スコリーの沈沒
同 二十日 帝國議會開院式
同 廿一日廿二日 第五回旅順攻擊
同 廿六日 露國の日本汽船繁榮丸轟沈
同 廿七日 第六回旅順攻擊、第二次旅順港口閉塞、廣瀨中佐戰死
同 廿八日 我陸軍の定州占領マンジュー

ル號の武装解除完了

同　三十日　帝國議會開院式
四月　三日　我斥候義州に入る
同　十　日　鴨綠江上の海陸共同運動
同　十二日　鴨綠江畔の小衝突
同　十三日
同　十四日
同　十五日　第七、八回旅順攻擊、敵艦の主力殆と全滅マカロフ提督戰死

●韓國王宮全燒　（外務省着公電）四月十四日午後十時現王宮中の咸寧殿より失火西洋造の九成軒の一棟を燒き殆ど全部燒失せり皇帝は米國公使館の左側なる宮内府附屬の圖書館に移らたり失火の原因は咸寧殿の一室溫突修繕中誤て火を失したるものなりといふ

駐韓林公使は右に付き取敢へず御見舞の爲め伺候せりといふ（咸寧殿は常に謁見を賜はる宮殿なり）

●韓國へ御親電　聖上陛下には外務大臣より韓國王城炎上の趣き聞召され同帝室へ御懇切なる御見舞の御親電を發せさせられたりと承はる

●陸軍衛生の好果　我陸軍の衛生に關し開戰後に於ける某師團の實況を見るに其成績意外に良好にして内地に在る豫備兵後と出征軍隊とを合せて病者平常三百人内外の率に在り歐米諸國從來の實驗に依るも我國既往の實驗に徴するも如斯は誠に珍しき事にして我軍隊衛生機關が如何に發達し居れるかを窺ひ知るを得べし

●海軍の健康　我が海軍々人が最近の報告によれば出征以來休業患者員數は人員每百比例〇、六七のみ、其の最も多き時も一、五に過ぎずして平時の一、一二より少きは士氣の奮昂せる結果なるべし、疾病比例は戰闘外の外傷（感冒よりる起咽喉加答兒等）中、最も掛念したる凍傷患者は幾んど皆無といふも不可なく、全艦隊中僅かに二三名のみ、傳染病は佐世保より感染したる腸窒扶斯患者三名ありしも傳染は艦内にて消滅し、又出征以來の病死者は腸窒扶斯と心臟病とにて僅かに二名を出せしのみ、健康成績は著るしく善良なり

●下士卒家族救助令　同令は四月四日勅令第九十四號を以て左の如く公布せらる

下士兵卒家族救助令

第一條　戰役に際し召集せられたる豫備役後備役補充兵役下士兵卒の家族は其の召集中本令の定むる所に依り之を救助す

第二號　本令に於て家族と稱するは召集の當初より引續き應召者と同一の家に在る祖父母父母妻子兄弟姉妹を謂ふ但し召集中出生したる嫡出子は召集の當初より其の家に在るものと看做す

第三條　救助を受くべき者は下士兵卒應召の當時生活する能はざる者に限る

第四條　救助の程度及方法は内務大臣之を定む

第五條　下士兵卒逃亡し又は三箇月以上の禁錮の刑に處せられたるときは其の逃亡又は刑期中の日數に等しき期間救助を停止す

前項の停止は公の承知を受けたる日より始む

第六號　下士兵卒死亡若は生死不分明となりたるとき又は傷痍若は疾病に依り召集を解除せられたるときと雖本令の救助は仍三箇月之を繼續す

第七號　本令の規定は戰役に際し現役を延期せられたる下士兵卒の家族に之を準用す

附　則

本令施行の期日は内務大臣之を定む

●下士兵卒家族救助令施行規則　内務省令第三號を以て四月九日左の如く下士兵卒家族救助令施行規則を定められたり

第一條　下士兵卒家族救助令に依り救助を受けんとするときは一家經理の任に在る者若くは之に代る者より住所地々方長官に願出づべし

前項願出ありたるときは地方長官は資産の程度勞役の能否扶養義務者其他救護を爲す者の有無並に各種の狀況を調査し其許否を決定すべし

第二條　救助は生業扶助、現品給與、施療、現金給與等の方法に依る
前項救助は適當なる他の施設に委囑し之を行はしむることを得

第三條　救助の額は戰死者の遺族に支給すべき扶助料の最低額を超ゆることを得ず其支給額の標準等は被救助者の狀況に依り地方長官之を定む

第四號　救助を受くる者自營の途を得若くは他の扶助等を受くるに至りたるときは其狀況に依り救助の程度を減少し又は救助を廢止す

第五條　本令に規定するものを除くの外必要なる事項は地方長官之を定む

●救助金制定旨趣

內務省は去る四日應召下士兵卒家族救助令を制定し九日の官報を以て其施行規則を公布し同時に右制定に付き左の趣旨を各地方へ通牒したり

豫備後備補充兵の應召下士兵卒等の家族にして隣佑等の救護あるも尙其生計困難なるものは今回公布せられたる救助令に依り國庫より救護費の下付あるも元來是等家族の救助は之を國費に竢たず隣佑相扶の誼に依り保護の途を立つるを最も適應の措置たるのみならず國庫より支出せらるゝ救護費は救助の一端を資くるに過ぎざる次第に付此際更に一層隣佑相扶に努むるの急要なるべきは論を俟たず又公私何れの救助にせよ直接金品の給與は之に伴ふ弊害少なからざるを以て充分矯弊に務め成るべく生業扶助の計に出づるを以て兩全の方法とす殊に今日の場合應召軍人の家族たるものは宜しく應召者の非常勞苦を察し平時よりも一層其生業に努むべきは勿論に付き苟も勞苦に堪ふるものは之を激勵し徒らに他に倚賴するが如きことなからしむるを期せざるべからず要するに軍人家族にして貧窮なる者は親族及び隣佑の力に賴らしむる方實際最適切なるべきも軍人をして後顧の憂なからしむるは軍事國志氣の盛衰に關するを以て政府は其救護を共にするの旨趣なり

●報聘大使の入京

韓國皇帝陛下の報聘大使法部大臣陸軍副將李址鎔氏は豫定の如く四月二十二日午後三時十四分新橋着の列車にて隨員閔泳璘、鄭東植、玄暋運、李起鉉、閔弘基、尹元求、沈允趙外從者五名を從へ大磯まで出迎へたる韓國公使趙民熙氏、同公使館員參將李容翊氏及び韓國より同伴の鹽川通譯官等と共に入京したり大使は陸軍副將の正服（眞紅）に襃章及び日本勳章を帶びプラットフォームに出迎へたる伊藤侯代理、珍田外務、花房宮內の兩次官宇佐川、伊知地の兩陸軍少將、都筑樞密院書記官長、千家東京府知事、尾崎市長、山座政務局長、阪田外務參事官、韓國顧問加藤增雄氏、東園侍從、丹羽宮內外事課次長、恩地接伴長、髙橋種紀、安立警視總監、林憲兵司令長官、吳大五郎氏、等に挨拶し夫より恩地接伴長及び韓國公使館員韓其準氏の先導にて停車場を出て宮內省より差廻されたる馬車に移り（恩地接伴長同乘）警衞の警部三騎を前後に隨へて歡迎の市民堵の如き中を徐々上野向ひ旅館精養軒に入れり右に付き珍田外務花房宮內の兩次官山座同政務局長及び林憲兵司令長官は旅館まで大使を送りたり

●マッキー夫人の一行

日露の國交未だ斷絕せざる以前より深く帝國に同情を寄せ萬一開戰の場合には一隊の看護婦を率て遠く來りて我傷病兵の看護に從事せんとを申出で而して逼同愈〻戰端の開けるたに就て是非共其願意の聽許せられんとを切望し遂に我赤十字社に關して事に從ふの認許を得て今回來朝することとなりたる米國マッキー夫人は許多の志願者中より選拔せる八名の看護婦を率ゐ「ショマット」號に便乘し三月三十日シャートルを出發し四月十二日午前八時橫濱港に來著しぬ我赤十字社よりは髙木平山、東鄕の三氏篤志看護婦人會よりは會長鍋島侯爵夫人以下數名並に神奈川縣よりは岡布

知事、谷口書記官、秦參事官、石田港務部長、市原市長、高木助役、大谷獎兵義會長、篤志看護婦人會支部總代等本船まで出迎ひ波止場には濱田警部長以下內外の紳士　納商稅關前には篤志看護婦人會支部員、水上警察署前には高等女學校、橫濱女學校、フェリヘ女學校の生徒並に愛國婦人會員、海岸教會員等整列し又た市民としては元町、住吉町、福富町、長者町の各町聯體も出迎ひ中にも吉田町の尙兵會は船を浮べて迎ひたり夫人の一行は總て九人五艘の汽船に送られて同四十五分上陸手に手に篤志看護婦人會より贈られし花束を持ち歡呼の間を徐ろ海岸教會に入りて安着の感謝をなし次いで差廻されたる馬車にてグランドホテルに入れり午後は各方面の訪問者に接したるが夕刻よりは市內有志者の催に係る晚餐會に臨みたり一泊の上二十三日午前九時十分同地發列車にて入京す

●マッギー夫人　は天文學者ニューカム氏の女にて一八八八年人類學課技師マッギー博士に嫁ぎたり婦人嘗て歐洲に學び獨佛兩語に巧みなるが結婚後醫學を研究して遂に女醫となり一八八九年米國陸軍の軍醫補に擧げられ兼れて看護婦長と爲れり同年西米戰爭に際し婦人は從軍看護婦を募集したるに約二千の應募者あり其內より六百名を選抜して一隊を作り傷病兵を看護して大いに功を立てたるが戰爭了て後も尙西米戰爭看護婦協會なるものを組織し夫人は依然其會長たり夫人が這回我が傷病兵救救の出願を帝國政府に爲すに當り其看護婦數は我政府の望む所に應ず可く目下自己所管の看護婦は六百名あと云りひしが夫人の斯の快擧を聞きて四方より同行を志願するもの非常に多く爲に制限を設けざるべからざるに至れり夫人が此等の夥だしき志願者に對して設たる制限の重もなるものは左の如しといふ

一、責任ある看護婦學校の卒業生なると少なくも二年乃至三年間看護婦に必要の學科を教ふる所の學校卒業生たるを

一、從軍看護の經驗をも有すること

一、日本に赴く以上は少くとも六箇月間軍隊看護に從事するの覺悟あること

一、年齡は二十五歲以上五十歲以下の婦人に限ると

右の如き制限あるに拘はらず各州よりの申込多く中には此資格を有せざる者までも熱心に夫人に哀請する者ありてその事務に任せる人は殆ど應接に遑あらざる程の景況なりしと夫人は又帝國に渡航する看護婦隊の服裝を左の如く一定せりといふ

一、白色の帽子を戴くこと

一、ポンジー絹（印度產）を以て作りし前垂膝掛を用ふること

一、旅行の際は鳶色の毛布製の揃の衣服を着すること

前垂膝掛にポンジー絹を用ひたるは輕くして働きに便なると洗濯に堪ふるが故なりと夫人の背後には多くの慈善家ありて此擧を特助するあり財政上に於て何等の困難を感ぜざるべきが夫人が客に語れる所に依れば這回日本に渡航する看護婦隊の中には西米戰爭に從軍したる者最も多く引續き北淸事變に從軍したる老練の看護婦も尠からずと、夫人がシャートルに於て理想の看護婦は大要左の資格を備へざるべからざる旨を語りたりと

完全なる看護婦たる者は單に負傷者病者を術護するの術を知るのみならず普通の兵卒と同じく必要の場合には自ら露營を建築するの術をも知らざるべからず戰場に於て食物に缺乏する場合には自ら出てゝ之を求めざる可からず擔架卒の負傷者を齎すを待たず自ら戰場に出でて彼等を荷ひ來るの勇氣なかる可からず日々十八時間看護に勸めて猶疲れざるの健康なかる可からず僅かに數枚の毛布を纏ひ大地に橫はりて一夜を明かすの覺悟なかる可からす要するに看護婦は兵卒の爲す所をば大抵之

を爲すの決心なかる可からず予は斯の如き決心を以て日本の陸軍に從はんと欲するものなり

這回夫人の率ゐ來りたる看護婦は八名にして其內四名は政府四名は紐育、ニユーゼルシー等の出なり姓名は左の如し

ソフイヤ、ニウクル	ミユー、グツク
エラキング	アリス、ケマー
メリー、グラドウキン	セネキープ、ラツセル
エリザベス、タラツツ	アデレード、マカンス

（國民新聞所揭）

●軍資献金額

三月十五日迄に其筋に軍資献金を願出てたる金額は百廿六萬圓餘にして其府縣別左の如し

廳府縣	献金額		献金額
臺灣總督府	三三、八四五円	千葉縣	一五、三〇九円
北海道廳	一八九、六一六	茨城縣	六、二〇八
東京府	二四八、七八四	群馬縣	一二、八八六
京都府	四五、三三八	栃木縣	四、三六三
大阪府	九五、三八二	奈良縣	三、一二五
神奈川縣	七三、〇七五	三重縣	五、六六八
兵庫縣	五三、三六六	愛知縣	六三、四五四
長崎縣	二一、〇四七	靜岡縣	一〇、六七一
新潟縣	二九、三四〇	山梨縣	六、九一五
埼玉縣	六、〇四七	滋賀縣	一五、九〇三
岐阜縣	八、九二七	山口縣	五、五九五
長野縣	三四、〇六二	和歌山縣	二、五六〇
宮城縣	一三、〇六三	德島縣	四、八九〇
福島縣	三、二七七	香川縣	三、六六一
巖手縣	二、〇七九	愛媛縣	三、〇四四
青森縣	九、〇九六	高知縣	六、七四三
山形縣	七〇、八六五	福岡縣	一〇、三五九
秋田縣	五、六九八	大分縣	三九、一六九
福井縣	一〇、〇五四	佐賀縣	五、三四〇
石川縣	三三、〇〇三	熊本縣	一七、一六四
富山縣	四、七九五	宮崎縣	一、五二六
鳥取縣	五八二	鹿兒島縣	一、一六五
島根縣	八、〇八八	沖繩縣	一、四五一
岡山縣	四〇七	計	一、二六〇、四〇〇
廣島縣	二八、〇五七		

因に記す二十七八年日清戰役の献金額は總計十六萬八百圓にして三十三年北清事變の献金額は同十萬七千六百二十九圓なりし

●露艦我が五洋丸を擊沈す

露國浦鹽斯德艦隊四隻は水雷艇二隻を率ゐ元山海面を遊弋しつゝありしが四月二十五日正午十二時水雷艇は港內に入り碇泊中の商船五洋丸の周圍を一周したる後日本語に通じたる將校水兵と共にボートにて本船に來り船員に立退を命じ且つ船籍簿及び地圖を押收し若し承諾せざれば捕縛すべしと威嚇したるより船員は僅に身を以て逃れボートに乘り移るや間もなく魚形水雷を發射し機關部に命中せしめたれば海水逆卷きて沒入し船艦次第に傾斜し五六時間にして全く沈沒せり五洋丸は總噸數六百噸の鐵製にて仁川堀回漕店の商用船なり同港居留民の中には此不意の出來事の爲め非常なる恐慌を惹起し其周章一方ならず何れも彈丸の達せざる距離に避難せり斯くて右軍艦は別に陸地を砲擊する抔の事なく五時頃東北方面を指して出て行けり。

●鴨綠江の戰

（細谷第三艦隊司令報告　四月廿八日大本營着電）

摩耶艦長より左の報告あり

本分遣隊は豫定の如く行動して二十五日鴨綠江口寨溯航中敵の野砲隊は龍岩浦の對岸遠距離の所より發砲せしも中らず川中洲陸上に敵の騎兵散在するを認めたる故發砲せしに敵は逃走せり翌二十六日敵の騎兵約百名我小蒸汽艇に向ひ發射せしを以て第六十九號水雷艇應戰敵は多數の負傷者を殘し山背に退却せり我軍損傷なし同日午後五時敵は安子山方面より本分遣隊に向ひ發砲す我れ應戰す午後五時五十三分に至り敵沈默せしを以て射擊を止む我れに損傷なし

投稿規定

毎月十八日を以て編輯總締切日と致し候に就き何卒それまでに着する樣願上候猶投稿諸君は**住所記入**を御忘れ無き樣被成下度候宛名は

東京市本郷區駒込西片町拾番地反省社

書籍の取次

愛讀者諸君の便宜を計りて今後本社にて**取次**を致し候東京市内にて發行の書籍は總て正確迅速に取次可仕候に就き申込の諸君は書名著者發行所等を認め代金及び遞送料を前金にて御送り被下度候

中央公論定價表

		郵税共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名并に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし

一郵券代用の場合は必す壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割

一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町　東京堂

神田裏神保町　上田屋

本鄉四丁目　文明堂

明治三十七年四月三十日印刷
明治三十七年五月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

東京市本鄉區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

破天荒の奇書

空前の珍冊

河口慧海師著

世界之秘密國 西藏旅行記

（全二册上卷製本既成）

洋裝　菊判總クロース金文字入極美本
紙數　一册五百頁
上卷　正價金壹圓　郵稅金拾錢

上卷口繪

比馬羅耶山脈中世界第一の高雪峯（ゴーリーサンカ）の景二頁大●慧海師出發當時の肖像●西藏語梵語博士チヤンダラダース氏肖像●タシルフンフー寺大喇嘛敎師シエンチエンドルヂエチヤン尊者肖像●慧海師入藏踏査地圖（石版着色）

河口慧海師は宇治黄檗山の僧にして夙に西藏語の佛書を求め佛敎の眞義を極めんとの大志あり明治三十年印度に渉りて爾來三年の間幾多の艱楚を嘗め姿を喇嘛僧に變じ遂に西藏に入り首府拉薩に留ると二年既にして其日本人なると發覺して咄嗟奇變の迫るに遭ひ僅かに身を以て脫出し滿六年の星霜を經て昨年五月無事歸朝するを得たり西藏は（ヒマラヤ）山北の高原國にして世界の高山峻嶺を以て其四邊を圍み且國道に關門を設けて鎖國を嚴行せり彼が完全鎖國を勵行せしより歐洲の探檢を企てし者幾數なるを知らずと雖も或は道途の險に仆れ或は彼國人に殺戮せられて一も成功せしものなし今日尚彼國內の消息を詳かにするを得ざりき是れ師の談話の最も珍重すべき所以なり時事新報記者曩に師の談話を筆記し數十日間紙上に連載して江湖の歡迎を博せり今回弊館更に師の校訂を經て前に遺漏せし所のもの悉く具備して之を上梓するに至れり然るに今や西藏は吾人の最も注意せざるべからざる境遇にありて英國は近頃遠征隊を彼國に送らんとし露國亦之れに對する運動をなさんとす若し夫れ此世界に於ける秘密國の眞相を知り英露の彼國に於ける勢力消長の如何を知り且又非常に活潑なる精神的活動を知らんと欲する者は師の辛苦經營の偉蹟を讀んで其稗益を得給ふべし

西藏の秘密は本書により暴露せらる

東京　博文館發行　本町

發行所（電話下谷九一九）東京市本郷區西片町十番地　反省社

MADE IN JAPAN